594-192
1200501527145

綜合歐羅巴地誌

139

帝國圖書館藏

佐藤弘編著

政治經濟地理叢書

綜合歐羅巴地誌

東京　共立社刊行

昭和六年三月二日
帝國圖書館

194-192

序文

地理學と云ふ科學は、極めて多くの自然科學と文化科學と、その研究の對象を共有にしてゐる。併し、地理學は、それ自らに固有の領域を持つてゐる。それは地誌である。統一的な全體を構成してゐると看做される、特別な一地域をとつて、この地域の自然景觀の特性を陳述し、更に、この地域に於いて、その自然還境に支配せられ、それに順應しながら、價値を實現し行く人類の文化現象の特性を論述し、かくして、その地域に於ける自然、文化を綜合、統一して觀察することを以て、その使命とする地誌こそ、地理學の本質である。從つて、地誌の研究は、地理學の本來の目的である。かく考へて居つた折から、マハチェックの「綜合歐羅巴地誌」Europa als Ganzes の原書を手にしたとき、これはいゝ書物だ、是非飜譯してみたいと思つた。それは原書の體系や內容が、優秀なばかりでなく、本書は必ずや本邦の斯學を隆盛ならしむるだらうと思惟されたからである。

爾來、自分は原書を屢々 durchblättern したのであるが、色々な理由で、これを飜譯する機會がなかつた。が、丁度そこへ、國松久彌君、辻由次郎君、宮本傳次君などの援助を得たので、愈々本書の上梓が行はれる樣になつたのである。

かかる關係から、而かも急いだために、譯語の不統一や文章の杜撰は、いたるところにみられ、魯魚の誤りも點々として指摘せらるゝ狀態で、全く慚愧に堪へないところである。が、これらの點に關しては、廣く江湖の御叱正を俟つて、これが完成は他日に期したく思つてゐる。

昭和六年一月

編者識

目次

第一章　歐羅巴洲、位置並びに一般構成……一
第二章　內部組織並びに表面構成……一〇
第一節　歐羅巴地質史綱要……一〇
第二節　構造的、形態的地方分類……一八
第三節　現代起伏形態……三一
第三章　水系……三八
第四章　氣候……四五
第一節　一般的性質……四五
第二節　氣候區……四七
第三節　流出諸關係……六三
第五章　植物被覆並びに動物界……六六

第一節　概觀……六六
第二節　植物地帶並びにその野獸……七三
第三節　栽培植物並びに家畜……八二
第六章　歐羅巴の人類……八七
第一節　居住の進行……八七
一、先史時代の民族……八七
二、原史時代の民族形態……九一
三、歷史時代に於ける民族形態の變遷……九六
第二節　現代の人種形態及び民族形態……一〇二
第三節　人口の移動……一一一
第四節　歐洲列國……一二一
一、歷史的概觀……一二一
二、現在の國際狀態……一二六
第五節　人口分布……一三五
一、總論……一三五
二、人口密度の分布……一三八
三、聚落の分布……一四四
第七章　經濟的狀勢……一五〇
第一節　總論……一五〇
第二節　農業……一五九
一、栽培農業……一五九
二、牧畜業……一七九
三、養蠶業……一八五
第三節　林業……一八七
第四節　漁業……一九〇
第五節　鑛業……一九二
第六節　工業……二〇七
一、概觀……一〇七

二、各種工業の現勢……二一二
第七節　交通……二一八
一、概觀……二一八
二、陸上交通……二二一
三、空中交通……二二八
四、內陸水路……二三一
五、海上交通……二三九
第八節　商業……二四四
ヨーロッパの自然的景觀……二五〇

挿圖目次

第一圖　ヨーロッパの氷河時代地圖……一七
第二圖　ヨーロッパの構造圖……一九
第三圖　ヨーロッパの水系分類……三五
第四圖　ヨーロッパの降水量……五八
第五圖　ヨーロッパの晴天繼續日數……六〇
第六圖　ヨーロッパに於ける耕作地帶と耕作限界……八四
第七圖　ヨーロッパの民族移動通路……九四
第八圖　ヨーロッパの人口密度……一三九
第九圖　ヨーロッパの都市分布……一四九
第十圖　ヨーロッパに於ける春小麥の產地……一七〇
第十一圖　ヨーロッパに於ける冬小麥の產地……一七一
第十二圖　ヨーロッパの森林分布……一八九
第十三圖　ヨーロッパの鑛山圖……一九四

第十四圖　ヨーロッパの水力分布圖……二〇九
第十五圖　ヨーロッパの大工業分布圖……二一二
第十六圖　ヨーロッパの急行列車線……二二七
第十七圖　ヨーロッパの空中交通圖……二二九
第十八圖　ヨーロッパの空中交通網……二三〇
第十九圖　ヨーロッパの空中交通網……二三一
第二十圖　ヨーロッパの陸上交通圖……二三三
第二十一圖　ヨーロッパの自然的景觀圖……二四九

附圖

一　ヨーロッパに於ける家畜の分布……一八二—一八三
二　ヨーロッパに於ける紡績錘數の分布……二二二—二二三

綜合歐羅巴地誌

第一章　歐羅巴洲、位置並びに一般構成

地球のあらゆる地塊が組織付けられ、又常に地誌學的叙述の基礎をなす地理學的空間として十七世紀中葉以來、かの一般に洲（Erdteil）—それは多大の共同特徴により統一される自然的單位を通例意味しないことは明かなるにも拘らず、—その洲と呼ばれる地群が恐らく考察されたのである。それ故に、バンゼ（E. Banse）は普通の洲境を顧慮せず、大體單位的特質、若しくは「環境」—それをも洲として表示した—をもつ一系列の大景觀（Grosslandschaften）の中に地表面を分割せんと試みたのであつて、彼により爲された構成方法はその細部に於て、彼の命名と共に幾多の矛盾に會したが、彼の試みは原則的に確かに正しい。かくして古い意味の一洲が往々バンゼの意味に於ける數洲に分割されたがために、多少の例外はあるも、普通の洲境界の內に多くの大景觀の分類が行はれた。從つて、此處に於ても我々をして通常の洲概念に固執せしむるものは單に實際的需要の要求及び因襲のみではない。

此の意味に於て、我々は先づ第一にアッシリアの命名形態 ereb（暗黑、西洋）に關聯して歐羅巴なる表現が採用され、既に古代の諸地理學者が歐羅巴を一獨立洲なりと認識して、否むしろそう感じて東洋アジア（aqu＝燦然たる、日の出、より）に對立せしめたところの空間の「洲の性質」（Erdteilnatur）を問題としよう。しかし此の二地塊が一系列の自然的共通特徴により結合されることは認めざるを得ない、從つて、既に一八五八年ロイシュレ（Reuschle）がこの二地塊をユーラシア（Eurasia）なる單一大陸として總括したのである。その北極海岸はアジアの東岬より白海に至るまで殆んど中斷されない低地帶を伴ひ、ユーラシアの成生から云つて、若い褶曲山脈の統一地帶は、歐亞兩洲の慣用境界に於て複雜な工合で密接に結合してゐる肢節をもつ亞細亞の南部と地中海的歐羅巴を貫通してゐる。ユーラシアは北方に於てはより古き褶曲によつて固定し、從つて、廣義の構造學的に統一せる一地塊――現今地質學の方からユーラシアなる表で制限的に呼ばれてゐる――地塊に碎けてゐる。それ故に、我々は既にフンボルトが爲した如く構造學的及び地形學的見地より歐羅巴を獨立せる洲としてゞはなく、單にユーラシア（廣義の）の西方端地（westliches Endland）として把握し得るのである。

さり乍ら一方歐羅巴はアジアより完全に分離した若干の獨立の特徴を有し、それが歐羅巴に獨特の個性を刻印してゐる。唯東歐羅巴のみは多くの點に於て、就中その地理學的諸要素の大規模、單調及び統一性により、アジア軀幹の一純部分としてアジアを回想せしめ、從つて、地文地理學的見地からしても當然半アジア（Halfasien）として表示され、また東歐羅巴の氣候、植物、土地及び栽培の諸帶は妨げらるゝことなくウラルを超へてアジアにつづいてゐる。

しかし乍ら、バルト・ポント陸橋（baltisch-pontische Landbrücke）の西方卽ち恐らくはメーメル――ドナウ河口線の西方に横はる總ての土地は西方海洋に開け、同方向を示してゐる。此處では非常に豐かな水平及び垂直肢節が形態の多樣性と人類の居住及び經濟の自然的條件とを創り、それ等も亦西アジアのそれから完全に隔絶してゐる。從つて、ズーパン（A.Supan）は歐羅巴を洲として、或はアジア半島若しくはその先端地としてでなく、單にそれを人文地理學的概念として認めることにより、中、西及び南歐を包括する土地複合體（Länderkomplex）――此處では北歐も亦それに加算されねばならぬ――を歐羅巴半島（"europäische Halbinsel"）と呼び、東歐軀幹に對立せしめたのである。

しかし乍ら、歐羅巴の住民は又、アジアの大部分と血族親緣關係あるにも拘らず、文化文明に就き、アジアの住民と生活條件の大多樣性の爲に非常な差異がある。更に、歐羅巴の住民そ

れ自體が血統、言語、歴史及び人生觀の多樣性によつて如何に構成されまた往々特殊の且獨特の文化を展開した如何に多くの民族に寸斷されようとも、文明の高度と活動との或る均齊は見落し得ないもので、その均齊は歐羅巴をアジア及びアフリカから分ち、種々の點に於て歐羅巴洲の內部に均一的に作用し、諸民族の運命の相互結合により歐羅巴の個々の部分が內的に滲透し接觸した結果完成されてゐるものである。それは屢々誤用される所謂歐羅巴文化なる概念で、人類の歐羅巴化はこの文化概念より發してゐる。しかし、この空間的素質の多面性、歐羅巴半島の狹小空間性、諸民族及び諸國家の生成發展にとつての地理學的基礎の多樣性——これが幾度も衝突材を生ぜしめるのだが——の中にこそ歐羅巴洲の或る悲劇性が基礎づけられて居り、歐羅巴はより大空間的に、より大規模に構成された北アメリカ等と異なり、恐らく決して諸地方及び諸民族を總括して政治的統一にまで達し得ないだらう。この根據だけからしても歐羅巴はその新競爭者に對し殿軍を承はらざるを得ない。此の弱い要素の中にも歐羅巴の個性が表はれてゐる。それ故に、我々は歐羅巴を單にヘツトナー(Hettner)の如く曾て採用された歴史的傳統の爲のみでなく、地誌學的及び人文地理學的意味に於て獨立洲なりと認め度いのである。

歐羅巴の境界は海により三面で明確に與へられる。南に於ては地中海が、ヂブラルタル海峽(十四粁)及びチユニス海峽(百四十粁)に於て歐羅巴に接近してゐるアフリカに對して境界を形成してゐる。一方、諸島集彙するエーゲ海に於て境界を劃することは確かに困難であり、殊に此處では希臘と小アジア間の關係は益〻非常に密接になつてゐる。海の深さの諸關係も亦何等充分な標點を示さない。寧ろダルダネル海峽から西南へ、次いで東南へ向つて經過する一線が歐羅巴のキクラーデン群島(Kykladen)、北方シユポラーデン群島(Sporaden)及大トラキヤ諸島(レムノス、イムブロス、サモトラキ)を歐羅巴に算入されるカソス及びカルパートスを除いた小アジアシユポラーデン群島から可成り習俗的に分割してゐる。ダルダネル及びボスポロスの沈降谿谷はマルモラ海なる若い深い陷沒盆地によつて分たれ、境界を黑海へ導きケルチユ(Kertsch)の交叉水道はクリミア半島をアジアのコーカサスから分割してゐる。

ロシアの知識及び發展が進むにつれ益〻東方へ推移せしめられる歐羅巴の東境は取扱ひ難くなり且甚だ論爭がある。イオニアの地理學者時代以來十八世紀に至るまでドン河がアジアに對する境界として重要な役割を演じてゐたがストラーレンベルグ(Strahlenberg)(1730)の提案——パラス(Pallas)(1777)及びリツター(K. Ritter)もそれに從つた——以來も尙ウラルを歐羅巴に加入されるのが常だつた。といふのは歐羅巴は西部に於ては丘陵多き前地から全く漸次的に凸出し、

一方東にあつては全く何等の中間物を經過せず恐らく第三紀テチス（Tethys）（註を見よ）の盆地を氷洋と連結した最近の入江の海蝕によつて鋭くされる陷沒帶（Bruchstufe）に沿ふて西シベリア平野の方に傾斜してゐるからである。次にカスピ沈降地（die Kaspische Senke）が全然、或は部分的にアジアに加入されるべきや否や、換言すれば境界はウラルの分裂せる南部からエムバ河及び裏海の北岸に沿ふか、それとも低地の北線に於てオブシユチヤイ・シルト（Obschtschei Syrt）の傾斜とヴオルガのベルグウーフア（Bergufer）及びエルゲニー丘の東邊に沿ふか、何れに劃さるべきかといふことが尙論爭のまゝ殘つてゐる。しかしヴオルガの流をこの後者の線によつて切斷することはカスピ沈降地が表はしてゐる樣な統一ある自然領域を歐亞の二洲に分割するよりは、より合理的の如く見える。最後にマニチユ沈降地（Manytsch-Senke 黑海より二五米）は北コーカサス前地に對する境界としてエルゲニー丘隆地の南部よりアゾフ海へ通じてゐる。

（註）歐羅巴附近の諸島の所屬に關しては疑問は存し得ない。北極洋の諸島の中、ノヴアヤ・ゼムリヤ（Nowaja Semlja）は尙歐羅巴の陸棚地（Schelf）の上に突起して居り、シユピツツベルゲン及びフランス・ヂヨセフ・ランドも亦唯比較的淺いバレント海によつてのみ大陸と分たれてゐる。アイスランドはグリーンランドと共に一つの古い廣大な陸橋の殘餘として歐羅巴に連結する海洋下の隆起上にあり、從つて、歐羅巴と北米間の中間地位を占めてゐるがその住民、文化及び歷史により本質的に歐羅巴に接近してゐる。大西洋の亞熱帶部分に於る諸島の中、アゾレン及びマデイラは廣大な深い海により大陸から分たれ、確かに純粹な大洋的火山島である。

ワグナー（H. Wagner）によれば、マニチユ沈降地、カスピ沈降地の北緣及びウラル山脈の東麓に至るまでの境界內に於て、歐羅巴は九、四六〇、〇〇〇方粁の面積、アイスランド極地諸島、ベーレン島を加へたシユピツツベルゲン、フランス・ヂヨセフ・ランド及びノヴアヤ・ゼムリヤを含めて、九、七四〇、〇〇〇方粁の面積を占め、從つて、單に地表面の約七パーセントを包含してゐるに過ぎない。大陸の最先端的諸點は、マゲレー小島（Magerö）の北岬（北緯七一度一二分）、スペインの南端なるタリフア岬（北緯三六度）及びポルトガルのロカ岬（西經九度三〇分）であり、西經一度遠くにはアイルランドの西端、ダンモアヘツド岬がある。歐羅巴の東境は東經約六五度に於て經過してゐる。

歐羅巴は殆んど皆溫帶、しかも人類の文化にとり特に好都合なる北方部分の中に在り、もし我々が限界決定に際して數學的線でなく、最高溫度の月の一〇度等溫線なる氣候的線を使用するならば大陸のごく小部分が寒帶にその影を消すのである。從つて、歐羅巴は既に此の理由のみからしても、また更に遙か東方に及ぶ溫暖の大西洋の影響の結果、氣候狀態の特殊な惠――そ

れは人間を衰弱せしめる熱帶の作用からも亦人間の生活に敵對する寒冷・乾燥の沙漠の影響からも脱れた恩惠に浴し、人間をその能力の最大可能の緊張へと敎化してきたのである。アジアとの大きな土地結合及び歐羅巴のアジア的アフリカ的東洋との密接な連結は有機的世界の發展と歐羅巴人類の歷史とに對して屢々決定的、或時は促進的或時は妨止的意義を有してゐるのであつて、これに對して一方へレニズムとキリスト敎の普及、他方アジア遊牧民の屢〻繰返された侵入がその例として擧げられる。そして歐羅巴は大西洋への展開性のために、新舊世界間の媒介者となり、亦殆んど全地球を包括する文明の中心たり得たのである。この重大な役目を精神的物質的世界交通に於てはたし得たのは、歐羅巴の西部及南部の海の深い侵入――それは歐羅巴の水平的肢節の非常に高度な內容を制約してゐるのだが――によつてゐるのである。だが諸半島（フインランドを含む）は總表面の四分の一以上を占め、極地諸島を含めば約七五萬方粁が諸島に當り、從つて、肢節は總表面（約三五〇萬方粁）の三分の一以上（より精密に云へば三四パーセント）を含んでゐる。

非常に高度な大肢節を示してるこの長所は殆んどあらゆる歐羅巴海岸の非常に廣汎な小肢節によつて強められてゐる。この小肢節は海が陸の諸谷に侵入し、かくて谷はその形態及び配置に從つて夫々多種多樣の種類及び大きさの入江に變化したところのかの近い過去の地質時代に於ける重要な沈降事象の結果によつたことは明かである。極めて强度な海岸發達及び多數のよき自然港はこの大なる個々の分裂肢節の結果によつてゐるのである。

最後に垂直肢節の諸幹線の配置は更に好條件を提供してゐる。それは交通をして陸地の內地へ容易に侵入せしめ、個々の地方をアジアに於ける如く隔絕せしめずして相互に開通せしめる。位置及び一般構成の此等總ての長所が無くなる所に、歐羅巴の多樣性に代つて、アジアの單調性が現はれてゐる。

第二章　内部組織並びに表面構成

第一節　歐羅巴地質史綱要

歐羅巴の多種多様な隆起及び高度の大水平的肢節は個々の部分に於て非常に趣を異にして經過した地史の結果である。歐羅巴の重要部分は地殼の labilen な諸地塊に屬して居り、又より古き諸褶曲に從つて、及びそれより生成した山脈の平坦化に從つて、比較的淺い外大陸的トランスグレッションに度々滿され、そして遂には地橋により細分されたのであるか或は又、新らしい諸褶曲山脈が發生した所の廣汎な地層の向斜の領域内に在るか、その何れかである。前者は全中歐及び北歐について、後者は廣義の地中海領域について妥當し、從つて構造學的にも形態學的にも根本的に異なる二領域としてショレンランドと若い褶曲地(ファルテンランド)とが對立してゐる。

成果の中に詳細に把握し得る最古の山脈形成はアルゴンキン時代の末期であつて、バルト楯狀地及びロシア卓狀地に對して最後の褶曲を暗示してゐる。これに續くアルト古生代トランスグレッションは恐らく歐羅巴を全部襲つたのである。そして大規模の Überschiebung によつて

特徴付けられたカレドニア山系は海の一般的退化の結果としてデヴォン紀初期に生成したのであつて、そのカレドニア山系は歐羅巴に於ては二大灣曲卽ち、北アイルランド及びスコットランドに於て西北への推移をもつてゐる「カナダ・西北歐羅巴灣曲」と西スカンヂナヴィアから東方への推移をもつてゐる「スカンヂナヴィア・シベリア灣曲」とによつて代表されてゐる。この山脈形成から生じた大デヴォン大陸、卽ちワルター(J. Walther)が極めて偉大な「古赤色砂岩(Old-Red-Sandstone)の分布に基いて名付けた「赤色北方地方」("rote Nordland")は歐羅巴に於てはイギリス諸島の大部分、スカンヂナヴィア及び今日兩者を分つ北海を包含して居り、更にデヴォン大陸の大部分は、バルト楯狀地に對して恐らく最後の一般的海被覆を意味する中期及び前期デヴォンのトランスグレッションに滿されてゐるが、一方、同樣古い地塊に屬しそして概して常に深くに横はるロシア地塊は、爾來更に多くの外大陸的氾濫を經驗してきてゐるのである。炭質石灰岩及び無煙石炭層を地床にもたらした廣大な後期石炭紀の海洋被覆の上に、大中心的山脈形成が續いて居り、然かもその形成は、後期石炭紀に於ける支脈より始められ、幾多の頂上をもつて完成され、その支脈に於ては遙かにペルム内まで達し、新らしい見解によれば北方大陸ユーラシア及び南方ゴンドワナ大陸の分離によつて生成した所の廣大な海洋空間

に於ては諸幹線の一配置を以て完成され、その配置は、コスマット(Kosmatt)及びスタウブ(R. Staub)に從へば歐羅巴の現今の山脈の配置にとり決定的なるアルプス山脈形成の設計に、廣汎な類似を示してゐる。歐羅巴の中心山脈の北面は北方大陸塊の南邊にて、先づ第一に北方へ開けた平たい彎曲、アルモリカの彎曲の形をなして南アイルランドより西南イングランドを貫通し、アルデーネンの方へ、次いで同じく北方へ突出したヴァリストの彎曲として北フランスのシャールング領域よりライン群山及びハルツ群山を貫通しズーデーテン山脈の方へ向つてゐる。しかし中心的主要山脈は、今日では唯ガリシア州及びカスチリアに尙痕跡を推持してゐる一大地塊に明らかに影響され、西歐に於ては南方へ反り、ポルトガルにて大西洋に達してゐる。東翼もポドル・ロシア地塊の影響を受け、同じ樣にズーデーテンより西南へ反り、東方へ還つてドブルヂアにまで達してゐる。更に、被覆形成により特色付けられた中心的褶曲山脈及び中央フランスの、並びに中央ドイツ群山の入口なる領域に於ける、結晶的塊狀山彙は內側に從ひ、最後にアルプス山脈の中心的支脈はその中心根幹と共に最奧帶として內側に從つてゐる。

中心山脈はペルムに於ても展開した軀幹面への廣汎な折返をなし、その面の一部は後の沈澱被覆により再び露出されてドイツの塊狀群山のうちに於て今日も尙我々を迎へる。しかし乍ら、大部分は、それに續くチエヒスタインより前期白堊に至るまでの繰返されたトランスグレッションの淺い河湖形成下に覆はれて橫はり、その白堊は所謂サクソニア山脈建設なる屢〻繰り返された變形、特にヂユラ及び白堊の轉變期へ降りかゝつた常闇の相の變形によつて種々の强烈なる攪亂、龜裂を受け、之によつて錯雜せる弱い褶曲をなした。しかし歐羅巴の南方に於ては、海の輪廓と深さの多くの動搖に從ひ、主として石灰質性の漠大な海の沈澱物が層となれる廣大なジオシンクリナール、卽ちテチスが出來た。此の海床に於ける褶曲運動は、北方東アルプスに於ける如く、唯所々に眞の山脈を構造したのみだが、旣に後期中世代に始まつた。第三紀以來此の運動は、大抵中期漸新世に於てその頂上に達し、更にその上に再び褶曲の消衰が現はれた所の極めて複雜な被覆推移にまで强められた。大陸の沈降平原及び侵入盆地の廣大な降昇、陷沒並びに火山現象を伴ひ、或は續起せしめて、此等の事象より歐亞のアルプス系の新褶曲山脈が生じたが、その今日の高さ及び突起の大なる諸列の配置を規定したものは實に此等の後構造學的外殼運動及び構造學的形態の同時的破壞とであつた。

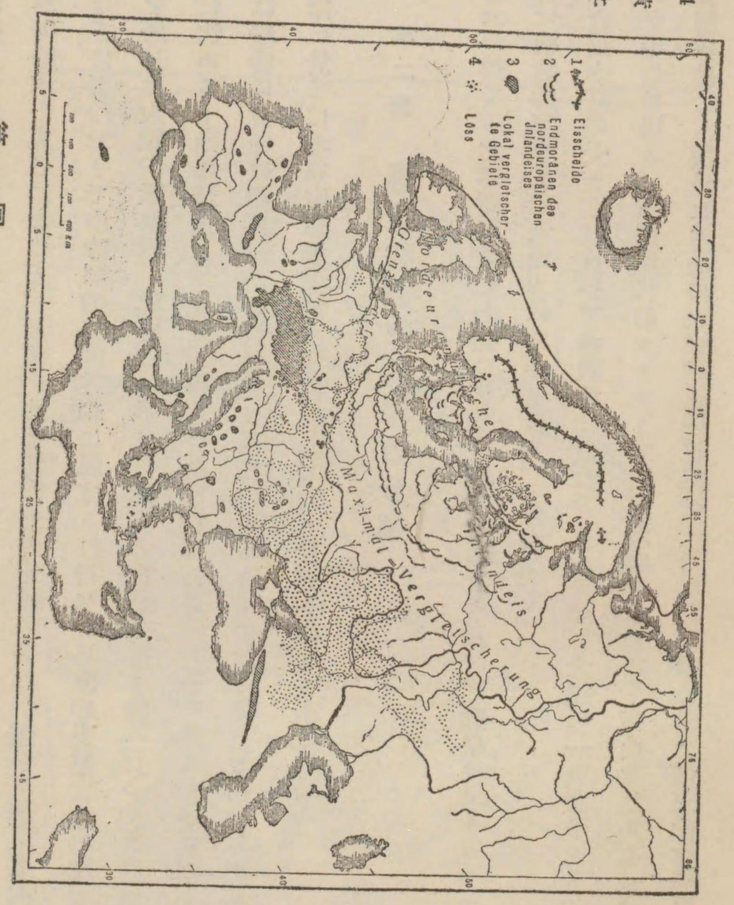
地中海的歐羅巴の山脈形成事象と共に、及び明らかにその事象により生ぜしめられて、同時

に外アルプスに於ても亦平らかな隆起彎曲、及び垂直的地塊變動が起り、此處に於ても今日の起伏にとり決定的なる若い地質構造を北、中、西歐の古い褶曲軀幹の領域に於て創造したる火山過程が起つた。しかし地中海の歴史も亦全南歐の褶曲帶の生成と密接に結合して居る。中期中新世に於て、押し集められて狹くなり、且つ大なる島柱により中斷された南方の主要盆地から、褶曲の漸新紀の頂上の方へ長く延びた一入江が、下流ローヌ峽谷を貫通し前方に展延し、アルプス及びカルパチアの外縁に於て、黑海盆地の北部を經過し、カスピ沈降地を貫き東方に延びてゐた。しかし地中海は鮮新世の初めに當り黑海段階に於て、小殘餘及び廣汎な陸地湖を除き、悉く消滅させられ、ユーラシアはゴンドワナランドと鍛接された。鮮新世が進み更に再び兩大陸の分離が起り、同時に陸地の著しい隆昇と共に、一部は陸地に接合された新らしい沈澱物の褶曲のもとに、一部は所謂中間塊狀山彙(Zwischenmassive)に代り、一部は例へばエーゲに於ける如く褶曲弧の内部に陷沒を通じて三粁乃至四粁の深さの侵入海が起り、それより始めて今日の半島及び島嶼弧の形狀が生成した。かくして氷河時代以前歐羅巴地塊の輪廓は既に大體與へられて居つたのである。

地質的過去の最近時代、卽ち四回も再現し、氷の無い、又は小くとも氷河の乏しい時代により分たれた氷河被覆を以てる洪積紀は表面構成及び歐羅巴の廣大なる部分の土地被覆にとり重要なものであつた。(第一圖參照)。第三紀初期の運動により著しい高さにまで高められたスカンヂナヴィア山脈及び殆んど高められなかつたバルト海の楯狀地は、どの氷河期に於ても内陸氷河(Inlandeis)の生産地域であり、その内陸氷河は、今日の北海の空間を越へ、西南へ恐らく六百五十萬方粁を以て最大展延をなして居つた時代には、イギリス諸島では地方的に生じた氷塊により增大せしめられ、運動方向に影響を受けて最南イングランドのみを除きイギリス諸島を蔽ひ、ライン河口より恐らくは中央ドイツの山脈の麗に至るまで南方へ延び、フインランド、北及び中ロシアを越へ東南へドニエプル及びドン領域に於て、二大彎曲を南方北緯四十八度まで送つた。一方生産地域に於ける氷は主として掃除研磨作用をなし、固定せざる大地被覆を除き、前氷河の基礎の描き出された深い線に沿ひ開鑿作用をなしたが、氷河の溶解する領域に於ける比較的平たい地方は氷及び溶解水が時には數百米の厚さに達する堆積作用をなす舞臺であり、その堆積作用は波形の或は低い丘陵的基堆石並びに最終堆石地及び河成氷河時代の砂礫及び砂の廣大な殆んど完全な平面を殘した。總ての此等の層形成から、氷河時代の就中最後の氷河期の寒冷乾燥時代に黃土が風に吹き立てられた塵埃として生じ、その塵埃は古い氷河被覆の

緣で廣い帶をなし、殊に南ロシアに於て廣大に擴がつた。同時に、最後の氷河期に今日の雪線高度下千二百米乃至千三百米に横はつて居た一雪線高度附近にてアルプスは如何なる氷河期にも氷流網に滿され、その網の尖端は北方アルプス前地に於て眞の前地氷河被覆を造り、南方に於ては丁度ポー平原の緣に達した。しかし、東方にては多少深く山脈に刺さつて殘つて居た。此處に於ても亦山脈内部の重要な侵蝕作用の一帶と分離して居た。孤立せる氷河被覆の諸中心は、西、南、中歐の高い山脈、特にピレネー山脈、カルパチア山脈及びバルカン半島の山脈になり、その結果それ等には氷河作用に特有な景觀形態が刻印された。

氷河時代にも亦構造的運動は中期及び後期第三紀層の造山（Orogenese）の停止運動として山脈隆昇及び沈降原野の永續的續沈の形で續き、少數の場所では火山現象も更に續いた。土地輪廓の重要な諸變形は、地中海領域に於て、歐羅巴を小アジアと結合する褶襞列の方向へのエーゲ海の斜侵入、硬い土塊の場所に於ける黑海の侵入、ヂブラルタル及びチユニス兩海峽の形成及び北アドリア海の領域に於ける氾濫により起つた。他の諸變化は北方に於て、大ブリテンを大陸より分離せしめたる北海の近代形成により、後氷河時代の末葉までも及べるバルト海盆地の漸次的形成により――北歐の平たい及び低い部分並びに北ドイツの低地の古い沈降地方の數回



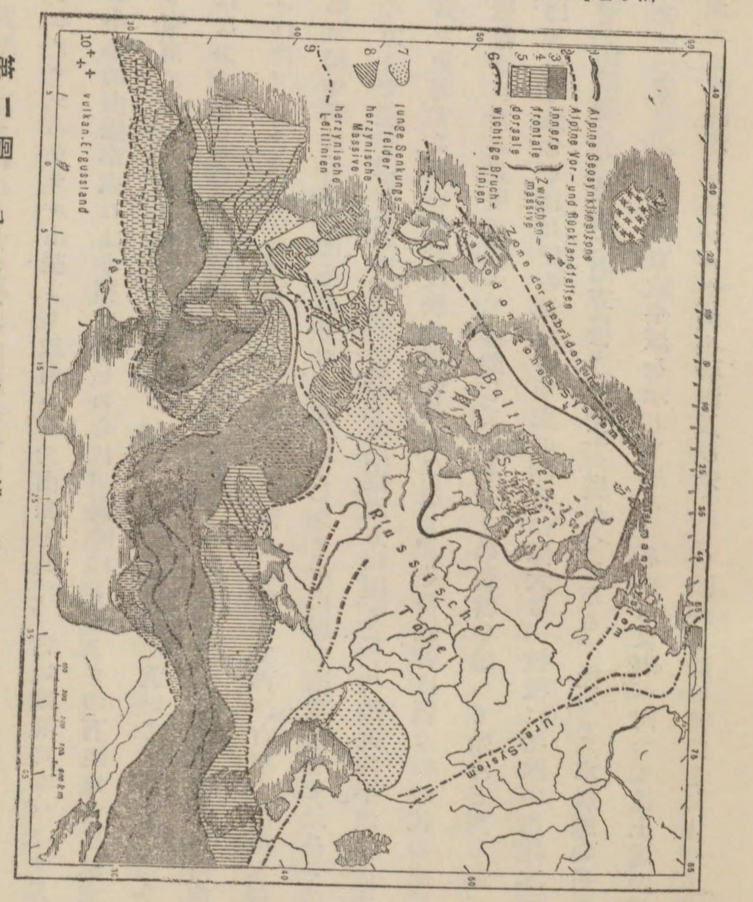
第一圖　ヨーロッパ氷河時代地圖

の廣汎な氾濫はこの形成も結び付いて居たのだが――更に北ロシアの平たい部分を越へての北氷洋の末期氷河時代の災厄によつて、最後に此等沈降地の比較的平たい部分を越へ黑海との一時的結合をなすに至つたまでの時間的には詳細に規定され得ない裏海の災厄によつて起つた。僅かでも度を過した大陸の隆昇及び沈降は一般に海岸線の形狀を屢〻變へたが、その結果沈降形態と水中に沈める土地の形態とが今日も尙重きをなしてゐる。しかし乍ら、その外に地中海領域に於ては變動の意味は場所及び時代に從ひ現代に至るまでに屢〻變更され、一方最後の沈降の北方海岸に於ては北東海領域に於て尙繼續してゐる隆昇が繼起したのである。

第二節　構造的、形態的地方分類

地質的過去の總ての之等諸事象の基礎に於て、地方的地質學及び形態學はヨーロッパをよく個別化された構造的形態的四大地方に分つてゐる。（第二圖參照）。

A. 約五百萬方粁の大かさの**ロシア卓狀地**は太古のユーラシア大陸の一肢體であり、地殼の一最硬地塊を示して居る。該地塊は前カムブリア山脈形成以來もはや褶曲せしめられず、著しい垂直的地層轉位にも襲はれなかつたが、その位置が一般に深い爲に若い第三紀に至るまで尙



第二圖　ヨーロッパ構造圖

屢〻多少の廣汎な災厄に滿された。古生代の海洋被覆の後、ウラル山脈はノヴァヤ・セムルヤ及び西北へ分岐せるチマンのウラル山脈より放射された山脈と共に、古い地塊のシベリア及びロシアの部分間の中心的山脈形成により褶曲せしめられ、同時にドネッツの石炭地方は孤立せる前地褶曲により東南に延びてゐる褶襞の中に置かれたが、其他の點に就いては諸地層は全く僅かしか曲げられなかつた。次の大陸時代に於て此の諸層の合成物の大塊は再び崩され、褶曲地方は再び平坦にされた。ヂュラ及び白堊紀の最近の災厄は南より發して再び古塊の廣汎な部分を蔽ひテチスの第三紀始新世の災厄は全南ロシアを包含しウラル山脈の南端邊まで及びその東麓に沿ひ北氷洋の方まで達し、第三紀中新世の災厄は黑海地方に限られた。最近の平坦化は土地を非常に僅かの高さを有する極めて平波狀の軀幹景觀に崩し、その軀幹は種々の時代の或は弱く或は多少强く攪亂されたる諸層を越へて移動してゐる。その軀幹を越へて殆んど到る處に高さの差異がそれによつて減ぜられた所の洪積層形成の非常に偉大な一被覆に北歐の內陸氷河の諸堆石、河成氷河の沈澱物及び最後に南方にては黃土が廣がつてゐる。從つて、卓狀地の遙かに最大の部分は非常に完全な平地卽ち東歐平原を示して居る。それは東南へ向つては上述の境の諸傾斜により、カスピ沈降地、オブシュチヤイ砂洲及び新らしい隆昇と弱い褶曲とによつて形成されたエルゲニー丘に對して明かな境界をなして居る。同樣に此等隆昇により裏海及び黑海の盆地の洪積紀結合は再び廢棄されたが、マニチュ沈降地は東歐平原を尙コーカサス前地から分つて居る。東歐平原は西北へ向つては東北に延びて居るフインランド灣の沼澤及び窪地によつて斜にラドガ、オネガ兩湖を越へ白海、所謂カレリア沈降地に至るまでの地帶によつて與へられるバルト楯狀地に對する境界の方まで達し、西に於ては波蘭、北ドイツの平原の方へ廣く開けて居る。東に於ては大體古褶曲の地方の中を走る第三紀の斷層によつて最近一山脈に取り出されたウラル山脈が北緯七〇度及び四七度の間に主としてペルムより成る丘陵多き前地の上に聳えて居る。その南部は最後に短かい灌木林の櫛に寸斷される所の平たい彎弧に曲げられ、北方へノヴァヤ、セムルヤにつづいてゐる。新らしく窪んだペチョラ盆地を主塊の平らかな一部として卓狀地に組入するチマンは比較的弱く高められて殘つて居る。其他、恐らく新らしい彎面によつて生ぜる微々たる諸山脈、卽ち所謂丘陵山脈が、特にヴォルガ及びドビナ間の分水界を形成する北ロシアの丘陵の如き個々の臺地片と諸流域、ヴォルガ、バルト海の及び黑海の河川の重要な源泉にして一部は最後の堆石により生ぜる高さ三百二十米迄のヴアルダイ丘、及びドネッツ彎曲の破壞より生ぜる唯高さ三百七十米のドネッツ臺地を分つて

ゐる。

B. 約 $1\frac{2}{3}$ 百萬方粁を包含するフェノスカンヂア(Fennoskandia) 卽ちフインランド及びスカンヂナヴィア——但し半島ショーネン (Schonen) を除く——は成程構造學的にも形態學的にも一單元ではないが、しかし、一連の共通特徵により統一することができる。それは一方バルトの楯狀地——此の楯狀地はその最後の前カムブリア褶曲により最古のユーラシヤの一片として現はれる——のアーキヤ・アルゴンキの臺地を包含し、他方極めて錯雜せるその內部組織をカレドニアの山脈形成に負ひ、半島の西部を滿たすところのスカンヂナヴィア山脈(スカンヂナヴィア及びコラの最外北部に於けるチマン系の支脈と共に) を包含し、最後に外部へブリデン群島と同じ種類の太古の山系の殘餘としてロフォトのグナイス帶を含んでゐる。しかし乍ら、總ての此等部分にとり、デヴォン紀以來精々緣のみ海の災危に見舞はれるといふこと、從つて此等は非常に永い大陸諸時代に甚だ深い破壞を受けたといふことは共通である。しかし、バルトの楯狀は海面上可成り僅少の高さを常に維持して來、從つて臺狀に橫はる太古古生代の沈澱の唯全く孤立せる殘餘をもつた部分的に破碎された結晶塊狀臺地の性質を主として負びて居るが、西方塊地は度々高められ遂に新らしい第三紀層に於て强く高められ、それに應じて特に緣に於て深く溪谷化され、それにより既に氷河前に一山脈に溝成された。だが兩部分は氷河時代の氷河の開鑿的並びに平均に地を均らす作用により初めて決定的形態構成を得たのである。それによりバルトの楯狀地は大規模の圓形丘狀隆起ある景觀になり、西部山脈地方、卽ちその南諸威の部分に於ては古い氷河被覆により、末だ完全に溪谷化されてゐない古い表面の殘餘としての單調な僅かに刻み出されたフィヨルドと、緣からフィヨルドの中へ深く切れ込んでゆき氷河的に形成されたフィヨルド及びフィヨルド谷との間に明確な相反が生じた。同樣に氷河時代の氷河の一作用は全フェノスカンヂアに特有の湖の豐富及び河川の水勢である。

C. 西歐及び中歐の地塊は、歐羅巴の大陸基底の上に尙全然橫はるイギリス諸島を包含せる島の一部へ、及びフランス(ピレネー、アルプス、ヂュラに於ける部分は除く)並びに中歐のトランスアルプス部分を包含せる大陸の一部へ組織付けられ、其上に小附屬物としてフェノスカンヂアに於てショーネン半島が加はる。構造學的構造及び形態學的形狀は非常に多種多樣ではあるが、比較的新らしい構造史、數回平坦にされた古い山脈軀幹の破碎を共有する諸部分をこの地塊は上述の範圍內に結合してゐる。イギリス諸島ではカレドニア系の諸片はスコットランド、北イングランド、北ウェールス、北及び中アイルランドに於て古い線の北北東より北東ま

での著しい經過と接合し、又新らしい陷沒及び彎曲降起とも接し、而してアルモリカ彎弓の肢節は南アイルランド、南ウエールス及びコーンウオーリスに於て西北西より東南東までの經過と接合してゐる。スコットランドの島山を細分し、ウエールスの半島を分解し、恐らく或部分までアイルランドの周邊諸山をも又凸出せしめた陷沒は主として中期第三紀へ陷込んだ。北アイルランド及びヘブリデン群島に於ける玄武岩の巨大な發露、卽ち、殘餘が猶フェール、エーエル及びアイスランドにも存する大發露臺地の肢節は陷沒より古く、一部はそれと因果關係がある。東南イングランドに於ては平たい地層を以て貫通された背斜段階地方になされた中世代の、古い第三地層の海の被覆の沈澱が國境山彙に解體されたる古地方に關聯してゐる。此等沈澱及びその中斷は英吉利海峽の海岸に切斷されて、北フランスに續き、其處に於て廣大にして、平坦な、しかも陷沒及び淺い褶曲により色々攪亂されたる層盆地に曲げられ、廣義の巴里盆地、卽ち雜然且不均齊に形成された向斜段階地方を建設してゐる。その枠を形成するものは北に於てはアルデーネン森林、卽ちアルモリカの彎弓及びヴァリストの彎弓の凹凸(Scharung)が中に完成されて居るライン國境の西北翼であり、西に於てはブルタニュ(ノルマンデー及びヴァンデを含めて)の同じくアルモリカ的に褶曲せる塊狀山彙、卽ち微かに隆起し廣い諸谷により貫通

Weltgeschichtliche Betrachtungen
Anschauliche Wissenschaften

されたる結晶狀片岩質の軀幹地方であり、南に於てはフランス中央高原、卽ち新らしい陷沒の隆昇により殆んど總ての方面で深い周圍の上に明らかに聳えてゐる主として結晶狀の軀幹地塊である。この軀幹地塊の中に中心陷沒(Scharung)の內角が、南方へ險しく折れ曲り切斷せる周緣にカルスト化されたるカウセス(Causses)に於ける、及びウーベルニュー(Ouvergne)の新らしい火山地方に於ける侏羅紀の一災厄の殘餘たるセヴァンヌとゝもに橫はつてゐる。

外アルプスのドイツにては第三紀層の地殼變動は多くは發展階段に於て、一部は下ザクセンに於ける如く陷沒褶曲として、一部は多くの互に交叉する主方向の中の及び火山現象と結び付いた眞の地塊變動として、又一部は單に强度種々なる隆昇及び陷沒として、軀幹景觀を襲つた。此の軀幹景觀は中世代舊第三紀層の災厄後漸新世に漸く完成された。(ブラウンのゲルマニア軀幹地表參照)。しかし、それ以後恐らく尙數回種々なる程度に於てその完成が繰りかへされた。從つて、中ドイツ山闕は下マースよりオーデルに至るまでヴァリスト系の破片とその地層被覆とより生じた寄木細工、卽ち中央山脈形態をしたラング及びカイル地塊、ホルスト山脈、臺地層、陷沒層及び火成圓頂山脈の寄木細工を形成し、該寄木細工の中にラインの片岩質群山は西の枠及び隅柱として、ボヘミヤ塊狀山彙はその緣の群山と共に東の枠及び隅柱として特に著し

い役割を演じてゐる。此の地塊構造は又ポーランド中央群山内にても、ヘルゴランド及びリューゲンドに於ても、デンマーク及びショーネンに於ても再現してゐる。巴里盆地の段階景觀はマース及びモーゼルの彼岸、隆起彎曲より形成され新ライン濠の兩側にて均齊に整頓された西南ドイツ段階景觀にまで續いてゐる。しかし、中央ドイツ群山闕より北はヴァリスト軀幹、サクソニア山系の及び東に於ても全然西フランデルンより東歐平原への漸次的推移にまで達するバルト海の楯狀地の完全に沈沒した諸片の上に繼續的沈降及び推積の一帶が維持され、主として堆積的形成より成る北ドイツ低地――北海の淺海臺地及びバルト海の一部をも含めて――は此の一帶より生成した。

D. 地中海經曲山脈或は歐羅巴のアルプス等は、テチスの錯雜せる被覆褶曲及び凝集によりアルプス山脈形成の漸新紀の主要作用からユーラシヤ・ゴンドヴァナ兩大陸の間に生じた。その際本來の地球向斜層形成及び被覆組成により特徴付けられたアルプスの根幹山脈と前地及び背後の地のより弱く共に褶曲せる地方とは區別される。兩者の内部には所謂中間塊狀山彙が殆んど硬い地殼片として褶曲されずに殘つて居り、臺狀被覆層をもつ隆起地塊として黄褶曲せる土臺の上にか、或は沈降空間、堆積平原若しくは深く沈降せる進入海の盆地として存し、褶曲進展の經過に影響を及ぼしてゐる。アルプス山脈形成の其後の諸變化はアルプス系の個々の肢節を種々の强度に、往々高山の高さにまで隆昇せしめ、その連關を陷沒及び沈降原によりて色々寸斷してしまつた。

本來の地球向斜層鎖は西はヂブラルタル海峽に始つてゐる。ヂブラルタルに於てはモロッコのリフ(Rif)褶曲及びベチアコルヂレラの褶曲はスタウプ(R. Staub)の説によればズュース(E. Suess)以來採用された如く、西方へ向ふ弓をなして互に結合するのではなく、西南西に向ひ大洋の中へ走り分たれるのである。彼等の間に西北中海の深所に於てアルグロベト塊狀岩が加へられ、その斷片はアルジエリアの北海岸に出現してゐる。ベチアコルヂレラは大被覆鱗をなしてイベリアのメセタに對し、北に向つて集約され、メセタは、北方の前地の中心的褶曲以來硬化せる一片として西、北及び南に對し陷沒緣により境界を劃されてゐる。ベチアコルヂレラはアルプスの變動、大褶曲などの陷沒により個々の地塊に解體されてゐる。卽ちコルヂレラとシエラモレナとして曲突されたメセタの南緣との間にはアンダルシャの第三紀層盆地が西に開け、所謂イベリデンは内部スペインの第三紀層盆地を包み、舊カスチリアの東に於てはシエラ、デゥラ、デゥマンダがカスチリアの中心鎖とともに集合して居る。同樣に褶曲せる前地の諸片

のみはカンタブリア、オーストリア山脈であり、ピレネーの著しく直線的に經過し、殆んど強度の褶曲を受けざる根幹はメセタ、フランス中心平原間の廣い海峽より發して居る。尙西方に對しアクイタニア低地に擴がつてゐるピレネー北邊沈降地がコルヂレラに關し思ひ出さる。

ピレネーは東端に於て三つに分れてゐる。一はカタロニアの週邊山脈を貫きサルヂニアの方へ延び一はライオン灣の彼方プロヴンスの群山に再現し此處に於てアルプスと合し、更に一は南にてスヴァナンよりローヌ河を越へヂュラ山脈がアルプスより分岐する點の邊までも及んでゐる。アルプス山系の內部に於けるアペニン山脈の構造學的地位を說明するのは困難である。兎に角アペニン山脈はゲヌア灣頭で合する西アルプスの單なる繼起でなく、又構造學的に統一せる山脈でもない。我々は此處でもテルミエル (Termier) の研究と關聯してスタウプにより、又他の者により代表されたる見解に從ふであらう。その見解によればゲヌアよりシシリーに至る西に開けた全彎弓は二個の構造學的に異る部分より鍛接されてゐる。西アルプスの直接の繼續が內在する內部彎弓のみにはアルプヌの被覆組織を示して居る。此の彎弓はコルシカの諸片を以てリグリア及びトスカニアのアペニンを形成し、リヴォルー附近で海中へ延びてゐる。しかし次にバレアール群島に於いて再現し、ベチアコルヂレラと結合す。東は此のアルプスの單元より新らしい第三紀層の一帶がボロニアよりチヴォリまで經過し、最內奧アルプスの邊境地帶の繼續としてウムブリアより下イタリーに及ぶヂナル南アルプスの組織的石灰アペニンを統一體より分ち、其際アプルッツェン群山に於ては殆んど三千米に達し且外側に於てはカラブリア及びシシリーの結晶的塊狀山彙を伴ひアトラス山脈の最北邊境鎖の中へ、モロッコのリフ (Rif) 迄旋回し進入してゐる。此等二アペニン帶の間にチルヘニアの塊狀山彙が推込まれ、是は今日では深く沈みチルヘニア海の進入盆地として存し、その東緣にトスカナよりカムパニアに至る火山列が開かれてゐる。アペニン半島の全東側は新らしい隆起により漸く陸地に組入され、アプリアの平たい白堊臺地及びモンギャルガノはヂナルアペニンの褶曲せざりし前地である。アルピデンの根幹はイベリア半島に於ては最も廣く北方に前進し、グヌア・ウキーン間にアルプスの長さ千二百粁の彎弓を形成する。彼等は最も弱く歪められた中部扇形に於ては褶曲の最大壓縮せる領域である。從つて、巨大なる被覆堆積に於ては重なり。堆積され、後に非常な高さに高められ、廣く形成され明らかに岩石帶に向つて組織付けられ、大抵稍高められ、東アルプスに於ても同樣の組織計畫により支配されて居る。外緣に於ては瑞西の Flyschzone が全群山に共通であり、フォルペルムの塊狀山彙は西アルプスに於て第三紀層の被覆推移へ揑合さ

れ、廣汎な水平運動は東アルプスに於てより深き被覆包を殆んど完全に壓服してしまつた。かくて、西アルプスは東アルプスの下へ低下した。最南石灰アルプスはイヴレア地方より東に於て及び東に對して益々大なる廣さに膨張し、大體同樣に北へ、しかし後には南へ運動するヂナリデンの支脈として、新らしい陷沒及び彎曲に際し嶮しくポー平原に沈下せる全山脈の內側をとり卷き、最後には東南に向ひカルステの群山の中へ上向してゐる。西アルプスの正路を離れた支脈、しかし唯淺く褶曲せる沿岸地は瑞西のヂュラである。此の兩者の間に横はり遙かに又東方に對してドイツのアルプス前地としてアルプスの外緣を伴ひ、遂には彼等とボヘミヤ塊狀山彙との間に楔形に尖る灰色砂岩地は恐らく深く隱され正面に横はる中間塊狀岩の代りに取出され、或は猶固定せしめられない山脈形成の一帶である。

アルプスはその東端に於て、パノニア低地に沈降し且新らしい火山環に卷かれた塊狀山彙に各々面して大規模の長形をなして輝き曲走し、支脈により中斷される線に於て該塊狀山彙に分解してゐる。更にアルプス山脈としてカルパチアの巨弓が北方へ進出して居る。アルプスのFlyschzone はカルパチア砂岩帶に於て擴大に發展しながら續き、その內部は一列の孤立せる岩角を伴つて居る。西カルパチアに於ては被覆組織により特徵付けられた總ての內部諸帶が新らしい盆地陷沒により沈澱外皮をもつ數列の核心群山に分解され、深い東アルプスの被覆に匹敵して居る。その比較的高きものはスロヴァキアの鑛石山脈として及び南に於てはハンガリーの中央群山として殘留して居る。パノニヤ沈降平原が Flyschzone 及び尖巖帶にまで押し進む所、所謂森林カルパチアに於ける群山の縮小後はあらゆる被覆帶がロシア臺地の一稜たる水を堰くポドリアの大塊の影響が山脈を南方へ曲げ反らす點、ジーベンビュルゲンの東カルパチアに再び現はれる。しかし、クロンシュタット地方に於てはワラキア、黑海の大塊がカルパチア灣弓を鋭く西へ屈曲せしめ、東より西に延びるトランシルヴァニアアルプスは此の大塊の輪廓に密着し西南及び南へ旋回し、バナテルドナウ裂口の彼方東セルビア群山の中を續走する。

アルプス長形より東南へ向つてオーストリアのヂナリーデンが發し、バルカン半島の全西側を占めてゐる。此等の主として石灰より成り從つて大抵極端な不毛の地に變せる山脈はアドリアの沈降平原に分解して居る。最內奧列は既に中央希臘に於て東へ曲がり、外列は大灣弓を形造つてクレタを貫通し東及び東北へ進み、此等の諸鎖は皆粉碎されたるエーゲ海を越へ小アジアのタウリス山系へ續進してゐる。現代に於ても尙地震線に沿ふて影響を及ぼし多種多樣の方向を有する新らしい諸陷沒は舊希臘地上に於て陸地の群山、盆地、半島及び島への廣汎な分裂

を惹起した。ヂナリデンの内側に於ては大ルメリア、トラキア圓塊或はロドープ塊は外縁的褶曲を受け、同様に新らしい沈降平原により完成されたる軀幹塊地である。その東及び北枠を形成するものは東セルビア群山より發し南に於てワラキア大塊を伴ふバルカンである。バルカンの南方のアルプス形成山脈は東南に向ひイスツランヂア山脈を貫きボスポロスを越へて小アジアの黒海連山内に及んでゐる。純粹に沈澱により生ぜる北方前地連山は一方ドブルヂヤを貫通しクリミヤに向ひ他方ヴァルナ附近にて海中へ延び、黒海の沈降平原に隱されたる塊狀岩の北縁に於てコーカサスの巨大な沿岸地褶曲に合してゐる。而してコーカサスはピレネーの西に於けると類似の地位を歐羅巴アルプス山系の東端に於て占めてゐる。

第三節　現代起伏形態

地質史及び内外諸勞力の協力、相互兩作用より、個々の景觀に於ける表面組織の大特質並びに起伏の小形態が生ずる。形態の多種多樣性、丘陵、侵蝕作用の新らしい變革の結果、深い谷がその中へ刻み込まれたる高原の或は櫛狀山脈及び背山脈の性質をもてる軀幹景觀、層狀臺地景觀及び段階景觀、火山發露景觀及び圓頂景觀、其間に更に深存する沈降平原は確かに西及び中歐並びにフェノスカンヂアの圓塊地――此處に一般に僅少の海面上の高さなれども豐富な溪谷化及び屢〻眞の高山形態の氷河の刻削が高所を生ぜしめた――を特徴付けて居る。新らしい褶曲山脈は起伏及び海面上の高さの活潑な轉換により更に高き程度にて著しくされ、新らしい隆起が著しい程度に達し、内部組織及び轉換する岩石の地位にまで伸びる侵蝕作用及び磨剝が無數に多くの小形態を作り出した所に於ては殊に然りである。しかし乍ら、歐羅巴の東部はその廣範な低地の中に垂直分布の最大單調性を占め、此の單調性が人間の經濟及び政治的組織に同じく單一的作用を及ぼすとは、恰も反對に表面形態の多樣性が歐羅巴の他の部分に於てあらゆる生活條件の最大多面性を可能ならしめて居ると同じである。さて洲の半分以上が此の殆んど隆起せしめられない東歐臺地に當り、その上に、二百米以下の諸丘をもつ低地は北ドイツ、北及び西フランス、内部ハンガリー、ワラキア、北イタリー及び中央瑞典に於ても非常な擴張をなして居るが故に、洲の中央高地の約三百米なるものは僅少である。二百米迄の高度階段地は――勿論コーカサスの北方及びカスピ沈降地の一部を合せ――ペンク (Penck) によれば、殆んど五八パーセント、二百米より五百米迄の丘陵地は二六・六パーセント、五百米乃至千米の低山

地は殆んど一〇パーセントを包含し、從つて約七パーセントが比較的高い階級に殘されて居る。此の點にも亦舊世界の非常に大量的に形成され平均的に非常に高い他の洲に對する本質的差異が存する。最高地は地中海褶曲帶の最も烈しく隆起せしめられたる部分、アルプス、ピレネー及びセラネヴァダに存して居る。しかし乍ら他方二四七〇米の最高所をもつスカンヂナヴィア山脈はその中央高地に於ける新らしい隆起と大量性の結果確かに多くの新らしい褶曲山脈を凌駕して居る。

從つて表面組成の大特徴の分布に對しては、就中、新らしい地殼諸變動は多少發生的性質により規定的であつた。島及び半島への陸地の個別化も亦、一部分は、最新の地質的過去の沈降事象により始めて生成したのである。西方及び中央歐羅巴に於ては、一の全く小さい領域が東ガリシヤにて海より六百粁以上も隔たり、東歐特に中部ウラル山脈に於てはしかし此の距離は一五八〇粁を越へ、同時に歐羅巴の海よりの最大巨離を意味してゐる。しかし乍ら、廣大なる海に對する海岸の位置、海岸に對して陸地の開ける樣式狀況——何となれば、內部のヂナル山脈地方と同じく、非常に海岸に近い地方でも亦海岸に附隨する山脈の遮斷作用の結果氣候及び經濟生活に於て大陸的性質を負ひ得るからである——及び海岸の性質は此等の數字よりもより重要である。此の點に於ても歐羅巴には最大多樣性が存してゐる。單一平滑の陷沒塊狀海岸は殆んど完全に無く、平滑な平地海岸も比較的に稀である。灣入せる海岸の經過が遙かに優勢なることは、寧ろ新らしい地質的過去に於ける消極的海岸推移が矢張重きをなして居るといふことの結果である。岩多くして、嶮しき海岸に於ては、灣入海岸の經過はフィヨルド海岸としてか、或はスウエーデン及びフィンランドに於ける如く、土地が餘り高くない場合には、北及び西北歐の前氷河被覆部分に於けるフィヨルド海岸として、西北スペインより南アイルランド

第三圖　ヨーロツパの水系分類

に至る西歐の夥しく溪谷化せる體幹地方に於けるリアス海岸としてか、或はダルマチアに於ける如く、海岸の豐富な組織を有する連山が平行に走る所では島の多いヴァロニ海岸として現はれてゐる。平原海岸は無數のエスツアル(Ästuaren)に於ける新らしい沈降の諸作用を示し、ドイツ北海海岸及び大西洋のフランス平原海岸に於ける如く、强い潮流が河口の流通をよくし、且河口を形成し、三角州の組成に對し作用を及ぼす所では殊に然りである。沈降により生成せる灣が海岸移轉の影響のもとに多少とも遮斷されて居る場合には、ドイツのバルト海、ローヌ河口の兩側、トスカナ及びヴェネチア並びに黑海のリマーネに於けるが如く、潟及びハフ海岸(Lagunen-und Haffküste)の型が現はれる。ドイツ東海の海岸湖(Haffe)はその上チュットランド及び東プロイセンに於けるが如くネールング(Nehrung)に固着せる砂丘脈により往々遮斷され、一方陸地の海岸に於ける磯海(Strandsee)は舊海岸湖を現はさずして眞の砂丘盥を現はして居る。種々の型の沖積地海岸及び河口の分布狀態は、個々別々に、極めて多種多樣の諸要素の此の概觀に於ては叙述され得ざる程に錯雜せる一協力作用に依存してゐる。三角州は、殊に地中海の潮汐の乏しい海岸及び一般に泥土や漂石の多い河川の河口並びに北氷洋及裏海の邊に於けるが如き平原海岸に現はれ、しかも又ライン河岸に於ける如く陸地の沈降が三角洲形成を阻止する所にも現はれてゐる。

第三章　水　系

歐羅巴洲の空間狹小性及びその西半の强度の肢節の結果は水路的大分裂――特に、西方諸國の分裂――を生じ、從つて大水原を缺いで居る。然し乍ら、東歐平原も亦何等水系の統一的集合盆地を有せず、四個の海に向つて傾斜してゐる。歐羅巴は大體西南より東北へ經過する主要分水界を通じてウラル山脈の分水頂線に至るまで殆ど同じ大さの二つの主傾斜面に分けられる。卽ち北海、東海、北氷洋を含む大西洋の斜面（4.7 Mill. km²）と黑海、裏海――その注入空間（歐羅巴大陸上にては約 1.5 Mill km²）は成程流出口のないユーラシヤの內陸地方に屬しては居るが、その流出關係に從つて周邊地方の特性を分與して居る――を含む地中海斜面（4.5 Mill km²）に分けられる。此の主要分水界は、瑞西アルプスに於ける如く唯部分的にのみ高い山脈の頂上を經過し、時には又西部カルパチアに於ける如く山脈の一部を橫切り、又、巴里盆地、ブルグンド及びメーレンの門戶、特に東歐平原に於ける如く屢々深い低地を經過してゐるので從つて該主要分水界は、陸上交通及び人爲的水路によつて容易に越へ得られ、此超陸的事實は大西洋的及び地中海的歐羅巴諸國の連結並びに相互開發に對して最大な意義をもつてきた。ドナウ河が新らしい第三紀のパノニア、黑海の東方へ背進する海岸の進路に沿ふて居り、深く西部の中歐にまで喰ひ込み、その大部分が東方傾斜を印刻して居ること、更に北海及びバルト海の大抵の流入河川が、中央ドイツのゲビルゲスシュエレの內側に根ざしてゐること、またライン河が、近い地質的過去に於ける分水界の一移轉の結果、唯一の河流としてアルプスより北海までの全中歐諸帶を連結してゐることなど、これ等はすべて一般地理學的に重要な事である。その個々に於て歐羅巴河川網の配置及び分水界の經過は穿孔事象の爲に新らしい地殼變動及びその他の要因の成果として、非常に著しい變更を蒙つたのであつて、これがために今日の河川は唯非常に稀に且短かい延長をなして內部機構の大運行によつて規定されたる傾斜に從つてゐるのである。

河川の勾配の發達も亦此等の事象により非常に影響された。唯稀に此の發達に於ては前に往々强調された肢節が大傾斜及び支配的に深い浸蝕作用を以て、上流へ、浸蝕と堆積の數回に亘る轉換を以て中流へ、獨裁的堆積を以て下流へ導き通される。之に反して新らしい地殼變動、

或は種々な年齢の河川の集結の結果大小の傾斜をもつ河川と種々な河流活動をもつ河川とは、ライン、ドナウが好例を提供する如く、屢々變換されたのである。これと同じ様な方法で氷河被覆が河川に作用して居り、その氷河隣接地方に於ては選拔淘汰的氷河浸蝕作用の結果、河川は、早瀬と瀑布をもつてゐる嶮しい傾斜線により分たれる湖の様な擴大地か、或は深い盥の列の中に分散して居る。古い氷河被覆の堆積領域に於ては、河川は終堆石冠狀物(Endmoränenkranz)を破らねばならない、その一方に於て此等河川の源は、屢々、ニューメン及びプリプエトに於ける如く、全く平たい沼澤化地方に存してゐるので從つて不定の分水界のみならず河川混合の現象さへが起つてゐるのである。

次の表は歐羅巴の重要河川の長さ及び流域面積を示すもので主としてウォイティンスキ(Woytinski)の報告による。

重要河川の長さ及び流域

	長さ(粁)	流域(千方粁)
I　大西洋斜面		
1. 北氷洋		
ドビナ	一七八〇	三六六
ペチヨラ	一五八〇	三三〇
2. 東海		
メーメル	九一〇	一〇一
ワイクゼル	一〇四〇	一九二
オーデル	九〇五	一一九
3. 北海		
エルベ	一一六四	一四四
ウエーゼル	七一二	四八
テムス	三一二	一四
4. 大西洋		
ライン	一二二四	一九三
ロアール	一〇〇二	一三一
セーヌ	七〇五	七八
ガロンヌ	六五〇	九〇
タホ	一〇〇六	七九

II　地中海斜面

1. 地中海

エブロ	八〇〇	七九	
ポー	六五〇	七五	
ローヌ	八一〇	九九	
2. 黑海			
ドナウ	二八六〇	八一七	
ドニエプル	二一三〇	五三〇	
ドン	一八六〇	四三〇	
ドニエス	一三七一	八一	
3. 裏海			
ヴォルガ	三六〇〇	一四六〇	

歐羅巴の湖沼は到る處の地球上に於けると同じく大抵群をなして現はれてゐる。例へばポルエ及びドリネ湖の如きカルスト景觀に、特にヂナル地方及びアイルランドに、或はオーヴェルニュ(Auvergne)、アイフェル及び伊太利などの火山地方に、更に多くの舊氷河被覆地方に於て、湖は群的構成をなしてゐる。北歐內陸氷河の領域に於ては、湖沼は眞の岩石盆地として、より軟らかな岩石の走向(ストライク)の中に或は構造學的混亂地帶に沿ふて凹められてゐるか、それとも洪積紀の堆積地方に於ける終及基堆石景觀の中に存在するかである。これに屬してゐるものは瑞典、フィンランドに於けるあらゆる大きさの無數の湖沼の大部分(セイマ湖一三〇〇方粁、湖領域としては一七六〇方粁)であつて、これらは諸威、スコットランド、北イングランドのフィヨルド谷中に幾重にも横はる氷河谷盥と同じ樣に個々の盆地や夥しい島の中に多くの肢節を出してゐる。多くの大湖は、特に歐羅巴の二大湖たるラドガ(Ladoga)湖(一八一八〇方粁)及びオネガ(Onega)湖(九八三六方粁)の如きは、所謂グリントゼー(Glintsee)として岩石境界に結び付けられて居る。しかし乍ら此の兩湖の成生にはウェーネル(Wener)湖(五五六八方粁)及びメーラー(Mälar)湖(一一六三方粁)の場合と等しく新らしい地殼變動が參與したのである。ウェッテル(Wetter)湖(一八九八方粁)は氷搔鑿により始めて更新された構造學的グラーベンの中に在る。アルプス地方の湖は大抵、前地湖(Vorlandsee)或は外緣湖(Randsee)として舊氷河の尖端盆地に横はり、通常は北瑞西の諸外緣湖、ヂュラ諸外緣湖、ザルツ固有地諸湖、ケルンテン及びインスブリア諸湖の如く群型狀に配置されて居る。彼等の形成に關しては現今ボーデン湖(五三八方粁)に對し、またアルプス地方の總ての湖の中で最大なるゲンフェル湖(五八二方粁)——此の場合は前者よりも不正確なれど——に對して表示される樣に、多くの場合に於て、氷河浸

餘と並んで地殼變動が與つてゐると云つてよい。その他の湖は氷河谷盥として山脈の內部に存するか又は非常に多くのものが高地湖としてカールの中に或は峠の上に横はつてゐる。湖は更に又地方的氷河被覆により著しくされた多くの山脈（ピレネー山脈、リラ山脈、タツラ山脈、リーゼン山脈、ボヘミア森林、シユワルツ森林、ヴォゲーゼン山脈等）にも固有のものである。プラツテン湖(Plattensee)(五九四方粁)は特に乾燥せる年には既に Endsee の特質に近づくところの中歐の最大湖として孤立してゐる。ハルブファス (Halbfass) の分類に從へば約一三五、〇〇〇方粁(湖と云はれないハッフェ Haffe 及びリマーネ Limane を除く)の全歐の湖の總表面積の內七二、二〇〇方粁はフインランド・カレリヤの全湖に當り、三七、九〇〇方粁は瑞典の部分にあたり、唯三、三〇〇方粁がアルプス地方(アルプス及びアルプス前地)の部分に當つてゐる。

第四章　氣　候

第一節　一般的性質

歐羅巴の一般的位置を觀察したときに既に强調した樣に、溫帶を最も暖い月の十度等溫線によつて寒帶から區分するならば、歐羅巴洲は氣候學的意味に於ては殆んど全く溫帶に屬してゐるのである。併し所謂メキシコ灣流浸入によつて暖められた北大西洋東部に於ける歐羅巴の位置換言すればユーラシヤ――その東北方へ退ける西海岸は別であるが――の西側に於ける位置は歐羅巴の氣候にとつて先づ第一に決定的なものである。從つて、歐羅巴は又、暖海によつて規定された恒常的、特に冬期强く特色付けられる北大西洋の大體アイスランド上空に中心をもつ最低氣壓の比較的暖かい前面に横はつてゐる。更に南北に亘る山脈は西歐には殆んど無く、寧ろ大西洋の諸附屬海を伴ふ廣大なる低地帶が、東西の方向に走つてゐるがために、暖かくする西風と一般に大西洋の諸影響とが遙か東方へ及んでゐる。從つて、歐羅巴の大部分は主とし

て西風の吹く大西洋の風系統の影響のもとにあり、且アイスランド最低限度より離脱し大體東方へ進む部分的低氣壓のもとにある。而して殆んど全歐は冬期矢張り特に強く有勢になる積極的溫度變異の領域内に位置してゐる。

而して、大體アゾウレン群島上空に中心を有する亞熱帶的大西洋上の同じく恒常的最高氣壓が、アイスランド低氣壓に次で第二の主要作用領域として重要になつてくる。四季と共に移動する此の最高氣壓の位置は、就中、地中海諸國の氣候及び四季の氣象變化にとつて決定的なものである。がその際、主として山脈の東西への走向も亦、大西洋的地方から亞熱帶的地方を分割する重要なものであることは云ふまでもない。最後に冬期完成される高氣壓の尖端は、東歐の氣候に對し重要であるが、此の尖端は北アジア及びロシア上空の高氣壓の「大陸の大軸」("die grosse Achse des Kontinents, "Woeikof) として西南の方向をとつてカルパチアまで延びてゐる。從つて更に、歐羅巴最東南は大西洋の影響より分離せしめられ、北アジア氣流系統の影響のもとに置かれてゐる。かくして、此等三主要作用中心の位置及び强度の變化は各四季の變化する氣象性を規定し、特に中歐に於て然りである。しかし個々別々に於ては山脈と平原の迅速且瀕繁な變換と陸地を取卷く諸附屬海の出現とが氣候的關係に於ても亦非常に單調な東歐に於けるよりも、全西歐に於て、遙かに多種性の氣候的諸關係を作つてゐることは明かである。

第二節　氣候區

あらゆる氣候的要素を顧慮すれば歐羅巴に於ては四大氣候區が分たれる。その境界は勿論僅少の例外はあるが、確然と決定されないのみならず、此の四つの氣候區は大部分再び第二次的小氣候區に分たれる。

A. 西歐氣候區は、約北緯四十二度に於ける北ポルトガルの西海岸より、西フランスを貫き英諸島及び北海岸諸國を經て西スカンヂナヴィアに入り極圈内にまで至る所の、山脈の走向によつて規定される幅の種々な長い一帶として延び擴がつてゐる。大なる幅の相違とそれに基く溫度の差異とがあるにも拘らず、氣候の主なる特徴は緯度約三十度間を通じて類似してゐる。だが平均溫度の減少は北極に向つて徐々に、年平均一緯度毎に攝氏〇・三度だけのみ起る。從つて、對岸アメリカ東海岸に於ける減少の三分の一さへにも當らない。常に吹いて多くの場合强い西の海風が、西歐海岸氣候の規定的特徴である。此の風は、冬は、西南より東北へ經過する

等壓線に從ひ、多くは西南より來り、大洋に對する陸地の強い傾度の結果、特に激烈に、規則的に吹く。しかし、アゾーレン最高限度氣壓が北方へ擴がる夏には、多くの地方的分力をもち、特に冷却的に作用する。此等諸作用の結果、著しい曇天が生じ、殊に海の熱の過剩が最も大である高緯度に於ては、高度の濕度と海岸に於ける霧の形成とが生じ、特に冬半年に於てそれが屢〻起る。而して月平均、九度と十六度の間を動く僅かの溫度偏倚も起る。蓋し海の附近は夏は冷却的、冬は加暖的に作用し、出入射光を減ずる強い曇天の影響も加はるからである。冬は等溫線は殆んど南に經過し、一月の平均は海面内全帶に於ては八・五と零下四度との間にあり、海岸は北岬（ノルドカップ）の彼方まで氷結せず、殆んど何處にも海面近くに永續的雪の被覆を生ずる事なく、持續的霜期なく、平均的最冷寒も零下十五度以下に達するは稀である。從つて、一月の平均、五度乃至六度なるアイルランド、南イングランド及びカナリア諸島に於てさへ常綠樹が繁茂して居り、更に積極的溫度變異が一月に於て二十度を以て最高値に達する西北諸威に於ては、樹木の成長と穀物耕作とが地球上に於ける最高緯度に達してゐる。しかし乍ら、夏は涼しく、溫度增減の割合は、特に中位の緯度に於ては冬に於けるより僅かに大なるに過ぎず、七月平均は海岸に於ては十一度と十二度との間にある。春は全然秋よりも涼しく、極度の月平均の變動は屢〻二月又は八月にみられ、四季は大抵、唯微かに、確然と相互に分れてゐるにすぎぬ。

降雨は成程如何なる季節にもあるが、しかし秋（十月）に特に豐富である。が、一方、春と初夏は、此の時期に尙相對的に非常に冷たい海の影響を受け比較的に乾燥してゐる。雨量は豐富であり、特に西ピレネー、西方スコットランド、北イングランド及び諸威に於ける如く、高い山脈が、直接に溫かい海の上にそびゆる所では、雨量は、屢〻過剩である。此れらの地方では海岸に於てさへ二米より三米までの平均年總量が觀測され、內部及び高地に在つては、觀測の存する限り（カムバーランド、ウエールスの山地）五米に上り、一方西風の風下に存し、近々一米の雨量をもつ諸地方は非常に乾燥してゐる。從つて、此れら地帶の特徵的景觀形態は、荒地と沼澤であり、草地は耕地より優勢である。

次の數字は一系列の諸觀測地點に對し溫度諸關係を明らかにしてゐる。此の場合我々は平均値をハーン（J. Hann）の氣候學綱要よりとり、ワグナー（H. Wagner）の先例に從ひ、大體類似の地理的緯度のもとにあり、しかも異なる經度の下にある諸地點を比較し、東方に行くに從ひ增加する氣候の大陸性を述べよう。

西歐氣候區に於ける平均溫度

地點	海面上の高さ	緯度	經度	一月 *＝二月	七月 *＝八月	年	變動
ツロムゼー	一五	六九、三九	一八、五六東	—三・九*	一一・〇	二・四	一四・九
トルシアヴン	九	六二、〇二	六、四四西	三・一*	一〇・八	六・五	七・七
ベルゲン	二〇	六〇、三三	五、二一東	〇・九	一四・四	七・〇	一三・五
レールダール	五	六一、〇六	七、二九東	—一・四*	一五・九	六・四	一七・八
エヂンバラ	五	五五、五八	三、一〇西	三・九	一四・七	八・七	一〇・八
コペンハーゲン	三一	五五、四一	一二、三六東	—〇・一*	一六・六	七・七	一六・七
バレンシア	五	五一、五五	一〇、一六西	七・一	一五・二*	一〇・五	八・一
ゲリーンウイチ	四五	五一、二八	〇、〇〇	三・六	一七・〇	九・八	一三・四
クリーブ	五〇	五一、四八	六、〇八東	一・二	一七・四	九・一	一六・二
ロスコフ	一〇	四八、四四	四、〇〇西	七・一*	一六・七*	一一・四	九・六
バリー地方	五〇	四八、四九	二、二九東	二・五	一八・六	一〇・三	一六・一
ビアーリツツ	五五	四三、二九	一、三四西	七・七	二〇・五*	一三・七	一三・八
ツールース	一九五	四三、二七	一、三七東	四・五	二一・一	一二・三	一六・六

B. 中歐氣候區は東部フランス並びに北バルドの下區に於ける極圈内近くまでの北部東海諸地方及び西ロシアを含むが故に、地誌學的意味に於ける中歐よりは遙かに廣範である。この中歐氣候區は確然たる境界はないが、東方へ行くに從つて增加する大洋的特徵衰微によつて、及び四季の對立の尖鋭化によつて大西洋氣候領域から區別されてゐる。年平均も一月平均も南より北に向ひ、四七及び六〇緯度の間に、僅かに四度乃至五度減少するのみである。蓋し增大する緯度の位置は僅かの海面上の高さにより殆んど完全に相殺されるからである。此區の大部分は矢張り、諸威海岸より、ヂュットランドを貫き、ハムブルグ及びヴュルツブルグを經て、南へ赴き、アルプス山麓に於て、始めて東南へ、最後に東方へ轉ずる零度一月等溫線の西方に在る。が、しかし、此處では、陸地の高い位置はもはや何等の現實的比較を許さない。七月平均は本來の中歐に於ては、類似の位置及び微少の高所により二十度の內外を僅かに移動し、年平均は十度の內外を僅かに變動するにすぎぬ。年振幅 (Jahresamplitude) は東に向つて十四度より二十四度に至るまで增加する。特に西南部、そのうちでも上ライン沿岸地方は惠まれてゐるが、一方河川が每年可成り長期間結氷し、東海海岸が規則的に氷の形成を呈示するバルト海の東北部分は惠まれてゐない。ボトニア灣は冬は常に殆んど全く氷で被はれてゐる。或生物氣候學的現象によつて斷ずるに、春の來るのも東北の方向をとり、ライン溪谷に對し一ヶ月も遲延し、氣熱の一部がバルト海岸に氷の溶解に消費される時は一層甚だしく遲れる。しかし、十月は全域に亙り四月よりも暖かく、秋は春よりも溫暖である。

降雨は勿論各四季に悉くあるが、東及東南への漸增的大陸性と共に降雨は夏期益々集中してくる。これに對して一方北海及びバルト海諸地方に於ては降雨は內陸より豐富である。これと

同じ樣なことは高度の增すにつれ、冬半年で總降雨の大部分を示すドイツ中央山地についても亦妥當する。しかしながら、ハンガリーの內部、卽ちアドリアの初夏の降雨及び激しい秋の降雨のために、殆ど地中海氣候があらはれてゐる樣なパノニアの諸郡は、典型的中歐降雨分與の一變則を示してゐる。そして乾燥が大抵、唯迅速に經過する雷雨によつてのみ中斷される暑い夏は、景觀にステップ的特質を規定してゐる。兎に角、中歐領域に於ける降雨の年總量は、到る處種々な栽培にとつて充分であるが、個々の地方に於ては、五十糎以下に下るところもある。

中歐氣候區に於ける平均溫度

地點	海面上の高さ	緯度	經度	一月	七月	年	變動
ステッチン	三〇	五三、二六	一四、三四	〇・七	一八・四	八・三	一九・一
ケーニヒスベルグ	五	五四、四二	二〇、三〇	二・九	一七・三	六・七	二〇・二
リーガ	一五	五六、五七	二四、〇六	五・一	一七・九	六・〇	二三・〇
ベルリン地方	五〇	五二、三〇	一三、二三	〇・四	一八・一	八・五	一八・五
ワルソー	二一〇	五二、一三	二一、〇〇	三・四	一八・八	七・三	二二・二
フランクフルト	一〇五	五〇、〇七	八、四一	〇・〇	一九・三	九・六	一九・三
プラーグ	二〇〇	五〇、〇五	一四、二六	一・五	一九・〇	八・八	二〇・五
クラカウ	二一〇	五〇、〇四	一九、五七	三・三	一八・八	七・九	二二・一
タルノポール	三〇五	四九、三五	二五、二三	五・五	一八・七	六・八	二四・二
シュツツトガルト	二五五	四八、四六	九、一〇	〇・五	一九・一	九・七	一八・六
ウイーン地方	二〇〇	四八、一四	一六、二一	一・七	一九・六	九・二	二一・三
ツエルノーウイツチ	二五五	四八、一七	二七、一七	五・一	二〇・一	七・九	二五・二

また一方、中央山地の西方風下は、非常に豐かな降雨量によつて特徵付けられてゐるが、盆地諸地方は此の點に關しても非常に大陸的である。とにかく、隆起の豐富な垂直肢節では、降雨の空間的分布に於て、非常に變化多き諸關係が支配してゐるのである。

前表は一系列の地點に對する平均溫度を示す。

かくして中歐氣候區は東に向ひ漸次的に東歐氣候區に移るのである。

C. 東歐氣候區は、北極海より黑海及び裏海沈降地に至るまでの東部東歐の大部分を含み、ウラルをこえて西シベリアへ續いてゐる。該氣候區は廣大な緯度に亙つてゐる結果、小區への肢節がある。卽ち(一)ペチョラ盆地に於て遠く陸の內部にまで侵入して居り、冬期大部分結氷する白海によつて著しくされる冬期低溫度、凉しい夏、氷土地及びツンドラ性を特徵とする北極周緣帶(arktische Randzone)(二)北バルド小區より發し最北瑞典及びフィンランドを含む亞北極帶(subarktische Zone)(三)最後に地中海氣候に編入されるクリミアの南岸を除き、モルダウ、ワラキア、北ブルガリア卓狀地を包含し旣にステップ性を有する中露地方黑海地方(mittelrussischeu. pontische Region)とに分たれる。しかし、陸地の僅少な隆起動勢は、此等諸帶に劃然たる境界を與へず、寧ろ全域に共通な氣候的特徵が、重きをなして居る。一般に冬は確かに非常に寒冷

で且長期間繼續し、一月等溫線は、相互に可成り平行して北北西より南南東へ經過し、北緯五十度に於て始めて東方へ屈曲してゐる。從つて、冬の寒さは東北に向つて增加し、一月平均は、約西南に於ける零下五度より東北に於ける零下十八度まで下る。加之、冬期の日々の變動性も大く、冬の天候は相變らず不安定である。それは極寒の霜の期間がシベリアの高氣壓に支配されて溫和な大西洋天候及び西風の侵入に代るからである。しかし乍ら、これとてもその溫度を零度以上に高めることは實に稀で、ことに溫度を下げる降雪の伴ふ時は益々それ以上高めることはない。併し、最外東南部では冬は高氣壓附近の靜風及び非常に低い溫度が支配してゐる、或は寒冷な乾燥した東南陸風が吹いて居る。夏は東南の方向に益〻暑くなり、等溫線は大抵東北より西南へ經過する。年振幅は同樣に此の方向に增大しヴォルガ下流邊にて既に三十六度に達するのである。

降雨分布に關しても、夏期に於ては速かに雨が集中して來るが、同時に量が減少するが故に、中歐に比較してその分布がより極端である。北極地帶は相對的に高度の濕度（八三及至八五パーセント）あるにも拘らず、至る處非常に降雨に乏しく、こゝでは秋に雨が降る。また亞北極地帶及び中露地帶に於ては冬は成程相對的に降雨に乏しいが、繼續的低溫のため、永續的に聯せる雪の被覆が陸地に擴がり、且春にはその溶解が長期間大地を潤ほし、又數ヶ月に亘る氷の被覆後、大河の水を迅速に膨張せしめる。

東歐氣候區に於ける平均溫度

（〃サヴエート共和國聯邦の氣候〃より）

地點	海拔	緯度	經度	一月 *＝二月	七月	年	變動
ウレアポルグ	一〇	六五、〇一	二五、二七	*一〇・八	一五・八	一・八	二六・六
アルハンゲルスク	一五	六四、三三	四〇、三一	一三・三	一五・三	〇・二	二八・六
トロイツコエーペチエルスコエ	一〇〇	六二、二四	五六、一三	一九・一	一六・二	一・六	三五・三
ペテルブルグ觀測所	一〇	五九、五六	三〇、一六	七・六	一七・五	四・一	二五・一
ニジニノヴゴロド	一四〇	五六、一〇	四四、〇〇	一一・七	一九・七	三・六	三一・四
モスカウ農業研究所	一四五	五五、四六	三七、四〇	一〇・八	一八・〇	三・六	二八・八
カザン	七五	五五、四七	四九、〇八	一三・六	一七・四	三・三	三一・〇
カーレル	一七〇	五二、五七	三六、〇五	一〇・〇	一九・九	四・九	二九・九
オレンブルグ	二一〇	五一、四六	五五、〇七	一五・四	二三・〇	三・八	三七・四
キエフ	二八〇	五〇、二六	三〇、三一	六・〇	一九・三	六・九	二五・三
オデツサ	六五	四六、二九	三〇、四四	三・一	二二・六	九・九	二五・七
アストラハン	一五	四六、二一	四八、〇二	七・二	二五・五	九・四	三二・七
ブカレスト	八五	四四、二五	二六、〇六	三・六	二三・八	一〇・四	二六・四

ポント地方に於ては降雨量は既に四十糎以下に減じ、冬は非常に雪が乏しい故に、冬期穀物の耕作は殆んど不可能である。

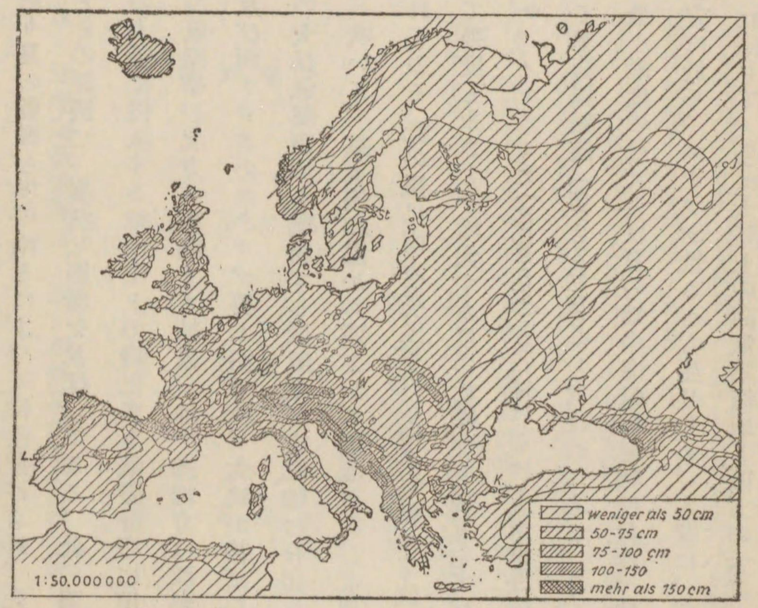
主なる雨季は此處も夏(七月が最高限度)に相違ないが、雨は大抵確かに、迅速に降り注ぎ大地を深く掘返し植物生長にとつては殆んど無價値な——此地方のステップ性はそれに基く——强雨となつて降る。眞の沙漠氣候は裏海沈降地、從つて歐羅巴の自然的境界外に制限されて居る。

前表に北より南へ至る數ヶ所の平均溫度を配列する。

東歐に於ける降雨年週期

	東海領域	西ロシア	中ロシア	ウラル	南ロシア
冬	一六	一六	一六	一〇	一六
春	一九	二	三	一七	二四
夏	三七	三九	三七	三五	三七
秋	二八	二四	二五	二	二三
年量(糎)	五五	三七	四四	四三	四三

D. 地中海氣候區は、既に亞熱帶的氣候區に屬し、氣候的にも中歐からアルプス及びカルストによつて判然と分たれて居る。該區はその氣候の特徵をして著しい四季の氣象變更をもつて居り夏の乾燥と冬の雨とによつて特色付けられ、此の變化は植物の發展並びに人類の生活樣式とその經濟に、廣汎な影響を及ぼしてゐる。此の强い週期性は、個々の盆地と共に深く舊世界の大陸に侵入する地中海上の變化多き氣壓分布に原因してゐるのである。夏は總ての風壓帶及び氣壓帶が北方へ移動する結果、地中海地方は亞熱帶最高氣壓の領域に在り、一方北アフリカ及び西アジアのステップ帶上空では、大地が甚だしく熱せられる結果、東方、アジア大陸の夏の大抵氣壓領域と聯絡する低氣壓が支配的に存在してゐる。そして冷たい地方より溫暖な地方へ吹いて、益〻飽和點から遠ざかる西北風及び北風に對する均齊ある氣壓增減の割合が與へられてゐる。此の風は南方及び東方に向ふに從つて强烈性と繼續性とを增し、同じく此の方向に於て强度と永さとを增大する夏の乾燥性を規定して居る。特に東部地中海區に於ては、新ギリシヤ、メルテミア(Meltemia)と名付けられる舊世界の此等季節風(Etesien)は典型的であり、從つて季節風氣候(Etesienklima)と言はれてゐる。そして陸上の空氣の大乾燥と强烈な日光と更に最小限度の曇天とは夏の地中海氣候を特色付け、植物の成長停止と夏眠とを規定し、多くの地方に於て、ステップ性さへも生ぜしめ、人間に、變り易き自由な居住樣式を强ひて居る。これに反して、冬は大陸上の高氣壓領域と西方の大洋との間に、個々の盆地上の無數の最小限度部



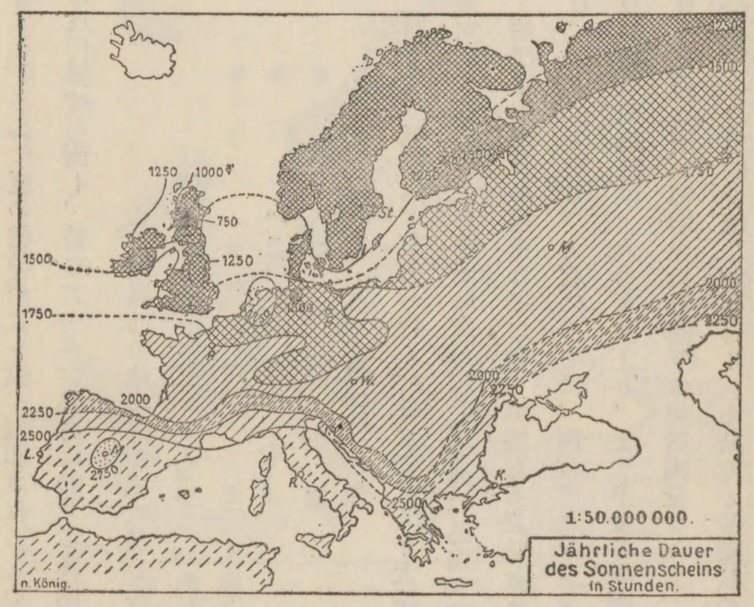
第四圖　ヨーロッパの降水量

分と共に暖かい地中海上に低い氣壓の槽(Trog)が形成される。從つて、一般に陸より海に向つて吹き來る風は、種々の方向と上昇氣流運動——それは凝縮の機因を與へ此の季節の不安定なれども大抵濕潤なる天氣を惹起する所の氣流運動とを左右してゐる。それ故に、冬半年は何處に於ても雨季であり、冬が尙充分に溫和なる處では、植物の最も迅速な最も豐滿な生長の時期である。しかし、地中海區の北部、從つて殊に南フランス、上及び中イタリーに於ては、尙、春雨・秋雨(最高限度十月)がよく降り、恐らく北緯四十度より南に始めて著しい冬雨が現はれ、同時にそれと共に夏の乾燥がより鋭く刻印されるといふことは强調されて居る。次の表は地理的緯度の減少に對し、特にアペニン半島に對して降雨分布の移動を示す。(年總量のパーセント)。

歐羅巴の地中海領域に於ける年雨量分布

	地中海的フランス	アルプスの南麓・ポー流域	中央イタリー	南イタリー	シシリー	マルタ	スペイン南端
冬	三三	一六	二〇	二五	三一	元	四一
春	二六	二五	二六	二四	二五	三三	一四	二五
夏	一四	三〇	二四	一七	二一	三	二	三
秋	三七	三〇	三〇	三四	三三	三六	三六	三一

同時に、氣候は、東方へ行くに從つて、より大陸的に、年變動は、より大に、降雨は、より僅少になる。しかし降雨は主として、大地の迅速な破壞、Rachelland 及び Badland の形成、地辷り並びに山崩れの補償などに對し主要なる意味をもつてゐる激雨として降るが故に、雨の密度は、より大である。一般に、冬は、西方クォドランテンからの風が、吹くために、山脈、半島及び島の西側面は、大體東面より、より多量の降雨をみるが、降雨の度數及び密度は、全域に亘り非常に廣い範圍内に動搖する絕對雨量よりも、栽培に對し、より重要である。年雨量、僅かに三十乃至四十糎なるスペインの殆んど沙漠狀の内部高原は、恐らく最も乾燥したところで



第五圖　ヨーロッパの晴天繼續日數

あり、また、アペニンの風下なるイタリーの東側も五十及至六十糎にて非常に乾燥して居る。ポー平原に於ては約八十乃至九十糎の降雨があるが、アルプスの南麓に於ては一、五乃至二米及びそれ以上降る。最大雨量は、アドリアの東側面に觀測され、そこでは Krivosije の Crkvice が歐羅巴の雨量最多點として僅かに海拔一一〇〇米にて二十二ヶ年平均四六四糎の雨量高を示して居る。此處では、海より山への急昇に於て多くの水蒸氣を凝結せしめる濕潤溫暖な熱風シロッコ (Sciroccco) の影響のもとにあるから、降雨は特に豐富である。また山脈の雪覆も此處では晩春まで豐かな被覆となつてゐる。兎に角、本來地中海の諸山脈(アルプスは別にして)、モンテネグロのアルプス、リラ山脈、アブルッツェン群山、エトナ山、スペインのシェラネヴァダ山脈などは氣候的雪界に最も接近して居り、ことにシェラネヴァダ山脈は、北側面に小さいが、眞の氷河さへも形成して居る。

地中海地方は、南方の位置を占めてゐるにも拘はらず、悉く相對的に決して冬は溫和ではない。これは特に本來唯海岸景觀殊にゼノア灣頭のリヴィエラ(Riviera)、アルプス南麓のインスブリック (insubrische) の湖沼地方、スペイン南海岸の如き、山脈によつて北風から保護されてゐる樣な景觀に就いてのみ妥當する。が、一方、陸の內部に於ては、特にスペインの盆地景觀及びポー平原に於ては、寒冷な空氣の集積と大地の放射とが一月平均溫度さへも、零度近くに規定して居る狀態である。しかし、保護された地方でさへ、强烈な霜によつて亞熱帶的諸栽培を壞滅せしむる樣な北極の空氣集塊の侵入を受けなければならない。かくて、當然、ニッツア (Nizza) に於て、既に零下十二度が見られるのである。此の氣象態樣——卽ち北に於ける大陸上の高氣壓と暖海上の低氣壓と——の間には、屢〻突然侵入する落下風、卽ち東部アドリア海岸のボラ(Bora)及びローヌ溪谷下流のミストラル(Mistral)、が尖銳化的作用をなしてゐる。が、

これらの風は、元來溫暖な海岸地方に於て空氣の動的加熱を受けるにも拘らず、寒風として感せられるのである。暖燥せるフェーン樣の風は、ラングドク（Languedoc）に於けるオータン（Autan）である。

地中海領域に於ける平均溫度

地點	海拔m	緯度	經度	一月	七月 *＝八月	年	變動
バルセロナ	四〇	四一、三一	二、〇九東	八・〇	二三・三	一五・二	一五・三
マドリッド	六五五	四〇、二四	三、四三西	四・三	二四・三	一三・三	二〇・〇
マラガ	二五	三六、四三	三、三七西	一二・〇	二五・一*	一八・〇	一三・一
バルマ（バレアレン）	二〇	三九、三三	二、三七東	九・八	二四・八	一六・八	一五・〇
メエランド	一四七	四五、二八	九、一一	〇・二	二三・八	二三・五	二三・六
ゼノア	五四	四四、二五	八、二四	七・五	二四・一	一五・五	一六・六
ローマ	五〇	四一、五四	二、二八	六・七	二四・八	一五・四	一八・一
ネープル	一五〇	四〇、三三	一四、一五	八・二	二四・三	一五・八	一六・〇
バレルモ	七〇	三八、〇六	一三、一九	一〇・三	二四・八*	一七・三	一四・五
ラグサ	一五	四二、三八	一八、〇七	八・七	二五・〇	一六・五	一六・三
セツチンエ	六六五	四二、二四	一八、五五	一・七	二三・〇	一〇・七	二二・七
フイリツツポペル	一六〇	四二、〇九	二四、二五	〇・五	二三・五	二二・一	二四・〇
コンスタンチノープル	七五	四一、〇三	二八、二八	五・二	二三・六*	一四・三	一八・四
アテネ	一〇七	三七、五八	二三、四四	九・三	二七・〇	一七・七	一七・七

全域に於ける七月平均溫度は約二十四及び二十九度の間を動搖する故に、冬の溫度は夏の溫度よりも遙かに均一的である。スペインの內部、シシリー、希臘は夏最も暑く、其處では又空氣の溫度及び曇天は最も僅少で、日光の照る期間は最大可能限度であり、碧色は最も强度のものである。

これら總ての地中海氣候の諸性質は、唯、海岸地方と深く橫たはる地方とに於てのみ典型的に形成されて居る。山勝ちの部分、特にバルカン半島の北部に於ては夏の乾燥及び降雨分割の嚴格なる週期が無くなる故に、既に高度と共に益ゝ明瞭になる中歐の特質を負びて居る。海岸と內陸との此の對立は前頁に揭げたる表の數ケ所の平均溫度の報告より推定し得る。

第三節　流出諸關係

種々な氣候上の諸關係に相應して、歐羅巴の河川・湖沼の狀態及びその水狀も、非常に多種多樣な影響に依存して居る。歐羅巴大陸の大部分は、四季の降雨分布でなく、雪の溶解の出現と蒸發の大いさとが、規則正しい高水量及び低水量を規則付ける諸地方に屬してゐる。唯、地中海諸國に於ては、河川が、その源を、雪と氷河とをもつてゐる高山に發する諸地方を除けば排水曲線は雨量分布の週期性の摸寫になる。從つて水勢の週期によつて、一般に、四大氣候區に

相應する一列の河川タイプが分類される。

西歐タイプの河川――諾威及びスコットランドの山脈の河は屬しないがラインの左岸諸支流は之に屬する――は、冬が可成り溫和で、濕潤なる上に、初冬には、降霜雪の或期間常に全く屢〻氷雪の溶ける天氣が出現する故に、冬には高い水量をもつてゐるが、一方、低い水量は、强度の蒸發期に從つて盛夏に起る。その振幅は可成り平均的な降雨分布のために小さいが、流出を遲滯せしめる透過性か、不透過性かの岩石の種類によつて、全く多種多樣の流域を形成して居る。東歐の、卽ち東ドイツ、瑞典及びロシアの河川は、遲く始まる雪解によつて、高い水量を維持する。從つて晩春に最高限度の水量をもち、雪覆期と高所の源泉の涸渴期とに對する冬に最小限度の水量をもつてゐる。本來の高山河川も亦同タイプに屬するが、此等河川に於ては高い水量は、盛夏にまで遲延する。本來の中歐タイプの河川に於ては、最小限度は夏の終り、蒸發が最高點に達する時に起る。しかし高い水量は中央群山地に於ける雪解期なる春に初めて起り、而も山が高ければ高いだけ遲く起つてくる。從つて非常に多樣なる高度の流域をもつ大河は、殊にラインに於て非常に明らかに出現して居る如く、その諸支流の影響のもとに諸極點の移動を示して居る。ライン川は、アルプス河川として、上ラインの低地に到るまでその特長を保持して居り、更に下方にては主要最高限度は春へ、最小限度は秋へ移動し、振幅の增加的減少も、それと提携して起つてゐる。最後に地中海タイプに於ては、降雨が年週期を規定し、水勢の最小限度は夏に起り、往々フューマル・タイプ（Fiumare）（スペインの內部、下イタリー、希臘）にまで激化し、高い水量は各半年のいろ〳〵な月に現はれる。之に反して、更に高山に於ける雪解によつても亦給水されるポー河の如き河川は、秋の雨の高い水量と並んで、初夏の雪解高水量をも有してゐるのである。

第五章　植物被覆並びに動物界

第一節　概　觀

比較的近い地質的過去に於いて、歐羅巴の大部に於いて全體的及び數回に恒る植物界の變遷が氣候の變動と提携して起つた。その上に、ヨーロッパに於いては、他の何處に於けるより多く、自然的植物覆衣及び山水の姿を一部は完全に破壞し、一部は人口的栽培又は他の要素を輸入することにより變更した人間の影響が加つてゐる。

第三紀中新世に於ては猶歐羅巴、アジア、北アメリカ、の大部は亞熱帶的乃至熱帶的性質の非常に統一的な一植物被覆をもつて居た。蓋し歐亞間の廣大な大陸結合があつたのみでなく、當時は又北大西洋の地塊を越えての移住も實現され得たからである。アルプス及び中歐に至るまでの熱帶的哺乳動物界の代表者の普及及びアフリカより來れる高山植物の普及が認めしめる如く、南歐とアフリカとの間には當時猶大なる地橋が存在して居たのである。北極地方の諸島並びにシユピッツベルゲンに於ても亦第三紀中新世の該地方植物は猶溫帶的なメソターム(mesotherm)の性質を有して居た。其の事はケツペン(Köppen)が、他の諸事實と關聯して、ベーリング海峽地方に於ける第三紀中新世の北極の位置より說明してゐる所である。鮮新世に於ては氣候の漸次的冷化が初まり、從つて氣候、植物諸帶の劃然たる形成が初まつた。古生代の植物(megathermе Pflanzen)は地中海領域にのみ殘り、此處に於て大乾燥と蒸發と順應した。一方中緯度に於ては新らしいメソターム(mesotherm)の種類が生じ、更に北に於てはミクロターム(microtherm)の、最後に北極の種類が生じた。同樣に、漸次に大なる高度に隆められたアルプス褶曲山脈も統一的な、最新の第三紀のオレオフィト(Oreophyten)の植物或は高山植物が繁植するに至つた。北アメリカとの交通は北大西洋地塊の滅亡以來不可能となり、その結果類似の代表的種類を通じて歐羅巴的及び北アメリカ的植物界(Floaa)並びに動物界(Fauna)の分化が起つた。

沖積期の氣候の動搖は植物被覆の、特に中歐の植物被覆の構成に於ける徹底的變化を齎らした。最初の氷河時代の出現は有機體をして一方に於ては、凍結せる北歐領域より中及び南歐の不凍平原へ推し進め、他方に於てはアルプス氷河地方の高い高山の有機物をば、山脈中の僅少の亡命物までも、周圍のあらゆる方面に向つて移住せしめた。かくて其後の總ての氷河時代に於ける

と等しく、當時は鮮新世の濶葉樹林は遙かに東南及び西南へ退けられ、中歐、西歐の無氷地方は、氷塊の縁にてはツンドラ性、氷より可成り遠隔せる場合及び内奥の位置に於ては北方の針葉樹林性を負ふ所のアークトアルプス(Arktoalpen) 動植物界に植民された。如何なる氷間時代及び後氷河時代に於ても此等の混交アークトアルプス群落は再び氷の無い領域に移動したが、更に東方のクセロフィル(xerophile) 及び黒海・ザルマート(pontisch-sarmatisch) の要素により、並びに就中アルプスの氷河間植物の示す如く東南のイリリエン(Illyrisch)の要素、最後に又西方——此處に於てはフランスが地中海及び中歐の動植物間に介在する——の大西洋形態により強められてゐる。從つて現今のアルプス地方植物界は大體四成分より成つてゐる。即ち、(一)氷河時代にも殆んど氷河に被はれなかつた西南及び東南のグループの中に最も純粋に保持された主として地中海系の第三紀世の基礎、(二)氷河時代の間に移住した北方の要素、(三)東より來り特に中心アルプス(ワリスWallis、エンガヂンEngadin、ヴィンシュガウ Vinschgau 等)の乾燥溪谷に於て最も都好合な條件を見出した黒海ザルマートの移住植物及び(四)大して東方には達しなかつた最近の大西洋の移住植物より成る。氷河時代遺物たる北極地方の、或は一般に北方の系統は特に適應せる位置、例へば沼澤地方又は低緯度及び海拔高度の僅少なる地に尙屢〻維持されてゐる。が他の地に於てはアークトアルプス形態は最後の氷河時代の終りに高山及び北方へ退けられたのである

しかし乍ら、氷河後の氣候變動も亦中歐植物の構成にとつては重要であつた。後氷河時代の多くのステップ相をなして上述の如くクセロフィールの形態が東方より大アルプス溪谷へ移動したのみならず、又アルプスの北方及びライン河を越えて西方へ押し進み、かくて、氣候の濕潤化にも拘らず氣候土地が特に適合する多くの地方、殊に黄土領域及び一般に石灰質の豐富な土地に於て現今に至るまで遺物系統として存在して來て居る。此等東方移住は殊に後氷河時代の末期の所謂クリマオプチマム(Klimaoptimum) の時代に瀕繁に起つた。それは先づ北歐に於ける、次いで屢〻中歐にても起れる總ての植物の現代に對する二百乃至四百米の上昇により説明される所謂大西洋時代にその頂點に達した。スカンヂナヴィア、ロシア、北ドイツ、ボヘミヤ及びアルプスに於ける近代の湖沼研究の結果及び新舊泥炭の間に濶葉樹の遺物をもつ境界線の證明並びに湖沼を圍繞する森林構成に於ける變化の證明は實に斯くの如き氷河後時代の氣候變化の假定と一致してゐる。恐らく後氷河時代のツンドラ時代に連絡する種類の少ない松(Kiefer)及び白樺(Birken)時代には先づ第一に榛(ハシバミ)(Hasel) 次に槲の混交林、更にとうひ(Fichte) 及びはんのき (Erle) が蔓延し、とうひが勢力を得、同時にぶな(Buche) と樅(Tanne) が入り來

り、遂に樅が重きをなしたといはれてゐる。且永續的溫暖期には此等の種類は悉く遙かに今日の高度境界を越えて擴がつたに違ひなく、其上次に所謂亞熱帶的時代には現今まで續く氣候の惡化の結果森林が漸次的變化が起り、個々の種類の樹木は高い位置から今日の分布領域へ退いたのである。恐らく此等の推移と同時に且同原因より、最近の過去に於ても亦東歐の諸ステップに於ける森林の推進が行はれた。

地中海歐羅巴(Mediterranen Europa)の植物界は大なる固定性を有した。恐らく既に鮮新世に於て、夏の乾燥及び大蒸發に順應せる半クセロフィール的植物の形成が初まつた。蓋し實に前アジア・北アフリカステップ地帶が既に新らしい第三紀世に歐羅巴の大地を襲つたからである。氷河時代は南歐に於ては何等大した深刻な變化を齎らさなかつたから、今日の地中海植物は、前アジアの植物と密接な類似ある以外に、新第三紀世の植物と著しき關連を示してゐる。けだし、それは第三紀世の亞熱帶植物の子孫及び後に中、西、東歐から來れる移住植物より成れるが故である。こゝに於いては個々の動物形態も亦第三紀世時代よりの姿を維持して來てゐる。

今日の氣候が現はれて以來、併し人間の干渉を受ける以前、歐羅巴の地上に蔓延する原始的植物構造はツンドラ、森林、原始牧場及び牧場、沼地、荒野、灌木草原及び草原並びに種々の形態の地中海的灌木丘等である。此等の構造が如何なる關係に於て自然景觀を構成してゐたかに關しては、先づ僅少の地方につき研究されて居る。しかし、兎に角、確かに全歐に亙り森林は大部分消えうせてしまつた。而してそれは耕作地獲得を目的とする組織的開墾、並びに又森林保護の缺乏と無思慮に森林を荒廢せしめた事に起因してゐる。加之その爲に森林狀態は氣候的諸要因の破壞的干渉に委ねられたのである。上述の事は先づ第一に特に西歐及び大部分の中歐に關し、最後に、森林に代つて大平原に灌木丘又は荒廢せるカルスト（磽角不毛の岩山）林が現はれたる地、卽ち地中海諸國につき妥當するが、牧場或は曲木が上方の森林限界を擊退した所の高山に於ける森林の鬪爭帶についても妥當する。主として本來濕潤なる低地が人工的排水、若しくは增進的斷片林構成の自然的過程により森林地方になれる所に於ては森林面積が少しく擴大し、そしてかの森林面の縮小に對立してゐる。しかし又、森林の構成も人間によつて屢〻變化せしめられてゐる。蓋し特に原始的中歐混交森林、或はまた濶葉樹林成分がとうひを主とする多少統一的な針葉林に變ぜられたからである。カルスト地方及び他の多くの地方に於ける如く、廣大な面積が完全に新らしく造林された所では、人間により滅亡せる以前の森林成分が問題となるか、或は又從前の荒野、若しくは不毛の流砂及び砂濱地方が問題となる。完全

に無林の荒野なるものは氣候と土地とにより特にそれに適合する北海諸國に於ても亦地質的現在では廣汎には存在してゐなかつた樣である。大體一般的に沼澤地方は廣さを減じ、特に中歐なる廣大な文化地方に於ては萎縮したが、東歐の起伏なき平原に於ては猶廣大に維持されて居た。加之北部瑞典に於ては永續的に森林を壓倒し、北極地方の森林限界を南方へ退けて居る。黑海及びパノニア平原の廣大草原も耕作平原により漸次消滅して居る。しかしハンガリーの草原(Puszta)は樹木群の破滅によつて樹木草原(Baumsteppe)から生じたのであらう。かくて一般に耕作地は擴大したが、一方人口及び文化の退歩せる、地中海歐羅巴の大部分に於いては、かつての耕作地が該地方の氣候的諸關係の影響をうけて、果樹地の銷沈、頽廢及び淸洗により荒野になり、灌木丘諸構造を以て被はれてしまつた。

尙ワグナー(H. Wagner)の分類によればその政治境界內の歐羅巴に於ける割當次の如し。

農業耕作地	四三〇〇千粁	四四%
森木灌木地	三〇〇〇	三一
草　地	六〇〇〇	六
不生產的地方	一八〇〇	一九

北極地方の荒野及び裏海沈降地の荒涼たるステップ——但し是は始めに選擇せる歐羅巴の自然的境界の彼方に在る——に於ける歐羅巴の小部分、更に大部分の沼澤地方、湖沼面及び高山地方の荒蕪地、尙又人間の居住空間及び道路網も不生產的なりと見做される。從つて農業的、林業的に不生產となる土地は殆んど全く耕作地の內部に於て潰された小斷片面に分配され、最外部の境界は今日旣に殆んど到る處非常に縮少されて居る。同樣に自然景觀も今日は殆んど全く、それ自身も再び不斷の變革をなしてきた文化景觀により驅逐され、主として唯東方の森林及び草原諸地方、若干の高山地方及び多くの荒野、沼澤、湖沼諸地方に維持されて來たのである。從つて多くの諸地方に於て人工的に於て人工的留保を創造し、以て數個の自然景觀を更に毀損する事より保護せんとする自然保護運動が努め行はれてゐる。

第二節　植物地帶並びにその野獸

歐羅巴植物被覆は人類によりかくも廣汎な變革を受けたのにも拘らず、一連の植物諸帶が此處でも亦分類することができる。此等諸帶は、大部分はアジアの類似の諸地帶の繼續をなして、

主として東西に走つてゐる。しかし乍ら、大氣候區、植物地域（Florenreiche）の何れとも一致してゐない。

一、樹木の無いツンドラ帶は、歐羅巴大陸に於ては、ロシア、フィンランドの北氷洋岸に沿へる細長い一地帶――この地帶はペチョラ地方に於ては比較的に廣く、溫暖な大西洋潮流の海岸に近い支流の爲めにコラ半島及びフィンランド中心部に於ては可成り狹い――に限られ、島狀の場所と共に特に諸川の間、更に又森林帶へ侵入し、荒發せるスカンヂナヴィアのフィエルド Fjeld に於て最南方に達して居る。非常な深所まで凍結せる大地は夏期唯その表面のみが解氷する。而してその大地の濕氣が滲み込む各程度に應じて、クラドニア・ランギフェリナ（Cladonia rangiferina）をもつて乾燥せる地衣類ツンドラ、或は比較的濕潤な蘚臺ツンドラ（Moostundra）及び沼澤化せる水苔ツンドラ（Torfmoostundra）が大地を被つてゐる。保護された日當りの良い場所には柳、白樺類の矮小灌木などが存し、鈍い綠色を生々した諸松の色を以て中斷する花樹、デイラ（Dryas）、ゆきのした（Saxifragen）うまのあしがた屬（Ranunkel）ジレーネ（Silenen）等が比較的に屢〻存在してゐる。陸地に於ては全部で約三五〇、〇〇〇方粁が此の地中に屬し、其の動物界は北極周圍の地方動物より成る。馴鹿はラップ人（Lap）及びサモエード人（Samojed）とに缺くべからざる獵獸並びに家畜として存在し、北極兎、北極狐及レミング（旅鼠 Lemming）は遙かに廣く蔓延して居る。陸地に白熊の出現するのは稀である。水禽（Schwimmvögel）、鷗（Move）、うみすゞめ（Alken）、うみがらす（Sumen）は巨群をなして現はれるが、無暴な掠奪狩獵の爲、海象、海豹などは急激な減少をなしつゝある。

二、ツンドラ帶の南境は北極地方樹木限界にして、萎縮せる落葉松、松、えぞまつ及び白樺より成る多少より廣大な鬪爭地帶（Kampfgürtel）である。此の鬪爭地帶は一般に西に於ける北緯七十度と東に於ける六十七度との間に在り、河谷に於ては更に北方へ進むが又時間的に或變動を受けたものである。これより南方では北方針葉樹林帶が初まり、北瑞典、フィンランド及び北ロシアに於ては西北より東南へ經過する一線に至るまで、中央瑞典海邊沈降地の北端に於ける北緯六十度よりオネガ湖の南岸を越える約北緯五十二度に於けるウラル山脈の南端まで約二百萬方粁の面積上に展開して居る。構成の非常な單調性及び大抵は稍高い樹木の密生が此の地方を特色付けてゐる。ロシアの部分に勢力を有するシベリア・ウラル松のとうひ、樅、落葉松、アルフェ（Arve）及び松の外に瑞典及びフィンランドには此等針系樹林の歐羅巴松のものが、ヒース（Heide）、漿果類の下生を以て現はれ、濶葉樹の內では殆んど白樺（Birke）とみやまなゝか

まど(Eberesche)のみが存在として居る。土地は、氷河の沈澱物より生ぜる、洗滌により漂白されて榮養鹽に乏しいが、腐植土材は過剰にして漠大な硅酸を含有する漂白砂(Bleichsand)若しくはポドソル(Podsol)であり、腐植土の增加により堅固な水の滲透しない沼產鐵鑛に變じ、廣汎な沼澤地及び泥炭地が其の上に擴がつて居る。北方ロシアに於ては森林面の約三分ノ二、此帶に於けるスカンヂナヴィアの部分に於ては五十乃至六十パーセントが猶被はれて居り、栽培地は大抵小開拓島(Rodungsinsel)として現はれてゐる。

三、南へ行くに從ひ益々多くの闊葉濶が針葉樹林に混入し、混交北歐森林の一帶が始まつてゐる。此の帶は、高山植物の諸島より成る英諸島・北フランス、南方スカンヂナヴィア、北ドイツ、ポーランド及び中央ロシア、北緯五十五度に於けるウラル前地にて北方の針葉樹林帶と合する西南より東北へ經過する一線に至るまでの地方を包含してゐる。面してこの地帶は決して封鎖的なる森林被覆地方を形成せず、牧場地をもつた廣汎な森林中の空地により中斷されてゐる。暴風雨の多い北海海岸及びその近くに於ては樹木の乏しい荒野が廣大な面を占め、沼澤濕潤地方も氷河沈澱物の不滲透地及びイギリス群山に今日でも猶廣大に擴がつて居る。且森林の構成は海に對する位置及び高度に從ひ各非常に異なつてゐる。兎に角森林の最も收縮せる西歐部分に於ては、溫和な冬の影響のもとに、森林を形成せる樹木類と相並び、濶葉樹の槲と山毛欅、針葉樹の松、及び冬青(ソヨゴ)(Ilex aquifolium)、常綠の槲(Quercus ilex)、やまもも(Arbutus)、多くのえにしだ屬の如き常綠樹が存在し、落葉松は大西洋氣候區に於ては完全に無くなつてゐる。西北ドイツ、特にライン領域に於ては槲を主とする濶葉樹林が勢力を有し、スカンヂナヴィアでは北緯六十三度まで進む。砂地に於ては松が蔓延し、南方バルド海の特色樹木たる山毛欅は西北の涼夏の諸地方(アイルランド、スコットランド、北イングランド)並びに南瑞典の大陸領域及びウィックゼル河東を避けてゐる。

四、中佛、西佛、中獨、南獨、カルパチア地方、バルカン半島の北部を包含する混交中央歐羅巴森林帶は前帶より漠然と分れ、特に種類の非常に多い事により前帶と區別されて居る。濶葉樹の內では槲は唯稀に森林を形成して現はれ、山毛欅はその境界がウィックゼル下流よりブーグ(Bug)の諸源泉まで、而してカルパチア山脈とバルカンの外端に於てクリミア及びコーカサスの方へまで進み、遙かに廣大に擴がつて居る。尙大楓樹、白樺も存在し、特にフランスに現はれ、フランスの西南は實に、多くの常綠濶葉樹をもつ地中海地方への漸移地域を作つて居る。此の地方の東南に於ては既に栗——此は全中及び南佛にも存在してゐる——すゞかけ

の木、銀苦提樹並びにセソサイヒ（Carriseiche）が南方及びイリリアの要素として出現して居る。針葉樹の内では、中歐に於てはとうひと樅、東南に於ては黒松が勢力を有す。山中に於ては山毛欅をもつ混交森林（アルプスでは平均千米、ハルツでは六百米まで）、次に多くの下方地帶に於ける針葉樹（とうひ及び樅、落葉松、山松、アルフェ Arve）が高地帶より上方の樹木境界までの一列を形成し、該列はドイツ中央群山に於ては一〇〇〇乃至一四〇〇米、アルプスに於ては一五五〇乃至二二〇〇米、カルパチア山脈に於ては一四〇〇乃至一九〇〇米の所に存在して居る。其上には高山地方の、花多きアルプス草原が擴がつて居る。パノニア平原の諸部分は樹木のないステップ性諸島を形成して居る。

大歐羅巴森林帶に於ては非常に僅かな種類の大野獸が保持され、その一部は氷河時代後も生き長らへて居るもの、一部分は其後東方より移住してきたものである。しかし、彼等の排除は森林の增進的縮小及び耕作草原の擴大によつても促進された。マンモス、柔毛性犀の絶滅の如き、冲積世の大哺乳動物の絶滅後、北極地方動物は最初南方へ退き爾來再び北方へ擊退された。野生の馬及び十六世紀には尙ポーランドに柱んで居た野牛は人類の爲根絶され、リトアニアの野牛も同じ運命に遭ひ、麋は北バルト海諸地方及び北ロシアに限られて居る。鹿（Hirsch）ダムウイルド（Damwild 一種の鹿）、レー（Reh 小鹿の一種）及び野兎は比較的に廣く擴がり、濕潤な低地には野猪が擴がつて居る。ヘルメリン（Hermelin）エーデルマルデル（Edelmarder）、ネルツ（Nerz）（何れも黄鼬類）、かはうそ、海狸等の高貴な毛皮獸類はロシアの森林に於ても既に非常に稀になつて居る。純粹のアルプス諸動物の中ではかもしか、もるもつとがアルプス、カルパチア及びピレネー山脈に於ける植物境界の上部に猶非常に多く分布し、野生山羊もアルプスの保護區に再び分布しつゝある。大肉食獸の内では唯狐とあなぐまが一般に擴がつて居り、熊はカルパチア山脈、バルカン半島とスカンヂナヴィアとの群山及びロシアに限られ、山猫類は此處並びに時には猶カルパチア山脈に現はれ、曾てはアルプス山脈まで擴がつて居た。フイエルフラス（Fjällfrass）は精々スカンヂナヴィアに出現し、狼は東歐に於て及びカルパチアに於てまで孤立し、而して又東フランス及びスペインに於ても孤立してゐる。河川の魚量は到る處甚しく減少し、唯北及び東歐に於てのみ猶非常に豊かである。

五、黒海、裏海地方に於ては、密林地帶が又氣候的諸原因より南方へ向ふに從つて益々解體し、此の地帶に次いで先づ第一に猶比較的に降雨の多い過程的、漸移的ステップ、瑞西に於ける遊園地的性質をもてる樹木ステップが續いてゐる。それより、樹木生長が制限されてゐる爲、

河岸に沿へる行廊森林へは、殆んど樹木の生長しない鹽分の多いしかも殆んど深く濕氣の滲み込まない黄土地をもつてゐる黒海の牧場ステップが現はれる。硬質草――大部分はポア（Poa）シュチパ（Stipa）類――は、春には、栽培植物により驅逐されて居ない限り、色々の花咲く球根植物を織り込んで、綠の海を形成してゐる。しかし晩夏には遙かに腐敗せるにがよもぎ灌木をもつた乾燥し、日に燒けた表面を形成してゐる。最後に草帶よりハロファイト（Halophyten）サルソラセーン（Salsolaceen）及び荆棘の藪をもてる裏海沈降地の鹽の若しくは荒涼たるステップが發展してゐる。スペルモフィルス（Spermophilus）メリオネス（meriones）野兎（Sprunghase）とびねずみ（Springmaus）等の無數の齧齒類がステップの地方動物を特色付けて居り、かもしか（Saiga-Antilope）は既にアジアの方へ驅逐されてゐる。きあしばつた（Heuschreck）の巨大な群は此處から中歐方面まで達した。

六、中歐森林帶に於ては、一部はカルストに於ける如く劃然たる境界をもち、一記は過渡地方により連結されて、地中海植物の一帶が著明な順應現象を以て永い夏の乾燥及び强烈な蒸發に次いで起つてゐる。だが此處に於ても亦、特に北方の部分に於ては葉を交へる樣な樹木の數は決して少なくなく、山林に於ては殆んどさうした樹木が獨占的で、殊に槲、ぶなの木（Rotbuche）白樺、栗（Edelkastanie）楓（ahorne）すゞかけ（platane）の木、銀菩提樹（Silberlinde）等が主である。唯四百米乃至七百米迄に限られた沈降地及び丘陵地にのみ常綠の硬葉樹木があり、月桂樹（Larbeer）てんにんくわ（Myrthe）夾竹桃（Oleander）やまもも（Erdbeerbaum）野生のぐみ（Ölbaum）種々の常綠の槲、特にクェルクス・イレックス（Quercus ilex）は小森林を形成し、クェルクス・イレックスは往々千六百米迄も上つてゐる。針葉樹林の下には、比較的低い位置に對して磯松（Meerstrandkiefer）アレッポ松（Aleppokiefer）傘松（Pinie）漸移地域及び比較的高い所に於てはいとすぎ（Zypresse）山に在つては栗、水松（Eibe）及び種々の北方の松が各々特徵をなして居るが、とうひは此處にも亦見られない。地中海地域の唯一の土着の椰子たる矮椰子（Zwergpalm）は丁度今スペイン、イタリーの海岸に見られて居り、東南スペインのエルヘ（Elche）に於て森林を形成する棗椰子（Dattelpalm）はアフリカより輸入され、厚肉の龍舌蘭及びオプンチェン（Opuntien）はアメリカより輸入され、此等のものはクセロフィール植物形態によく順應して居る。此の地帶も亦曾ては、廣大な且高い密林の量は常に非常に少かつたが、實に森林に富んで居た。今日では一般的森林荒廢の結果として森林の場所にマクヒーン（Macchien）――此處では常綠の槲、えにしだ（Ginster）夾竹桃（Aleander）ふすだしら（Pistazien）木犀草科植物（Cistrosen）みねずばら（Eriken）

等の僅少の種類が屢〻勢力を占めて居る――の貫き難き常綠の且荊棘多き叢林が現はれてゐるか、或はスペインにてはトミラレス(Tomicllares)、希臘ではフリガナ(Phrygana)と呼ばれる乾燥せる半灌木原が出現して居る。草原及び灌木原――スペインにては乾燥せるはねがや(Haefags)より成る――も缺けて居ない。森林は栽培により屢〻補はれ、その栽培の中ではオリーヴ樹、無花果、柘榴の實及び桑が牛耳つて居り、屢〻荒廢せる形態に於ても景觀を規定して居る。濕潤な牧場の場所には、山中に於ても、乾燥せる牧場若しくは草野、灌木原が出現して居る。

大肉食獸は豺を除いては根絶せしめられ、野生の哺乳類の内では、西部地中海領域には麝香猫、サルヂニア及びクリートにはやまあらし、野猪、野生の羊(Mufron)、若干の希臘の諸島には野生山羊が尙存在して居る。爬虫類(蛇、蜥蜴、龜)昆虫類及び軟體動物の數は夥しい。アルプスに於ては既に根絶せる兀鷹の一種が地中海の高山にては今も生棲して居る。ヂブラルタルの岩上のマゴット(Magot)は恐らく輸入されたものであらう。

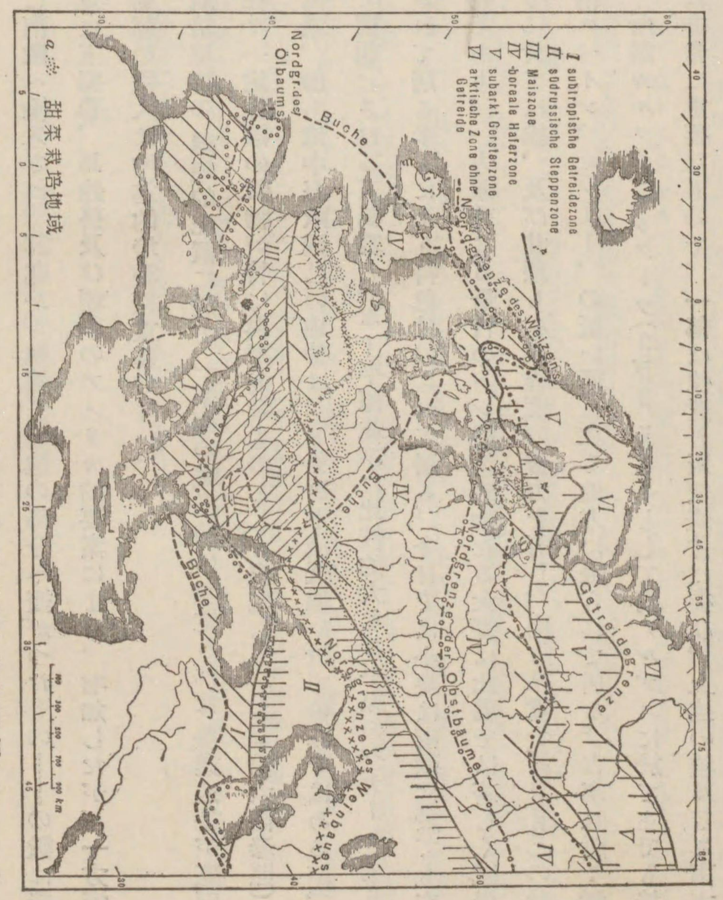
第三節　栽培植物並びに家畜

歐羅巴の栽培植物――一部は歷史前及び初期の時代以來特有のものであり、一部は古代アジアより先づ第一に南歐へ輸入され、其處から歐羅巴の他の部分へ擴がつたもの――の數は後世に於ては、特に更に玉蜀黍、馬鈴薯及び煙草のアメリカ的要素により、增加したが、一方家畜の飼養に於ては新種の輸入は增進的培養程重要でない。

最も重要なる栽培植物の地理的配置に於て一系列の氣候的に規定された農業地帶が區別され、その中には往々一定種類の穀物が特に典型的なものとして出現して居る。(第六圖參照)

此等諸帶の最南端、卽ち地中海歐羅巴の地帶は、ドナウ下流低地に於てのみではあるが、國民の食料品として問題にされる玉蜀黍と、ポー平原並びに比較的大なる平原のバナート(Banat)に於てのみ保持されて居る米とにより特色付けられて居る。今日では小麥は南歐に於ても亦主なるパン製造穀物であり、一方顯著なる最古のパン製造穀物たる大麥は此處では著しく減退して居る。最暖部分に於ては綿、及び甘蔗も亦或程度の勢力を有し、南方果實(Agrumen)の栽培はポルトガル、南スペイン、シシリー、の低い所に在る地方に限られて居る。古來且屢〻穀物耕作と結び付き、所謂カルツラ・ミックトラ(cultura mixta)として南アルプスに於てまでも培養された栽培樹木は非常に重要なもので、一部は位置と販賣條件に從ひ、上述の種々なる南方果

1. 亞熱帶穀物地帶
2. 南ロシアステップ地帶
3. 玉蜀黍地帶
4. 北方燕麥地帶
5. 亞極地大麥地帶
6. 北極地帶



第六圖　ヨーロッパに於ける耕作地帶と耕作限界

實の種類が勢力を占めて居る人工的灌漑地に在る。栗は實に森林を形成し乍ら南方アルプス諸谷にまで進み、國民の食料として貴重なものである。葡萄栽培は蔓草栽培か又は栽培樹木間の自由蔓かの何れかの中で殆んど一般的に擴がつてゐる。家畜の中では、羊は、特にスペイン、希臘に於て、毛畜として、山羊は乳畜として、驢馬及び騾馬は運搬、曳引動物として先頭に立ち、一方牛類は牧場の無い所では退失し、殆んど給付能力なき小さな種類の飼養に滿足して居るが普通の牛の代りに屢〻水牛が存存してゐる。養蠶は特に南フランス及び上イタリーに於ては非常に完全な方法で行はれてゐる。

北方に續く地帶に於ては小麥が主要穀物であり、該穀物は西歐に於ては北緯五十六度、ロシアに於ては北緯六十二度なる極限境界に達してゐる。フランス、南獨、ハンガリー及び黑海穀物倉の諸地方は小麥栽培の主要領域であり、比較的に惡い土地、並びに高所には小麥と相並んで大麥、裸麥及び燕麥も擴がり、北佛、中獨、ズーデーテン領域及び中露に於ては、特に肥えたる土地に甜菜が位置を占めた。煙草栽培は上流ラインの平原、ハンガリー及びバルカン諸地方の夏暖かい地方に於て重要であり、比較的高い所には亞麻栽培が存在して居る。耕地と相並んで、濕潤なる西方及び山脈地方に於ては牧場が益々大なる發展をなして居る。馬鈴薯は特に砂多き

地に栽培される。葡萄栽培はフランスに於ては四十九度、ドイツに於ては五十二度、ウクライナに在つては嚴しい冬の爲に既に四十八度に於て極限境界に達してゐる。北方には裸麥帶が葡萄帶に次いで在り、裸麥は特に中北獨ボヘミヤ、及び中露に於て穀物地面の最大部分を占めて居る。馬鈴薯は更に著しく、而してアイルランドに於ては主要物となり、亞麻はバルト諸國にその主要蔓延領域を有す。北方に行くに從ひ燕麥は益々重要となり、最後に北及び東北歐羅巴の僅少の農業地面に於ては大麥が勢力を占め初め、その支配は諸威の西海岸に於ては北緯七十度迄及び、次いで東方に行くに從ひ北緯六十五度迄退いてゐる。

總ての此等諸帶に於ては、その飼養が西歐に於ては主として肉を得るのに役立ち、其他に於ては乳を得る爲になされ、且比較的盛んな場合は廣大な地面に於ける牧草の栽培を規定する所の牛、更に特に東方の濶葉樹林地方及び玉蜀黍領域に主要領域を有する豚及び主としてハンガリー及びウクライナのステップ、並びに北海、バルト海の周圍の牧場地方に飼養される馬が家畜の主なるものである。牧羊は今日では唯二、三の荒野地方に若干の意義を有するのみである。馴鹿は高緯度の北方地方にのみ住んでゐる。

第六章　歐羅巴の人類

第一節　居住の進行

一　先史時代の民族

今日の歐羅巴の植民は、少くとも洪積紀の中期に遡り得る一發展の結果であり、而して此の發展は人類學的タイプの數回の變遷と結合して居たものであり、歐羅巴の個々の部分に於ては多種多樣の樣相で起つたものである。最古の人類が何處より歐羅巴大陸に達したかは吾人の知る所ではなく、彼等が南方及び東南より移住せりといふ屢〻耳にする假定は本來殆んど支持されない。蓋し人間の遺骸及び製作品(Artefakt)の最古の發見物は地中海地域よりも寧ろ中歐及び南佛より出て居るからである。例へばヂユッセルドルフ地方より出た有名な古代洪積層のネアンデルタール人(一八五六年)、人類學的に同じタイプを代表するベルギーのシュピ(一八八六年)及びクロアーチェンのクラピナ(一八九九年)の重要な發掘物、ハイデルベルヒ(一九〇七年)

及びドルドニュ縣のルムスチエル(一九〇八年)の發見物、ズーデーテン地方の黄土中及びジュウドメーレンのポラウエル山中の無數の發見物、瑞西アルプスのヴィルドキルヒリ及び龍洞窟の、並びにミックスニッツ及びトーテン山のドラッヘンヘーレより出た發掘物の如きこれである。しかし、トーテン山の龍洞窟のものには何等古生物の遺骸を供給しなかつた。氷河時代の一定の時期に於ける此等總ての及び他の發見物の正確な分類は必ずしも可能でなく、且又個々の研究者によりて種々の方法で行はれてゐる。從つて吾々は當然此處では該分類を純粹に人類學的有史以前の問題として是以上追求しない。人間が、西歐に於ては既に大或はミンデルリッス氷間時代(Mindel-Rifs-Interglazialzeit)に(而して北方諸威に於ける最近の發見物が敎ふる如く、北歐に於ては少くとも既に最後の氷河時代に)生息して居たといふ事のみは確實であり、然もこれは今日のタイプより遙かに遠ざかれるピテコイド(Pithekoid)的特徴を持つてゐるホモ・プリミゲニウス(Homo primigenius)と呼ばれ、一方最新の舊石器時代(Paläolithikum)、特に末期氷河時代のブュール時代(Bühlstadium)と比較されるマグダレニアン時代の人類はホモ・レセンス(Homo recens)と呼ばれてゐる。しかし特にズーデーテンの發掘物が示す如く、兩タイプ間には中間型式(Intermediärform)がまた存在してゐる。尙全舊石器時代に於いて文化は極めて漸次的に發達して來たことは明である。狩獵民及び採集民の段階に立ち、且恐らく既に或種の交換へ互に入つて居た穴居民が主として問題にされてゐる。最後に骨、角及び穴壁上の人間並びに動物の圖により歐羅巴の多くの場所で證明され、而して巨浪の如くに最近の民族が出現すると共に消失せし、此の時代の最新期に於ける高度の全盛文化は非常に注目に値するものである。

全新石器時代は氷河時代後のものであり、アルプスに於てはダウン時期(Daunstadium)よりも新らしいのである。新石器時代は中歐、西歐に對して、新らしい且大體に於てより高度の文化の移入——此の移入は多數の新種族の移住によつてのみ說明され得る——を意味し、一方古代生物(Paläolithiker)は漸次驅逐された。石器時代の主なる此の兩期の間の從來增大せし甚だしい罅隙は過渡形態の製作物の發見により漸次充塡され初めてゐる。此の新らしい住民は恐らく前アジア及び北アフリカより來つたもので、既に大麥、小麥、黍の幼稚な耕作、家畜飼養及び製陶を知つて居た。彼等の移住は氷河時代の消滅に續くステップ段階に多分起り、彼等の居住は當時の森林なき地域——此の領域は爾來恐らく決して再び居在なき樣にならなかつた——に於ける西歐に起つた。しかし乍ら、南部北歐に於ては廣い範圍に恆るメソリチッシュ(Mesolithi

sch)なケッケンメーヂンゲル文化(Kökkenmodingerkultur)が石器時代初期より末期への過渡文化を意味し、此の地方に於いては恐らく此等の時代の内に於いては何等の住民、種族が現はれなかつたであらうと思はれるのである。此處で恐らく、一般に比較的に非常な孤立の中にある南部バルト海地域に於けるが如く、所謂北方人種がその典型的な人種特徴たる長頭、高い身長及び淡褐色の皮膚を漸次完成したのであらう。だが我々は此の北方人種を人類學的單一體として、遙かに後に至つて始めて完成されたるアリアン族の、又はインドゲルマン族の言語共同體と同一視する譯にはいかぬ。南歐の新石器時代の人間は成程同樣に長頭により特徴付けられて居たが、しかし短身を特徴とし、それにより地中海人種を代表してゐる。中歐、特に南獨及びアルプスに於ては既に新石器時代の終りに北方及び前アジアの諸要素の種族混合が出現した。といふのは此處には長短兩頭蓋骨が相並んで發見されたからである。

さて、歐羅巴人類の其後の文化發展は大體に於てより迅速に行はれた。比較的新しい石器時代から、恐らく紀元前三千年の終りに――だが地方により時代を異にし、且殆ど後氷河時代の Klimaoptimum の時代に――確然たる境界なしに金屬時代の最古の時代卽ち銅器時代が發生した。しかし此の時代は純銅の代りに靑銅を使用する事によつて間もなく終結した。少くとも銅器時代以來又既に歐羅巴に於ける第三の種族要素の存在を立證することができる。卽ち、大體高度の短頭、長身及び急傾斜の後頭を特徴とし、恐らく前アジア出のヂナル族 (dianrisehe Rasse) がそれである。靑銅器時代の頂點は凡そ紀元前千四百年乃至千二百年の時代に當り、その擔當者は既にインドゲルマン族であつたが、一方歐羅巴の靑銅の由來に關しては、靑銅は多分歐羅巴及び東洋の種々の場所に於て相互に獨立に始めて使用されるに至つた、といひ得るのみである。最後に紀元前千二百年乃至五百年の時代に於ては最古の鐵器を持つた所謂ハルシュタット文化(Hallstatt Kultur) が新鐵器時代又は ラ・テヌ・文化 (La-Tene-Kultur) にまで導いてゐるのである。

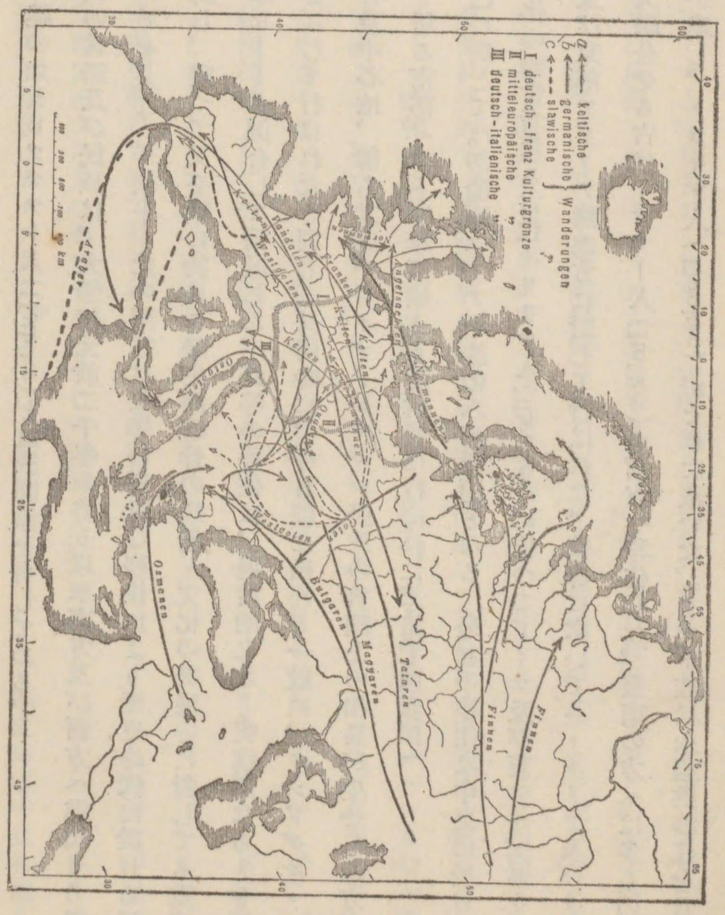
二　原史時代の民族形態

原史時代に於ては、從つて、紀元前一世紀に於ては、歐羅巴の西部――それにいつてのみ我々は此の時代の知識を有してゐる――には既に大部分インドゲルマン民族が住んでゐた。その外に特にイベリア(Iberer)リグリア(Ligurer)エトルリア(Etrusker)及びレーチア人(Räter)が前アリアン族の成分として存在して居た。長頭、短身、黑い皮膚を特徴とするイベリア人に恐らく地中海人種の最も純粹な代表者であり、從つて南歐の石器時代の人種と區別することができ

る。しかし他方又北アフリカの現今のベルベル人と關聯せしめることができる。彼等がもと彼等に因んで命名された半島の南部にのみ住み、大體紀元前七百年以來始めて、北方より移住して來たケルト人と共に所謂ケルトイベリア人として全半島に恆り、且西南フランスの方へ擴がつたのは上述の事と一致する。同じ人種的特徴をもつバレアール群島、サルヂニア及びシシリーの住民も亦イベリア人へ還元することができる。之に反してリグリア人(Ligurer)は短頭によりイベリア人より分たれてゐる。彼等は有史以前には遙か西方へ、恐らくは英諸島一面にまで擴がつて居たが、ローマ時代には單に、東は最下流ローヌ地方、ポー平原及びコルシカの一部に限られて居た。言語上全く孤立せる西ピレネーの今日のバスク人がイベリア及びリグリア人の後裔と見做されるや否やは、吾人が言語的或は人類學的標準の何れを前面に置くかに從ひ、種々解答される。航海民族として恐らく前アジアより希臘へ、更に中イタリーへ來り、其處でリグリア人と接觸せしエトルリア人の言語も亦從來知られて居ない。しかし西アルプスに於ては言語的には同じく尙明瞭にされてゐないレーチア人(Räter)が之に境し、その人類學的特徴たる頭及び小身は、瑞西アルプス及び西チロルの今日の種族、所謂アルプス人(Homo alpinus)の中に尙保持されて居る。最後にカレア人(Karer)は、前アジア出にして、歷史時代の且希臘人より前の希臘の及びエーゲ諸島の住民たる、恐らく紀元前二千年の比較的高度のクリート島文化の擔當者たる、謎の如きヒッチット人(Hethiter)と血族關係を有してゐる。

此等總ての古代の言語及び民族は、大體紀元前二千年の終り以來南方及び西方へ進出せるアリアン族又はインドゲルマン族——此の兩族は彼等の廣汎な移住により歷史時代に於ける民族形態の構成に對し、從つて又全歐に於ける歷史的事件の經過と文化の發展とに對しても重要な意義を有して來た——と混合して消滅した。此等の移住は、過渡的なると突進的なるとを問はず、個々の波をなして行はれたと同じく又同時に、今日既に殆んど一般に、インドゲルマン民族の發生地、普及中心地、卽ち其處からインドゲルマン民族の言語上の相異が生ぜし地方、なりと見做されて居る南部バルト海岸領域より放射狀に行はれた。(第七圖參照)

此の內で歐羅巴に對しては勿論西アリアン族のみが問題となる。最初の移住は中央に於けるハルシュタット文化の擔當者たる古代イリリア人(Illyriker)に依つてドイツ及び東アルプスを貫通し上イタリー及び東部アドリア諸地方に對して行はれた。彼等に次いでエトルリア及びリグリア人を驅逐し又融合せる古代イタリー人(Itoliker)が南方へ移住した。東南の方へは多くの波をなして希臘人が達し、トラキア人(Throkeer)がそれに續いた。ケルト族は永續的移住をなし



第七圖　ヨーロッパの民族移動通路

スペイン半島、西歐、中歐と上イタリーとの大部分、を所有し、且分派の諸群はバルカン半島と小アジアとの諸部分を占めた。彼等は續いては主として、既にキリスト降誕の久しい以前に、後のドイツ人たる西ゲルマン人がラインを越えてまで移轉した。東ゲルマン人はバルト海より黑海まで進み、一方北ゲルマン人は最も純粹な北方民族としてスカンヂナヴィア及びフィンランドの諸部分に分布し、バルト族及びスラヴ族はまだ東方に止まつて居た。かくしてローマ帝國の最初の世紀に現はれる如き民族形態が成立したのである。

勿論、前住民と移住民族との間の融和混合が盛に行はれ、從つて種族關係に於ける混合タイプの形成が此等總ての移住に結び付いて居た。其の故に北方の血は歐羅巴の殆んどあらゆる部分に達し、一方北方の特徴は地中海並びに前アジア、ヂナルの要素と混合により南方及び西方へ退かねばならなかつた。之と區別されるのは平和的な交通途上の文化運動及び文化傳播ではあるが、その意義はさまで大であると見る譯にはいかぬ。かくて、古代歐羅巴の物質文化は北アフリカと前アジアとの大オアシス經濟より、多くの非常に價値ある激勵を受け、其際フェニキアの商人が主として媒介者を司つた事は確かである。非常に多くの栽培植物と家畜の輸入、數學體系及び文字の輸入、度量衡の引繼並びに恐らく又金屬技術の建設も之に屬してゐる。し

かし、アリアン族は此等の文化補助手段を全く獨立に製作し、高い精神文化も亦彼等自身の民族精神より生じ、此の精神文化は最初は布臘に於て次に一部は希臘のを基礎としローマ帝國——此處では農業及び尙武を基礎として——に於てその頂點に達し、古代の遺產として今日の歐羅巴民族の文化の中に尙存在して居る。

三　歷史時代に於ける民族形態の變遷

明らかなる歷史時代以來歐羅巴の民族分布に現はれたる變遷は、一般に知られたるものとして、唯簡單に說明しよう。廣大な諸地方に於いて主として文化傳播により統一的に高度の一文化を齎らせる東方の希臘化の上へ、ローマ世界帝國の擴大と提携して、西部地中海諸國及び中歐と西歐との大部のローマ化が、植民地、道路の建段、ローマの州の行政とローマの文化形態及び經濟形態の輸入により起つた。之と結合せる民族推移は成程ローマ時代の末期に、その中に於て古代文化が減亡せる大なる民族の混沌を生せしめたが、それはしかし中歐のローマ化しない諸部分、北歐、東歐、に對しては、景觀景の中に自ら出現せる明確な文化境界をも創つた。

新らしい觀念と新らしい人類、卽ち、キリスト敎と早くより之に歸依せるゲルマン人の突進の爲にローマ帝國は瓦解した。匈奴の侵入により、深く歐羅巴の方へ侵入せる蒙古族の最初の波として惹起された所謂民族移動は東ゲルマン族を西方及び南方へ赴かしめ、彼等は此の見知らぬ地で、氣候、より高度の人口及びローマの後期文化の影響のもとに異敎的に滅亡し、唯一般的一變種の中にのみその恨跡を遺した。スペインの西ゴート、イタリーの東ゴート及びロンバルド、東部フランスのブルグンドの如きそれである。しかし乍ら、西部中歐、フランス及びイギリス諸島に於てはゲルマン人は多少ローマ化せるケルト族を犧牲にして文化を使用するに至り、キリスト敎ゲルマン的中世に於ては世界を支配した。蓋し東ゲルマン族の大移動と同時に西ゲルマン族及び民族群も亦移動し、ライン下流、中流岸のフランス、北佛、イングランドのアングルン及びザクセン、南獨のアレマネン及びバユワーレン、アルプス、の如き新居住地に固く完着した。略紀元後八百年以來西方のローマ化せるケルトゲルマン族と東方のドイツ原種族との間に、ドイツローマの言語及び文化境界がイギリス海峽よりヴァリスアルプスに亙つて形成され、爾來瀕發する鬪爭の一帶がドイツ氣質とフランス氣質との間に遺されてきた。ゲルマン人が確かに不斷に移り去つた東部中歐の地方に於ては、略六世紀の中葉以來スラブ族がドニエプル河及びプリプエト(Pripyet)河の沼澤地方に於ける彼等の推定的發生地より西へ進み、バノニアの移住路に達し、アジアのステップより前進せるアヴァール族により壓迫され、一部

は恐らく彼等と混合し、ハンガリー、東アルプス地方及びボヘミアの方へ向つてザルマチア地方よりエルベザールにまで進んだ。アドリア海にまで及ぶドナウ及びドラウ河(Drau)南の諸地方には七世紀にセルビア人及びホルワート人(Chorwat)が住し、一部はビザンチウムの支配者により移住せしめられ、一部は自由に移住した。スラヴ族の民族波に次いで再び蒙古族の民族の波、卽ちパーニア平原へのマジャール族の侵入(九〇〇年頃)が起り、其の定住生成(一〇〇〇年以來)によりスラヴ族は北方の及び南方の兩部分に永續的に分裂せしめられて居た。かくて、東部中歐へのアジアのステップ性の到達は、常に繰り返して、東方の遊牧民族に對する道しるべ及び移住路なる事が證明された。同じく黑海のステップにより西方へ進められたチュラン・蒙古(turanisch-mongolisch)のブルガリア人は、同じ風にしてドナウ河流岸に定住し、後に至つて始めてバルカン山脈の兩側及びロドープ山脈(Rhodope-Gelrirge)に定着したが、此處で彼等は間もなく言語的及び文化的にスラヴ化した。南北兩スラヴ族の空間的分割よりも、西方の、ローマの及びドイツの文化に浴せる西スラヴ族——クロアチア人も亦之に屬す——と西方の精神生活を知らずにビザンチウム教會により總括された東スラヴ族、セルビア人、ブルガリア人、ウクライナ人並びに就中ロシア人、とへの分離は一層意味多きものであつた。此等東スラヴ民族は恐らく十世紀に至つても尙大內地移住とより弱小の隣族に對する內地植民とによりて北方及び東方へ擴がるに成功し、漸次東歐の森林地方を滿たし其際該スラヴ民族より後れてバルト海沿岸に推進せる他のスラヴ民族、就中フィン族と混合した。彼等の中で本來のフィン人は一說によれば成程既に早くより北アジアよりウラル山脈を越えて移住しては居たが、略紀元後四世紀以來始めてフィンランドに達し、其處で瑞典人と文化的接觸並びに肉體的混合をなしたのである。しかし乍ら、コッシナ(Kossinna)によれば眞のフィン人は北方種族の歐羅巴人である。ローマ化せるスラヴ族及びダキア人のドナウ下流を越ゆる北方の後退から、略十二世紀以來、ルーマニア民族がドニエストル沿岸迄の彼等の現今の居住地の內部に起り、それにより南北スラヴの分離に貢獻した。

東歐及び中歐に於ける此等推移に對し、西歐の民族形態は非常に固定して居た。イングランドに於ては一〇六六以來現今の國民性がアングロサクソンとローマ化せるノルマンとの混合より形成された。一方スコットランド、ウエールス及び特にアイルランドに於けるケルトの要素は尙永い間山多き或は島の邊境に接觸されずにその地位を維持した。文化の點に於ても亦八世紀の初めのスペインへのアラビア民族(Maure)——彼等は此處からシシリー及び西部地中海の

諸港に向つて擴がつた――の侵入は特に重要であつた。西フランス王國の脅嚇はイスラム教により既に七三二年以來制止され、一方アラビア民族の支配の最後の名殘は一四九二年迄スペインに維持された。

十一世紀の中葉以來東ドイツ植民運動によるザール及びエルベの彼方の古ゲルマン東國の回復、卽ち中世に於けるドイツ民族の最大事件（Lamprecht）が初まつた。此の事件は古ドイツ國民性に結び付いて、西スラヴ族の一部のオーデル河迄も越ゆるゲルマン化、ドイツの民族基底と文化基底のウィクゼル河を越え且東歐のバルト沿岸地方に迄及ぶ擴大、東アルプスの大部分よりのマルブススラヴ民族の驅逐、ズーデーテン森林群山の開拓並びに植民、ズーデーテン地方內部ボーランド、ハンガリー及び深くカルパチア外邊諸山に於けるドイツ民族基底の諸孤立部分の建設を齎らし、かくてスラブ族、マジアール族、イタリー人に對するドイツ人の今日の言語境界を創り、從つて又中歐文化境界の形成に對する基礎をも創つた。ポーランドに對する如く、封鎖的ドイツ言語領域が孤立諸地方に溶解せし場所、或はボヘミアとハンガリーとの內部及び東南部アルプス諸地方に於ける如く、本來ドイツの孤立諸地方が外國の民族性の中に橫はる場所に於いてのみ爾來再び重大な損害を蒙つた。一二四一年の蒙古人浸入は、ハンガリーに對してドイツ植民の唯暫時的一中斷を意味し、一方ロシアの大部分は猶數世紀の間タタール人の支配下に留まつた。最後のアジアの民族波動はオスマントルコ人に依つてバルカン半島及びハンガリーに對して行はれた。それは十七世紀の終り以來始めて再びその源泉地――其處には次に又、荒廢せる地方（バナート等）の再定位がドイツ其他の植民と共に現はれる――へ追返された。そしてオスマントルコ人はその足跡を東南歐羅巴の民族に於ては此等の地方の文化景觀の繼續的感化に於ける程多く遺さなかつた。

アジア民族の歐羅巴流入に對して發見時代以來、新發見の海外諸國、就中アメリカ合衆國であるが、又カナダ、アルゼンチン、ブラジル、南アフリカ、オーストラリア及び其他への歐羅巴の人口要素の緩慢な流出があり、十九世紀に於て特に迅速に進歩せる所謂地球の歐羅巴化が招來された。之と並んでロシアよりシベリアへの及びロシア領アジアの他の諸部分への大陸的移住が起つた。植民地は一部は完全に母國より離脫し、一部は唯母國との自由に結合せる諸國家に生長した。歌羅巴文化の此の過程は世界經濟の重心がアメリカ合衆國へ移つたのみならず、アジアの民族も亦歐羅巴の政治的、經濟的、文化的覇權より解放され始め、加之アフリカに於ても同樣の努力の徵候が現れることにより、現今その頂點に達した。

第二節　現代の人種形態及び民族形態

歐羅巴の大陸に於ける數千年の民族運動及び民族混合の結果として現代歐羅巴人は、大體に於いて或一種の人種單元をなしてゐると解することができる。けだし歐羅巴人は九十五パーセント迄所謂白色人種に屬し、東方の端と北方の端に殘存してゐる一小部分のみが猶多少純粹の蒙古族の特徴を持つてゐるに過ぎないのである。マジアール及びオスマンの如き蒙古族出の他の民族は、近隣のアリアン民族との混合により彼等の原始的タイプを完全に失ひ、全く異なる一タイプに變つてしまつた。或は西フインランドの若干の種族の如き他の民族はゲルマン人、スラヴ及びバルト海人種と混合し、その結果北方タイプに近づき、又は全然同化してしまつた。近代人種學は白色人種を分つて、或る先史人種の典型的特徴を尙有する一連の主要タイプとなしてゐる。しかし、此等基礎タイプの數及び血統に關しては何等一致した考へもない。が兎に角、現今の歐羅巴諸民族は既に非常に早くより混合し恐らく又環境、居住地、生活方法等の影響を被つて彼等の原始的タイプ、特に頭蓋骨の形を變化してしまつたのである。その結果、多くの研究者は以前には人種の決定的特徴と見做されてゐた頭蓋骨の長、幅指數を、今日は一般にも早人種特徴とは見做してゐない。例へばローマ時代のケルト族は僅かにゲルマン人に非常に近接して居るのに、今日ブルターニュに殘つてゐるケルト族は主として短頭ではあり、大抵金髮である。今日主として短頭なるスラヴ人、南ドイツ人、アルプス住民等の大一部分に就いても同樣の事を言ふことができる。それ故にギュンター(H. Günther)は、時代の經過するにつれて次第に增進する短頭化に對し、他の人種の影響のもとに增大する「北方離脫(エントノールデウンノ)」(Entnordung)といふやうな事を言つたのである。他方に於いて、スペイン人は長頭であるが、これは決して北方の相續物ではなく、古代地中海人種の成果である。人種問題に關しては人類學的領域に於ても何等一致を見てゐないが、此等總ての種々な困難な人種問題は此處ではこれ以上詳論する譯にはいかぬ。たゞ我々は人類學的研究の最も正確なる諸結果の一として、次の事を力說するであらう。卽ち、大體歐羅巴の人種形態は既に新石器時代の最盛期點以來確立さしてゐるもので、有史以來の歷史的事件によつては比較的僅かしか變化せしめらなかつたのである。かくして次に最も注目に値する人種諸タイプの地理的分布と云ふ最も重要な若干の事件が生ずるのである。

先づ第一に、南イングランドより、中央ドイツを貫き畧ウイクゼル下流に至るまでの一線の北部の地方には、長頭で金髪の雜種的な人種が廣く一般に住んで居る事は確實である。此の地にはあらゆるスカンジナヴィア人、アングロサクソン人、北ドイツ人及び大ロシア人の一部フイン人並びにバルト人が住んでゐる。而して、此の地方に住んでゐる人種のタイプのうちには明らかに古代北方人種が多かれ少なかれ純粹に保有されて居る。此の地方に續いて東方及び東南に向つては、これよりも明かに特徴は有して居ないが、主として明るい色の住民が住んでゐる。而して、多くの研究は此の住民を總括して東方人種となしてゐる。東スラヴ人の大部分、又西スラヴ人とバルカンスラヴ人との幾部分も此の住民に屬してゐる。恐らく此の地方に於いては多樣の古代人種の殘餘と地方人種と非常に複雜な混合、或はまた蒙古族の要素との非常に複雜な混合がある。卽ち此の地方では西及び北へ行くに從つて北方族の特徴が增大して居り、東へ行くに從ひ蒙古族の特徴が强くなつてゐるのであり、殊にロシア人の大部分は高度に「フイン人化」されて居る有樣なのである。次にフランスより南ドイツ、アルプス、カルパチアを貫きバルカン半島の北部地方までの歐羅巴の一中央帶には多少短頭な人種が住んでゐる。而して、有力な說によればこの人種は北方タイプのアリアン民族が種々の先史的人種と混合した結果、及び北方人種が社會的陶汰を被つた結果發生したものなのである。又一方では長短中間の頭乃至短頭、小身にして、大抵は金髪の西部アルプス地方の住民(所謂アルプス人(ホモアルピヌス))も特に此のうちに包含されて居るが、彼等は他の人相に於ては北歐人に似てゐる。而して此短頭の人間は西に行くに從つて增大し、ヂュラ(Jura)及びサヴォイ(Savoy)に於て頂點に達する。他方では、所謂ヂナルタイプよりも極端に短頭であり、非常に高い身長と暗い皮膚を有してゐるところの、東南アルプス地方及び東北アドリア地方の住民も此のうちに包含されて居る。從つて、短頭人は明らかに山地の邊境地方に住してゐるわけである。そして其處から後世再び放射狀に四方に移つたのである。最後に南歐に於ては、その住民は主として淺黑く且小身であるが、長頭である。此の地中海タイプには、更に多くの副種を認めることができるが、スペイン人(頭蓋指數七四乃至七六、平均身長一六一糎)の間に最も明らかに此のタイプが現はれてゐる。イタリーに於ても小さな身體の重きをなして居る。併し、地中海地方には恐らくハム族出の長身暗闇色人種も亦存在してゐる。從つて、地中海人種は、北方人が移住し來りしにも拘らず、維特されて來たわけである。蓋し、北方人は移住して來た地の新らしい環境へ僅かばかり順應した結果、或は退化した結果とか、他の諸原因の結果として再び離混(entmischen)されたからである。

さて人種と言語とが一致してゐたのは唯最古の時代に於てのみであつた。その時代に於てのみ、「言語は人種の精神の一部であつた」。しかしそれは時の經過するにつれて分化し、幾回も言語の轉化が行はれた。それからして、類似の言語と文化、共通の歴史的運命及び大體類似せる人生觀を有する共同社會としての民族が形成された。此の意味に於いて大インドゲルマン言語系統の民族は歐羅巴住民の畧九十二パーセントに當り、歐羅巴大陸の六分の五を占めてゐる。彼等は、よく知られてゐる如く、言語上非常に近親なる民族の三大グループ、卽ち殆んど間隙なく密集生活してゐるゲルマン民族、主として歐羅巴の西南に群集するローマ民族及びスラヴ民族に分つことができる。而して、其の内前兩者は歐羅巴大陸の約六分の一宛の面積を占有して居り、その密度は大である。スラブ民族は東部及び東南部居住ローロッパ大陸の約六分の三の面積を占有してゐるが、空間の人口密度は僅少である。此のほかに、小インドゲルマン民族が住んでゐる。歐羅巴の最西線に擊退されたアイルランド、スコットランド、ウエールス及びブルターニュの諸地方に於けるケルト人の殘餘、太古以來その原始的居住地に止まれるバルト沿岸民族たるレット人、リヴェン人、リトアニア人及びアルバニア人、希臘人が小インドゲルマン民族に屬してゐる。非インドゲルマン諸民族は、ヨーロッパ總人口の約八%であるから、そのうち、バスク人及び東歐に於ては特別な國民として出現して居るが無國の民族片として散在するユダヤ人、アルメニア人及びチゴイネルは蒙古民族に屬してゐないが、他の大部分は蒙古族血統である。そして彼等は言語上より云へば、マジャール人、バルトフィン人(フィン人及びエスト人)北方及びヴォルガフィン人の屬するフィン人のグループ、タタール、バシュキル、キルギス、オスマン人によりて代表されるトルコタタール人のグループ、最後に狹義の意味の蒙古人に算入されるカルミューケンに組織付けることができる。

さて、以上の歐洲民族の區分を表にして示せば次の如し。

歐洲民族の言語に依る分類　(單位百萬人、一九二〇年調査)

一、ゲルマン民族……一四九・四
　1. 獨逸人……七八・一
　2. フリースランド人
　　オランダ人、ヴラーマン……一一・四
　3. スカンヂナヴィア人……一二・四
　　a スウエーデン人……六・三
　　b デムマーク人……三・四
　　c ノルウエー人……二・七
　4. アングロサクソン人……四七・〇

二、ローマ民族……一一八・三
　1. フランス人及びヴアローネ人……四〇・〇
　2. イタリー人、ラヂネル人等……三九・二
　3. スペイン人……二〇・九
　4. ポルトガル人……六・〇
　5. ルーマニア人……一二・二

三、スラヴ民族……一三六・八
　1. 大ロシア人、白ロシア人……六四・八
　2. ウクライナ人……三〇・〇

3. 波蘭人(及びリルベンカスーベン、マスーレン)……一七・〇
4. チエツコ人及びスロバキヤ人……九・三
5. セルビア人、クロアート人スロヴエーネ人……一〇・五
6. ブルガリア人、マケドニア人……五・三

四、小印度ゲルマン民族……一〇・九
1. ケルト人……一・七
2. レツト人及びリトアニア人……三・三
3. アルバニア人……一・五
4. ギリシヤ人……四・四

五、バスク民族……〇・六

六、フイン民族……一四・九
1. マヂヤール人……九・五
2. フイン人……五・四

七、土耳古民族蒙古民族……七・五
1. タタール人……三・二
2. オスマン人……二・〇
3. キルギス人、カルミューク人……二・三

八、本土を失へる民族……一一・三
1. ユダヤ人……一〇・三
2. ジプシイ人、アルメニア人……一・〇

計……四四九・七

個々の國家に於ける民族所屬の統計的調査が種類及び正確さが非常に異なれる結果、此等の數字も勿論完全に正確なものと云ふことはできない。又細分に於て、個々の民族及びその居住地の差異に關しては猶次の事を附加したいと思ふ。

最廣義のドイツ人の内部では、第二の子音の移動(Sautverschiebung)の境界に從つて、南方の東ドイツ人及び中央ドイツ人を、北方の低ドイツ人から分つことができる。而して言語的立場よりすればフリースランド人の他にオランダ人、ヴラーマンも亦低ドイツ人に屬して居る。

しかし乍ら、フリースランド人は早くより政治的獨立を獲得したの結果及び彼等の方言を文章語、文學語に形成した結果として獨立の民族性を得てゐる。然るにオランダ人、ヴラーマン人はベルギーに於いてはワローネ(白耳義の佛語を話す民族)の住民要素の文章語たるフランス語が從來支配的な言語であつたのに對抗して、正にフランス語と同權を得んと努力して居る。英語を話すアイルランド人、スコットランド人及びウェールス人もアングロサクソンの中へ算入される。併し、アイルランドでは、自治獲得以來アイルランド語が再び非常に行はれるに至つた。ルーマニア人或はダコローマ人は唯言語的意味に於てのみローマ人に屬してゐる。併し人種的には彼等はダーケル人、スラヴ人、及び種々の血統のローマ植民人との混合民族なのである。その上に彼等はチンツァレン或はアロムネンとして殆んど全バルカン半島に散在して居る。グラウビュンド、南チロルに及びカルニア・ジュリアアルプスに於ては昔のローマ化せるレート(rätisch)若しくはケルト民族の殘餘がレートロマーネン、ラヂネル、フリアウレルとして維持されたが、此等はゲルマン化若しくはイタリー人化した。スラヴ族の間では、彼等の言語が混合方言により融合せるが故に、個々の主要系族の嚴密な分類を行ふ事は又屢〻困難である。白ロシア人は南ロシア人卽ち大ロシア人と非常に近い近親關係にある。併し、嘗て小ロ

シア人と呼ばれたウクライナ人とは著しく相違して居る。ウクライナ人は南ロシアの土耳古領韃靼地方を越えて急激に進出し、コーカサスの山麓に迄分布し、西方に於いては、ルーテン人(Ruthenen)又はルスンヤーク人(Rsnjaken)としてカルパシア山脈を越へてゐるのである。チェッコ人、波蘭人の混血民族としてシレジヤのスロンツァーク民族(Slonzaken)がある。南スラヴ民族中、言語相等しきセルビア人とクロアチア人と分つ事が出來る、此の二つは宗教のみならず歴史的傳統及び多くの文化的特徴をも等しくして居る。併し、ダルマチア等に於ては屢〻宗教に從つてのみ分割する事が出來るのである。マケドニア人は屢〻問題となる所であるが、兎も角セルビア人より遙かにブルガリア人に近いのである。自ら Schkipetaren と呼ぶアルバニア人は其の本土に於てイリリア人(Illyriker)の後裔として言語風俗をも純に維持して居る。併し南ギリシヤ及び下イタリーに散在的に居住せるアルバニア人は急速に衰亡しつゝあるのである。今日のギリシヤ人は人類學的には混血族であつて、ギリシヤを通過せる多くの移動民族が混合して生じたのである。オスマン又は土耳古人は今日多くコンスタンチノープル及び南トラキアの一部に居住して居るが、之は歐羅巴土耳古の滅亡後、其の大部分が小亞細亞に移動せる爲にヨーロッパにては一小部分しか住んでゐないのである。

フィン民族中南方のフィン人は瑞典の影響に依り文化的民族となつたのである。然るに、ラップ族はサモエード、ジレーネ、ヴォグーレン人等のツンドラ種族と同じく典型的な衰亡民族として、漁業、馴鹿の遊牧をなしつゝ北スカンヂナヴィア、フィンランド及びロシアに限つて居住してゐるのである。ヴォルガ河中流及びカマ河のヴォルガフィン人(Tscherenrissen, Mordwinen)は既に定住し、基督教化したのである。土耳古族中タタール人はドブルージャ及びクリムに住み、これから又バシュキーレン人と共にカザンとウラルの中間に居住してゐる。其の他は全歐羅巴に散布して居る。キルギス人カルミューク人は遊牧民としてカスピ海岸斜面に限つて住んでゐる。

第三節　人口の移動

歐羅巴の人口は十九世紀初期以來始めて、調査方法に依り稍〻正確に判明するに到つた。種種の調査に從へば一八〇〇年に於ては、正に一億七千五百萬人に增加して居た。一八三〇年には二億二千二百八十一萬人、一八六〇年には二億九千萬人、一八九〇年には三億五千二十萬人な

る數を示し、一九一〇年初めに於ては、歐羅巴土耳古を除く全國家に依り取行はれたる計算内至公の調査に從へば四億五千一百萬なる數に達してゐた。世界大戰、及び其の附屬現象に依り正常發達が障碍された。卽ち約三千五百萬の人口はこのために消失した。併し、それも直ちに殆んと回復し得て一九二〇年の初めに於ける歐洲人口は四億五千萬人を算し、殆んど一九一〇年初めの狀態に再び到達して居る。一九二五年中頃には恰度四億七千萬人を算して居るが、此等の數字はすべて政治境界以内に於けるもの、卽ち東部歐羅巴に於てはキルギス共和國の西境及びコーカサスに到る迄の政治境界以内のものである。

然らば、歐羅巴の人口は世界に於いて如何なる地位を占めてゐるか。今昭和二年度國際統計摘要に從へば、六大洲別人口數は次の如くである。

六大洲別人口

州名	人口	割合
アジア洲	九四一、〇〇〇千人	五三・六五%
ヨーロッパ洲	四五八、〇〇〇	二六・一一
北アメリカ洲	一四四、〇〇〇	八・二一
南アメリカ洲	六五、〇〇〇	三・七〇
アフリカ洲	一三八、〇〇〇	七・八七
大洋洲	八、〇〇〇	〇・四六
世界	一、七五四、〇〇〇	一〇〇・〇〇

右の表に於いて、ヨーロッパ全體の人口は、世界の二六・一一%で、アジアの半以下であるが、アジア以外の何れの大陸よりも人口が多いことが知られるのである。かやうにヨーロッパは人口總數は世界各大陸中第二位であるが、面積に比較するときは、人口は各洲中最大である。次に、各洲の面積と一方粁當り人口をかゝげよう。

六大洲別人口密度

洲名	面積	一方粁當人口
アジア洲	四二、三〇〇千方粁	二二人
ヨーロッパ洲	一一、三〇〇	四一
北アメリカ洲	二一、七〇〇	七
南アメリカ洲	一八、七〇〇	四
アフリカ洲	三〇、八〇〇	五
太洋洲	九、〇〇〇	一
世界	一三三、八〇〇	一四

ヨーロッパ主要國毎十年ノ人口增加（人口千人につき）

國名	一八一〇—一八二〇	一八二〇—一八三〇	一八三〇—一八四〇	一八四〇—一八五〇	一八五〇—一八六〇	一八六〇—一八七〇	一八七〇—一八八〇	一八八〇—一八九〇	一八九〇—一九〇〇	一九〇〇—一九一〇
ロシア	—	七〇	七二	五〇	四〇	一〇五	一三〇	一四〇	—	—
ドイツ	一四八	一二二	一二一	八〇	六四	七八	一二七	一二四	一三四	一〇一
イギリス	一七一	一五〇	一二三	二五	五六	八八	一〇八	一〇九	一二五	二三
フランス	四七	六九	五一	四五	二七	一二	三七	三七	一七	一〇
イタリー	五〇	九五	七二	七四	七四	七三	六〇	六〇	六五	六六
スペイン	四五	—	六五	—	一〇〇	七七	三五	四四	四五	二七
ベルギー	—	—	六〇	八	六八	七五	八四	一二五	一〇四	一〇四
オランダ	—	—	九六	六八	八一	八〇	一二八	一三五	一二九	一〇五
オーストリア	—	—	一五	一〇	七五	八五	五一	五〇	九二	七八
スウエーデン	八〇	一三〇	八六	一〇八	一〇九	八〇	九六	五五	七四	六六
スウイス	—	—	九五	九〇	四六	四〇	六七	六〇	一二六	一二四
デンマーク	—	九〇	八六	九三	一四〇	一一	一〇一	六五	一二五	一二五
ノルウエー	九〇	一五五	一二八	一二	一三〇	一〇〇	八八	七〇	一二四	一四

十七世紀を通じての此のやうに人口が非常に增加したのは、殆んど全國家が急速に經濟的に發達したために因るものであり、更に衞生的施設が改善されたこと、及び長期の平和時代が續いた事に因るものである。その人口增加は頗るテムポの速いものであつて、大なる移住に因る減少あるにも係らず、歐羅巴人口は十九世紀の間に約二倍半露西亞に於ては四倍の增加を見たのである。此の增加は併し乍ら個々の國家に於ては其の速度を異にし、又同一國家に於ても時

一、一八〇八年—一九一三年

國家名	出生	死亡	出生超過	國名	出生	死亡	出生超過
ロシア	四五・六	二八・九	一六・七	オランダ	二九・一	一三・九	一五・二
ルーマニア	四三・一	二四・七	一八・四	デンマーク	二六・〇	一三・五	一二・五
ブルガリア	四一・〇	二二・四	一八・六	ノルウエー	二六・〇	一三・六	一二・四
セルビア	三七・九	一四・〇	二三・九	スウエーデン	二四・四	一四・〇	一〇・四
ハンガリア	三六・〇	二四・六	八・六	スコツトランド	二六・四	一五・三	一一・一
イタリー	三二・四	二〇・四	一二・〇	イングランド	二四・九	一四・一	一〇・八
スペイン	三二・一	三二・八	九・三	スウイス	二四・七	一五・二	九・五
オーストリア	三一・九	二一・五	一〇・四	ベルギー	二三・四	一五・七	七・七
ポルトガル	三三・〇	二〇・〇	一三・〇	アイルランド	二三・〇	一六・八	六・二
フインランド	三一・〇	一七・四	一三・六	フランス	一九・五	一八・六	〇・九
ドイツ	二九・五	一六・五	一三・〇				

二、一九二一年—一九二五年

國名	出生	死亡	出生超過	國名	出生	死亡	出生超過
ソヴイエツト・ロシア1	四二・六	二三・一	一九・五	フインランド	二三・二	一四・二	九・〇
ブルガリア2	三九・九	二一・七	一八・二	ドイツ	二三・二	一三・三	九・九
ウクライナ3	三八・一	一七・二	一〇・九	スコツトランド	二三・一	一四・〇	九・一
ルーマニア	三六・六	二三・四	一四・二	オーストリア5	二二・四	一六・一	九・三
ポルトガル4	三三・五	二二・四	一一・一	ノルウエー	二二・四	一一・四	一一・〇
ポーランド	三〇・〇	二〇・〇	一〇・〇	イングランド及びウエールス	二二・九	二二・二	九・七

スペイン	三〇・〇	二〇・三	九・七	ベルギー	二〇・四	一三・四	七・〇
ハンガリー	二九・四	一九・九	九・五	アイルランド(自由國)	二〇・四	一四・四	六・〇
イタリア	二八・六	一六・七	一一・九	フランス	一九・七	一七・五	二・二
チエツコスロバキア	二七・五	一八・二	九・三	スイス	一九・四	一二・四	七・〇
オランダ	二五・七	一〇・四	一五・三	スウエーデン	一九・一	一二・一	七・〇

一、一九二三—一九二四年　二、一九二二—一九二四年　三、一九二三—一九二四年　四、一九二二—一九二三　五、一九二二—一九二四年

間的に變化があつたのである。この增加は一方に於ては、自然的人口移動の程度、卽ち死亡に對する出產の超過に依存し、又他方に於ては、國家間及び大陸間の移住の程度に依存してゐるものである。出生超過に關して云へば、あらゆる國家を通じてその出現の時期は異にしてゐるといへども、すべて出產減少と云ふ事實を示現して居る。而して此の出產減少は一九〇五年に到る迄は死亡率の間斷なき減少によつて平衡され得る程度であつたが其の後に到つて死亡率の減少を以上に甚しくなつたので、人口增加率は極めて少くなつてゐるのである。前頁に揭げた表はヨーロッパ各國の大戰前と大戰後との人口動態の變化を示したものである。

別表によつて見るに、自然增加の最大なるは依然として東部及び東南部の國民に於いてであり、最小なのはフランスに於いてである。フランスに於ては十九世紀初期旣に出產減少現はれ年々人口減少が生じたのであつた。併し乍ら近年に於いては一般に出產減少が生じてゐることは前表によつて知られるが、その程度は出產率最も大なりし國家に於て最も大であつて、出產率最小なフランスに於ては最も小なのである。勿論各民族の生物學的强度は勿論出生數を標準とすべきであつて、決して出產超過に依るべきではない。かくして高度の文化を持てる西ヨーロッパ諸民族（但し和蘭を除き、獨逸民族の大部分をふくむ）及び文化低きも生物學的に尙壽壯なる東洋及び東南歐洲に於ける民族出生數は 35‰ 以上を示し、その間には對立があらはれてゐる。而して此の二對立地方の中間に、一方には古き文化あるも經濟的に發達せる所少き地中海沿岸のローマ人あり、他方には此の點に關しては旣に西部諸民族に比肩する東部中歐の諸民族があるのである。

人口移動をなす第二の素因は移住である。移住は三種ある。卽ち內部的移住として一國家の境界內に於てなすもの、或は外部的移住として國家より國家へなすものへ、又は海を越えた對岸への卽ち大陸間の移住をなすものがこれである。第一の移住は主として農村人口の大都會又は工業地帶への流入である。故に斯かる移住は最も工業化された國家に於て最も盛んであり、旣に幾度か農耕地及び山間地の人口缺乏なる危險を將來して居る。一方發達せる農業國にあつては國民の定住性は非常に大なるものである。我々は此の地方民の都會移住なる現象を尙他の場

合に就いて檢討しなければならないであらう。

同樣に經濟的な理由を以て或る一地帶の人口過剩から外部的移住が生ずるのである。此の故に前世紀八十年以來經濟的に發達せず、その資源に比して過剩なる人口を有し、然も人爲的施設充分ならざる愛蘭から多くの人口がイングランド、スコットランドの石炭地域、工業地帶へ長期の出稼ぎをなし、波蘭人、南スラヴ人がライン炭坑地に流入したのであつて、彼等の多くは其處に定住したのである。今日多數のイタリー人が南フランスに移住するが、彼等は斯くして直ちにその國籍を離脱するのである。戰前可成多くのルーマニア及びスラヴの收獲人夫(Erntearbeiter)が獨逸へ流入したか――(ザクセン地方への出稼ぎ Sachsengängerei)――之は季節移住の性質を持つたものである。北イタリーの石工及び土工の中歐への進出も此の性質を帶びたもので、彼等は今日母國の勞働者市場の利益のために拘束されて居る。

大陸間の移住は歐洲から多數の人間を絕えず奪ひ去つて居る。併し之に對して少なからざる歸國者があるのである。其の數は統計的には未だ判明しないから移住に依る永久的消失は知るを得ない。アメリカ合衆國の移住は十九世紀中葉以來特に著しく增加し一九一四年に到る迄絕えず其の數を增し、遂に移民制限の嚴法に依り全歐羅巴より十六萬人に制限さるるに到つた。合衆國へ移民を出す國としては先づ西部及び中部歐羅巴諸國が重要なものとして考慮される。特に愛蘭及びもとより人口稀薄なスカンヂナヴィアの諸國が重要である。又一八九〇年以來南歐特にイタリー、東歐、東南歐から多くの移住あり、絕えず其數を增して居る。合衆國以外の移住民吸收國としてはカナダある。ローマ民族にとつてはアルゼンチン、ブラジル、イタリーには佛殖民地、北アフリカ等が絕好の移住地である。黃色人種は勿論歐洲人の移住をも禁止して居る濠洲への移住は極めて少數である。南アフリカへの移住も亦少數である。ロシアは其の過剩人口の大部分をシベリアに、少數をコーカシア及び露領中央アジアに送附した。一八八七年より一九一四年に到る迄に約四百六十萬人が進んでシベリアに移つた。併し新環境に通ずる能はず約一百萬人が歸國した。

十九世紀初期以來大陸間の移住に依る歐羅巴人口の消失總計は約三千八百萬人と計算される。其の內譯は以下の如し。

一八二一年以降の移住人口	一千四百萬人
大ブリテン及アイルランド	五百五十萬人
ドイツ	五百二十萬人
イタリー	

オーストリア＝ハンガリー及び屬國			四百五十萬人
スウエーデン及びノルウエー			二百萬人
フランス			五十萬人

併し此の中フランスはより多數の移住に依り自然的人口增加より大なる增加をなして居る。人口移動數が種々異つてゐる結果として、歐洲を大民族の數的關係も著しく變化した。左に記す數字に見る通りである。歐洲人口の內譯は左の通り。

	一八七〇年	一九一〇年	一九二二年
ローマ民族	三一・二%	二五・五%	二六・三%
ゲルマン民族	三〇・九	三一・六	三三・二
スラヴ民族	二七・四	三二・二	三〇・四
其他の諸民族	一〇・五	一〇・七	一〇・一

一九一〇年に到る迄の獨逸民族の躍進的自然增加はゲルマン民族のパーセンテーヂをして除々に增加しつゝありしローマ民族の上にあらしめた。併し乍ら同時に一八九〇年に始まる全スラヴ民族の急激なる增加はスラヴ民族をして第一位たらしめたのであつた。併し爾來、大戰及び大戰後のロシア民族の莫大なる消失に因り南スラヴ民族は著しく減少した。斯して現在ゲルマン民族は全歐洲人口の約三分の一を占めて第一位にあるのである。

Iselin
Unber die Geschichte der Menschheit

第四節　歐洲列國

一　歷史的概觀

歐洲列國の詳細なる建國史は此處には述べることはできない。單に歐洲政治史の輪郭、然も其處に地理的要素の含まれるもののみを略述するであらう。

歐洲に於ける最初の世界的强國は羅馬帝國である。地中海沿岸のあらゆる國家のみならず、南部中歐よりライン河、ドナウ河に到る迄、ガリシヤより英國諸島、凡そ歐洲全土の四分の一を其の支配下に收めて居たのである。羅馬帝國々境外にはゲルマン、スラヴ其他の歷史尙淺き諸民族が自由な國を建設して居つた。斯かる狀態が全く崩壞された後民族移動の時代が現出されたのである。崩壞せる羅馬帝國の地に築かれたる多くのゲルマン國家の中其中心を北部フランスに持てるフランクが西曆約五百年頃より其頭角を現はして來た。カール大帝統治時代世界的强國の列に入り、面積百二十五萬平方粁を占め、其の中心はメローヴィンゲル王朝時代に比べて少しく東方に移され獨逸國領域內にあつたのである。フランクより分れて生じたる「獨逸羅馬帝

國」はカール大帝に依りて基礎付けられたる獨逸と伊太利との關係、獨逸王位と內容無き羅馬皇位との忌はしき關係を更に延長し、後世時流に從ひてホーエンシュタウフェン王朝時代一時最大の榮譽を負ひしも、後間もなく聯邦主義及び太守分割主義に依り王國破るゝや全く無力となつてしまつた。之と同時に一方周圍の諸國にあつては始めて民族を基礎とする立國の思想が有力となつて居たのである。住昔十世紀乃至十一世紀既にスカンヂナヴィアの北部にあつては地方太守の一致よりなる民族的國家あり、近世に到る迄幾重にも交錯せる關係の下にある。されど是等諸民族の歷史的生活は其の住地の邊境なるが爲に尙數世紀間殆んど歐洲列國の歷史的推移に觸るゝ所はなかつたのである、中世の末期スペインが國境の敵に對し其の民族的一致に依る國家を組織し斯くして巨大なる植民地を獲得して約一世紀間歐洲の强國たりし事は重要な事である。スペインの隣國として、又其の植民政策の競爭者としてポルトガルも亦半島の大西洋岸に制限されたる國家を形成するに到つたのであつた。英國に於ては大陸に於ける領地放棄に依り民族的國家基礎付けられ、斯くて其の主たる關心を大陸の事物より離れて其國土の性質上有利なる海外貿易に向けるに到つたのである。之に依つて英國は其植民國を形成する根本を與へられたのであつて、比類なき國民性の支持を得て數世紀間他の海上强國と爭鬪し、あらゆる大陸大洋に亙つて今日の大英帝國の大をなしたのである。併し乍ら近世初期に到つて、封建的勢力の完全に崩壞せし後、フランスに於いて强力なる國民王權が樹立されたのであつた。斯くしてフランスは其の振張慾の出づるが儘に、無力にして然も宗教的に分裂せる獨逸國を壓し、古來爭ひ來れる國境地帶を奪ひ取つたのである。同時に、他の國境地帶がドイツ帝國より決定的に獨立したのである。卽ち瑞西聯邦及び和蘭の獨立之である。前者は超國家的とは云へ一七九八年迄は獨逸の保護を受けしもので、爾來列强間に介在して難境に其の存立を守らねばならなかつた。後者はスペインの支配を脫せる後ライン河口を扼するの故に急速に第一等の海國に位したものであるが、其國土餘りに小なるの故に長く其位置を保つ事能はなかつたものである。

政治的勢力及び領土に於ける斯かる損失を、獨逸は其の獨逸主義の東方に擴張することに依つても亦恢復する事は出來なかつたのである。一五二六年東アルプス、ズーデーテン、カルパシア等の地方の併合に依り生じたるハップスブルグ家の王國は決して獨逸全體の利益を表はすものではなく、單に此の王家の勢力維持と擴大との爲であつた。然も、オスマントルコが全バルカン半島を征服しハンガリーの大部分を奪取せる後は、長く中歐の一脅威となつたからして益々さうであつた。獨逸東部の國境地帶の大部分は十五世紀以來次第に强大となれる波蘭の手に

落ちた。波蘭はリトアニア、ウクライナをも支配してバルト海黒海間の東部歐羅巴、中部歐羅巴中間の地に同盟國家を形成したのである。北部獨逸の一部はウエストファーリアの講和に依り瑞典の手に歸し、斯くて瑞典は波蘭との爭に於ける優勢と相まつて可成の勢力を貯へたのである。ロシアはタタール人の支配を完全に除去し、又ノヴゴロッドの崩壞、氷洋、カスピ海の獲得、ウクライナとの同盟に依つて大陸に於ける地歩を完全に占めて以來、卽ち十六世紀の半ば以來全歐羅巴史中の政治的一要素となつた。ピーター大帝の時代を以てロシアは又其の西方侵略を始めたのである。バルト海岸獲得後今や再び北方に孤立の狀態に陷れる瑞典と一戰してロシヤは大洋への通路を開くを得たのである。急速に其の勢力を失墜しつゝある波蘭及び衰へつゝある土耳古との戰に依り黒海沿岸の諸國を併合してロシアは今や又東南歐羅巴の關與者となつたのである。東南歐羅巴には土耳古人は再びあらゆる方面から追ひ歸されつゝあるのである。同時に波蘭も亦十八世紀末期四圍の列强に依り全く分解されて滅亡したのである。

ナポレオン時代の革命後民族的一致を確立せんとする努力が一般的に熾烈となつた結果、今や各民族は漸く其の民族的特徵を自覺するに到り、其の自覺を基礎として民族的國家建設に進んでゐると云ふことが第十九世紀の特徵を表明してゐる。歐羅巴土耳古の領土内に於て主としてロシアの保護の下に於て、トルコと爭鬪した結果として、ギリシヤ、セルビア、モンテネグロ、ブルガリア、ルーマニア、最後にアルバニア(一九一三年)等の民族的國家が成立した。斯くして土耳古には大戰勃發前迄には僅かに東南トラキア及びコンスタンチノープルが殘つたに過ぎなかつた。最近のバルカン戰爭(一九一二年——一三年)に依り强大となれるセルビアは今やロシアの支持の下に南スラヴ人協同の努力の中心となり、斯くて世界大戰の創始者ともなつたのである。プロシヤ及びフランスの救援に依り成立せる伊太利王國はイタリア半島に於けるあらゆる外敵及び割據せる群雄を一掃せる後、遂に伊太利民族の住地を悉く平定したのである。一八四八—四九年の汎獨逸聯合運動が失敗した後、一八六六年の普墺戰爭、一八七〇—七一年の普佛戰爭の結果としてフリードリッヒ二世以來第二の獨逸强國となれるプロシヤの指導の下に、新獨逸帝國が成立したのである。併し乍ら、此の新帝國は歐洲に於ける全獨逸人の七十パーセントを抱括するのみで、復讐に燃ゆるフランスと侵略的なロシアの間に介在して歐羅巴の心臟に位置せる結果最初から困難なる立場に陷り、あまつさへ其の急速なる經濟的發展と土地狹隘なる事及び本能的な擴張慾とより生じたる植民政策に依り英國の嫉視を呼んだのである。歐洲唯一の超民族的國家ハップスブルグ王國は獨逸より排され伊太利の領地を失つて後益

々其の關心をバルカンに向け、斯くてロシアに對し危險なる敵となつたのである。一八六七年に基礎付けられたる同國の二元的國家組織は王國の內的構成を弱めたのである。卽ち王國の半分たるオーストリアに於ては國家維持の唯一の要素たる千萬人(全住民の三五パーセント)の獨逸人は益々攻擊的となれるスラヴ主義に依り追拂はれ、一方ハンガリーに於てはマヂャール族が住民の半ばを占むるに到らざるも尙其の中心地を扼せる事、及び住地の要害、政治、敎育周到なる國民政策に依り、何等制限さるゝ事なき生活をなして居たのである。斯くして六大强國が歐洲全面積の七十五パーセント全人口の八十二パーセントを占めるやうになつた。その結果確かに全歐羅巴人類を從來よりも小數の、大にして且つ地理的封鎖せられたる國家及び經濟地帶のうちに綜合しようとする發達傾向があらはれてはゐたやうに見られる。併し此の發展の中には矢張り大戰の萠芽が含まれて居たのである。何故ならば、歐洲の錯雜せる自然的、地理的構相と矛盾せる利害關係の全面的浸透は常に新しき紛爭の材料と葛籐地域とを作つて居たからである。

二　現在の國際狀態

大戰の勃發は歐洲政治地圖を全く一變した。併し、歐洲大戰の結果ヨーロッパの東半部地方に新興國が九國生じた。卽ち、フィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ポーランド、ハンガリー、チェックスロヴァキア、ダンツィッヒ自由市、リヒテンスタインこれである。そのほかに、ものとセルヴィアを中心としてユーゴスラヴィアが生じたために、モンテネグロは消滅してしまつた。それで都合大戰によつて八國增加したわけである。

從來認められ來りたる正義觀は東歐、東部中歐の大部分に於て排擊されるに到つた。卽ち普通バルカン化(Balkantsierung)と呼ばれる過程を生じたのである。帝政時代の統一されて居たるロシアは崩壞して其の民族々々に分解された。併し其の後を受けたソヴィエットロシアは直接之に從へる文化程度低きフィン人、タタール人の住へる三百萬方粁以上の自主的地域を除くも、尙從來のヨーロッパロシアの殆ど五分の三、又モスコーに於て指導される社會主義ソヴィエット共和國に結合してゐるクリム、北コーカサス、ドン地方、白露、ウクライナ諸共和國を含めるときは、從來歐羅巴ロシアの八十四パーセントを占めてゐる。更に全ロシア聯邦は面積二億一千八百萬平方粁人口一億四千五百萬人を有して居り、尙一大强國と目されて居るのである。其の他にバルト海沿岸の諸國フィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニア等も舊帝政ロシアの支配から獨立して、新たに建國したのである。更にポーランドはロシア、プロシヤ、オーストリア

の各一部分を併せ廣大な地域を得て成立して居るが、獨逸、リトアニア、ウクライナの各民族を抱含するを以て民族的にも文化的にも全く統一を缺いてゐる。併し、斯くして波蘭はバルト海岸に參與し、獨逸より分立せる「ダンチツヒ自由市」に對し經濟的覇權を握る事に依り可成勢力ある中流國となつたのである。

世界大戰の第二の重大な結果はハップスブルグ王家の沒落であり、且それが新舊七個の國家に分裂した事である。此の分裂に際しても亦民族基本の原則によらねばならなかつたのである。併し乍ら今やオーストリア及びハンガリーの兩國は殆んど全く民族的に統一されたものとなつて居る。勿論其の境界は民族的經濟的關係を無視した反自然的なものではあるが。全く新らしく生じた國は南カルパシア及び西カルパシア地方を併せて成立せるチエコスロヴァキアであつて、其の民族は異種を含むも經濟地理的には甚だ富裕なるものと思惟されて居る。從來のセルビアより生じたるユーゴースヴィア王國はアドリア海岸に重大なる關係を有する故を以て、今後バルカン半島に於ける最も重要な國家である。此の王國はオーストリアの山岳地方及び海岸地方モンテネグロを併合して、一九一三年ブルガリアより分離せるマケドニアも含める全セルビヤの版圖を抱括してゐるのみならず、クロアチア、及びクロアチアより苦闘の後獨立して中央集權的國體を立てたるアルプススラヴ人の大部分を有し、斯くして遠くアルプス、ドナウの中央歐羅巴に迄其手を伸ばして居るのである。

伊太利は其の要求せる「自然的境界」即ち東アルプス及びカルスト（Karst）の主要分水嶺迄到達し、一部分は之を越えて南チロル及び南スラヴ人の住せる山岳及び海岸地方をも併せ、あまつさへフィウメ、ツアラ、及びダルマチア諸島の若干をも得たのである。斯くして、伊太利は其の民族的國境を越えて中部歐羅巴に進出せるのみならず、アドリア海の唯一の支配者たらんとしてユーゴウスラヴィアの强力なる敵となつたのである。

ルーマニアはジィベンビュルグン（Seibenbürgen）ブコヴィナ、東ハンガリーの大部分及びバナート、ベッサラビアを併せ、其民族全部を國境内に抱含するを得たが、併し此の獲得も、又幾何學的に單純なる國體も、民族的文化的に異種を抱含せる國家組織に依り害はれてゐるのである。即ち舊ルーマニアのドブルヂア及びベッサラビア等の東歐地方ジーベンビュルゲンザクセンの住地等の古代西方文化を有する地方が文化的に全く程度低き支配民族に從屬せしめられたのである。斯くしてバルカン化された中歐の戰勝諸國は單に多數を占むる民族が多の文化的には屢々程度高き民族を支配して居ると云ふ意味に於てのみ民族基本國家と云ひ得るので

ある。從つて、個々の境界を定むるに當つては多く民族的又は經濟的關係に依らず、軍國主義的傾向を規範として居たのである。

其の他のバルカン諸國を見るに、ユーゴースラヴィアとギリシャ間に狹まれたアルバニアは全く伊太利のアドリア政策に委ねられ、ブルガリアはマケドニア、多島海岸に於けるユーゴースラヴィア及びギリシャの利益のために制限されたのである。ギリシャは一九二三年英國に依つて惹起されたる土耳古との不幸な戰ひの後、再び强大となれる土耳古の爲一九一九年獲得せる小アジア海岸及びトラキアの土地を失はしめられたのである。コンスタンチノープル、アドリヤノープルと共にマリツツアに到る東トラキアの地を有することに依り土耳古は尙依然として歐羅巴との鎖を絶たなかつたのである。

大戰の勃發は歐洲の他の部分にも亦同樣に根本的な勢力の移動をもたらしたのである。其の面積の約八分の一と人口の十分の一とを失ひ、あまつさへ植民地のすべてを奪はれた獨逸の領土損失は人口問題と食糧難とを更に增大したのである。更に莫大なる物質的返濟義務を强制され、このために獨逸の財政は殆ど解決し能はざる問題に直面するに至つたのである。かくして、其の對外威力は全く地に墜ちてしまつたのである。之に反し佛蘭西は歐羅巴大陸に於ける絕大の優先國となり、ライン河左岸の一部を獲得した事並びに其のベルギー、ルクセンブルグ、波蘭及びチェッコスロバキヤに對し勢力を得ることに依り、又中部歐羅巴の指導的一要素となつたのである。佛英間の舊怨は一時其の姿を消したかに見えた。否英國は自己の從來の世界的奮勵が强力なるアメリカ合衆國に依り脅やかさるゝを見、歐羅巴の强力なる軍力との同盟を必要としたのである。併し乍ら佛蘭西は地中海に於て、新しき政治的統一運動に進める伊太利との衝突を避け得なかつた。伊太利は地理的にも人種的にもコルシカ島がアペニン地方に屬する事を忘れなかつたし、又北アフリカに於ては其地に於ける人口數及び經濟的利害に相當せる地位を得んと努力し、尙其上ローマ時代を回想して地中海に於ける絕對優勢を要求して居たのである　小國瑞西も亦自國がフランス、イタリー兩勢力に依り脅やかされ居るを見たのである。僅かにスカンヂナヴィアの北部及びイベリア半島の諸國のみが全大陸を侵透する政治的不安の外に立つて居るのである。

大戰終了後歐羅巴が陷つた不安な狀態は主として一九一九年權力獨裁(Machtdikta)の結果である。卽ち戰勝者にとつて危險と思はれる所であつては經濟地理的關係を破壞し民族的結束を妨げ、獨立せる國家並びに經濟地域を增加し、民族自決の原則に反して四千萬人――其の中千

五十萬人は獨逸人――の人々を少數者として他民族の支配下に置いた爲である。歐洲五大强國は今日全面積の五十四パーセント、全人口の五十六パーセントを占むるに過ぎず、而も其の一つにはソヴイエット・ロシアをも含むものである。ソヴィエット・ロシアは其の生成並びに社會主義組織に依り歐洲に於ける他の列國とは全く相容れざるものであり、之に境を接する弱小國にとつてのみならず、西洋文化、經濟に對しても常に一大脅威である。

之と同樣の脅威を歐羅巴は大戰唯一の眞の勝者アメリカ合衆國から受けて居るのである。アメリカは金融上の世界支配國として指導的勢力を歐洲財界に獲得しつゝあるのである。斯かる狀勢に際して生れたのが汎歐洲聯盟の思想である。卽ちロシア及び英國を除き、亞細亞、アフリカの英領ならざる植民地を含める、分裂せる歐羅巴をして、歐羅巴合衆國同盟を組織せしめ、以て統一せる經濟政策文化政策に依り、東西兩面よりの此の脅威より逃れしめんとするものである。併し今日に於ても尙その正當たることの否定し難き思想の實現に對しては重大なる障碍が横つて居る。かゝる障碍は特に多くの國家が其の主權放棄を愛惜して居ることに基いて居るのである。併し乍ら經濟力に依り最も多く脅やかされて、依然として大陸に關心を持てる英國を考慮するの暇なき列國を平等の權利を有せる一員とせる斯かる同盟が成立する以前に、歐羅巴、特に中央歐羅巴の中心地方の實際の國債整理及び新秩序が必要なのである。然も夫は所謂國際聯盟の原則に依つて然かするに非ずして、大民族、就中獨逸民族の國民的經濟的保證を基礎とするものでなければならない。何故ならば、人類の共同生活及び組織の永久單位は國家に非ずして民族であるからである。

次にヨーロッパ諸國の面積と人口とを示さう。

歐洲列國の面積と人口

	面積 方粁	人口 單位1000	調査年度
I. 大國			
一、ドイツ	四七〇、六二八	六三、三三九	一九二五
二、フランス	五五〇、九八六	四〇、七四四	一九二六
三、大ブリテン(アイルランド・ヂブラルタル・マルタの自由國を含む)	三一三、二三五	四八、四三六	一九二五
四、イタリー	三〇九、九四〇	三九、四五〇	一九二五
五、歐羅巴露西亞*(U.S.S.R.)	五、八〇二、九〇〇	一一一、四七九	一九二五
II. 中流國			
一、ベルギー	三〇、四四四	七、八二二	一九二五

二、ブルガリア	一〇三、一四六	五、四八三	一九二六
三、デンマーク(イスランドを含む)	一四七、一七〇	三、五四一	一九二五
四、フインランド	三八八、四八三	三、四九五	一九二四
五、ギリシヤ	二七、三二四	五、八一五	一九二三
六、オランダ	三四、二二八	七、四一六	一九二五
七、ノルウエー(スピツツベルゲンを含む)	三八八、四六三	二、七五五	一九二五
八、オーストリア	八三、八三三	六、六三〇	一九二五
九、ポーランド	三八八、三九〇	二八、八八一	一九二五
一〇、ポルトガル(島嶼を除く)	八八、七四〇	五、六二二	一九二〇
一一、ルーマニア	二九四、二四四	一七、五〇〇	一九二五
一二、スエーデン	四四八、四六〇	六、〇五四	一九二六
一三、スウイス	四二、二九五	三、九三〇	一九二五
一四、スペイン	五〇五、一五二	二一、九六七	一九二四
一五、チエツコスロヴアキヤ	一四〇、三九四	一四、一五〇	一九二五
一六、ユーコスラヴイア	二四八、九八七	一二、六五〇	一九二五
一七、ハンガリー	九二、九一六	八、二七五	一九二四
III. 小國			
一、アルバニア	二七、五三九	八〇四	一九二三
二、エストニア	四七、五四九	一、一一六	一九二七
三、ラトヴイア	六五、七九一	一、八四五	一九二五
四、リトアニア(メーメルを含む)	五五、八九九	二、三七一	一九二六
五、歐羅巴土耳古	二七、〇〇〇	一、八九〇	一九二四
IV. 支那國			
一、アンドラ	四五三	五	一九二四
二、ダンツイツヒ	一、九五二	三八四	一九二四
三、リヒテンシユタイン	一五七	一一	一九二一
四、ルクセムブルグ	二、五〇六	二六七	一九二四
五、モナコ	二一	二三	一九二三
六、サンマリノ	五九	一三	一九二〇
*ヨーロツパロシアは次より成立つ			
ソヴイエツトロシヤ	四、八六六、二〇〇	七〇、三三六	
クリーム	二五、三〇〇	五七九	
北コーカサス	三四〇、五〇〇	八、三九五	
白ロシア	一〇九、八〇〇	四、一〇五	
ウクライナ	四六一、一〇〇	二七、九六四	

第五節　人口分布

一　總論

歐洲文化が今日の高度に迄發達した經過を個々の部分に就いて觀れば全く區々たるものであ

る。黑海及びパノン地方（Pannonische Region）の廣漠たる平原に於ては極めて長期の間遊牧生活が維持された。殊に南ウクライナに於て最も長く維持されたものである。今日に於ても尙カスピ海斜面、勿論多くは歐洲の自然境界外に於てはかゝる生活が營まれて居る。極北の地にあつてはラップ人及び北フィン人の一部が馴鹿の遊牧を行つて居るのである。森林地帶にあつては本來の牧畜に基礎をおいてゐる。遊牧をなすものは殆んどなく、舊石器時代の收得生活及び狩獵に代つて新石器時代の最初の段階の聚落を持つたハック耕の形式に於ける不安定な植物耕作が行はれてゐるのである。地中海沿岸地方に於ては家畜を使用しての耕作が最も早くから行はれてゐる。併し、ゲルマン族も亦、ローマ時代以前既に農耕と定住とを知つて居たのである。

今日歐洲平地に於ける人間の居住し得べからざる地方（änokumene Inseln）は非常に小さく、且其の大部分は廣大なる北部の山地森林沼澤地のうちにあるに過ぎない。故に歐洲諸民族は緊密なあまりにも密接すぎる相互關係に立つて居るのである。斯くて與へられた土地には殆んど餘す所なく人口が充溢してゐる結果、最も早く發達せる中央歐羅巴、西部歐羅巴に於ては土地使用は激烈化し、益々大なる人口層をして都會的職業を營ましめざるを得なかつたのである。斯くて環境の良好と工業原料及び補助材料の富祐とを以て、都會に於ては特に人口大なるもの程大なる發達を遂げたのである。之に反し中央歐羅巴文化境界線の彼方にあつては住民は尙農業に勤め、鄕土に定着し、稀薄に、平等に散在して居るのである。

既に述べた如く歐羅巴の人口は正に四億七千萬（一九二五年）を算し其の平均人口濃度は十九世紀初期の十七に對し四十以上を示して居る。全人類の四分の一以上を占め最も人口稠密なる大陸である。

併し、此の人口濃度は他の大陸を同樣、全く不平均に分布されて居るのであつて、經濟的發達の結果特に中歐及び西歐に於ては、人口稀薄なる土地と稠密なる地方との相違は最近十年間に甚だしく增大して來たのである。東部歐羅巴に於ては現經濟形態の改善と强化に依つて尙今日の二倍の人口を收容し得るかに見える。イベリア半島、バルカン半島の一部及び北部歐羅巴に於ても同樣の事が云へるのである。フランスは種々の點に於て人口缺乏に陷つて居るのである。之に反してベルギー、瑞西の一部、英國、就中獨逸は餘りにも人口增加せる結果、人口過剩となり重大なる社會問題を惹起して居るのである。獨逸の如く過剩人口の一部を植民地に送附すべき可能性なき國にあつては比の問題は益々重大なものであり、又從來最も重要なる移住地たり

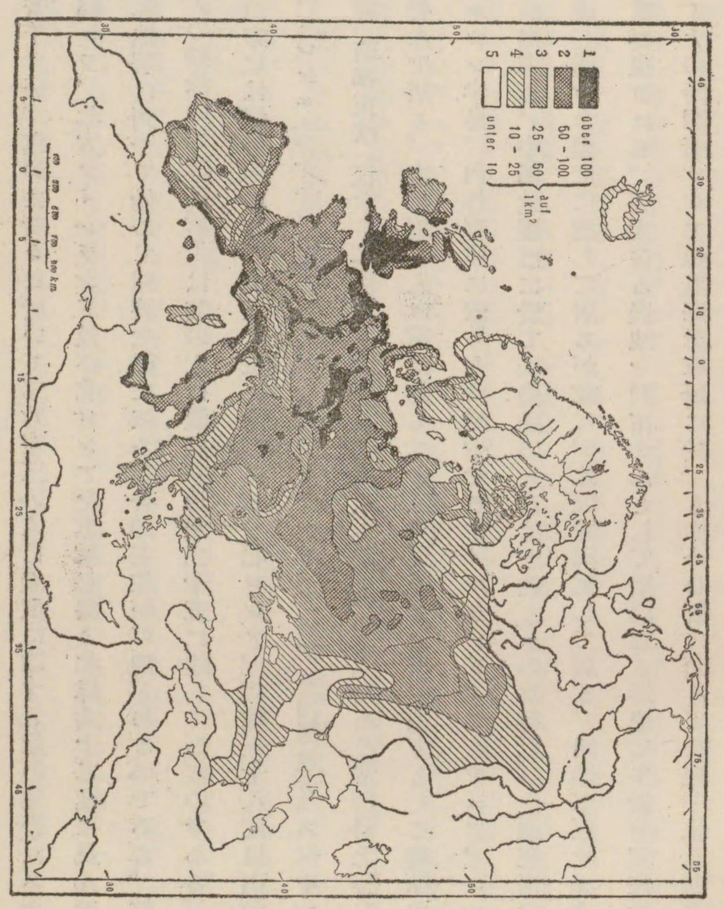
し北米が移住に對し全く閉鎖するに到つて益々其の緊急さを加へるのである。

次に、重要なる歐洲諸國の人口負擔能力（Tragfähigkeit）と現人口との割合に關し、フィッシャー(A. Fischer)の計算をかゝげる。（負擔能力とは或る土地が其の自然狀勢を基礎とし最も完全に現代化學力を應用して養ひ得る最大人口數である。故に此の數に對する現在人口の比例は卽ち尙可能なる收容能力を示す事になる。）

	負擔能力	人口比例		負擔能力	人口比例
	千人	%		千人	%
スウイス	一、七〇〇	三二	ハンガリー	一〇、〇〇〇	八二
ベルギー	三、五〇〇	三一	フランス	五〇、〇〇〇	三一
オランダ	四、〇〇〇	一八三	スペイン	二七、〇〇〇	七九
イギリス	二七、〇〇〇	一七九	ルーマニア	二三、〇〇〇	七五
オーストリヤ	四、〇〇〇	一六五	ユーゴースラヴィア	一七、〇〇〇	七四
ドイツ	四五、〇〇〇	一四〇	ブルガリヤ	八、〇〇〇	六二
ノルウエー	二、〇〇〇	一三八	スウエーデン	一〇、〇〇〇	六〇
イタリー	三五、〇〇〇	一一三	ソヴイエット・ロシア	三三〇、〇〇〇	五〇
チエツコスロバキヤ	一三、〇〇〇	一〇九	全ヨーロッパ	五七〇、〇〇〇	八二
ポーランド	三三、〇〇〇	八七			

二　人口密度の分布

北極ツンドラ地方並びに準北極森林地帶には馴鹿遊牧者以外には單に河川に沿ふてのみ定住



1 100人以上
2 50—100人
3 25—50人
4 10—25人
5 10人以下

第八圖　ヨーロッパの人口密度（一方粁當りの密度）

生活をなす者を見るのみである。氣候稍良好なるノルウェーの西海岸の北部に於ては人口密度は若干多い。僅かに所々に於いて二乃至三の人口濃度に達する此の地帶はスカンヂナヴィアの北部コラ、北方フィンランド及び北ロシアを抱括し略〻北緯六十二度に及んで居る。溫和なる森林地帶に到つて始めて經濟生產に依る集合的定住が可能となるのである。故にスカンヂナヴィアの殘餘の地方に於ては其の人口濃度一乃至二十五に達してゐるのである。但し狹隘なる海岸地方には例外的に其の密度は更に大である。北ロシア、北緯五十八度以南のバルト海沿岸地方、ポレシェ (Polesje) 沼澤地方、北スコットランド、アルプス內部地方、スペインの草原及び山岳地方、南部東歐に於ても密度は同樣一乃至二十五であつて、殆んど常に窮乏勝なる農耕及び牧畜を營んで居る。之に續く人口密度卽ち二十五乃至五十を有す地方として殘餘の北歐東歐全部、バルカン半島、內外移住に依り人口減少せるアイルランド、サルヂニア、コルシカ等を擧げる事が出來る。中部歐羅巴に於ては農民の人口は土地よりの收益及び土地使用の現程度に依つて到達し得べき濃度に達して居るが故に、比較的固定して居る。田畑草原牧場は森林よりも遙かに重要視される。廣大なる農地を開拓せんとして廣漠たる僻地に多數を定住せしめたる南ウクライナの所謂新ロシアの黑海岸草原に於ても亦今日既に殆んど耕地と化し其の間に自然の牧場が散在して居るのである。其の人口密度大陸の中位以下にある歐洲の北部、東部、東南部、西南部の是等の地方を合計すれば、其の面積七百萬平方粁卽ち歐羅巴大陸の半ば以上を占め、人口一億五千五百萬人卽ち大陸全人口の約三分の一を有して居るのである。

是等人口稀薄なる地方の間に歐羅巴の人口稠密なる地方がある。西部歐羅巴及び中部歐羅巴の殆んど全部を含み三つの線をなして走つて居る。一つは東に延びて南波蘭を通り、ウクライナに到り、一つは北西に走つてイギリスを通過し、殘りは南に延びて伊太利を通じて居る。此の約三百萬平方粁の地上には、ワグネル氏の計算に從へば三億人（一九一〇年）、現在に於ては三億一千五百萬人の人々が住して居るのであつて、其の密度は一〇〇を越えて居る。併し乍ら、斯かる人口集中は、たとへ其の農業が合理的經營法に依り最大平均收益を示して居るとしても、決して土地の豐穰、或は氣候溫和なるに由來して居るのではない。寧ろ夫は上述の經濟的發達の賜であるのである。一方には交通の便と石炭、鐵の豐富が、他方には之等に惠まれざる地方の人口過剩とが內部移住を解決し、大工業鑛山業地に人口を集中せしめたに因るのである。更に此の結果として、移住に依つて人口減少せる地方が直接是等の大なる、愈々增加して止まざる人口集中地に境を接するが故に、是等の地方の人口分布は益々不均等となつて來るので

ある。ウエールス及びスコットランドの山地と之に隣接せる炭坑地、アイフェルとライン工業地域、瑞西アルプスと其の前方の中腹地、伊太利アルプスとロンバルヂア平原との間に於いて、かゝる對立は特に著しいものである。然も、是等の對立は益々大となりつゝあるのである。イタリーに屬する地中海諸地方、特にトスカナ、カムパニア及びシシリーの一部に於ても亦斯かる對立が現はれて居る。併し乍ら、是等の地方の稠密なる人口及び都會集中形式は尙商工業農業に基く古き文化の餘勢であつて、其の狀態は極めて滿足な平和なものである。是等人口稠密なる地方と共に――其の密度は尙二百に漸く達するに過ぎないが――荒廢せる人跡稀なる山地があり、其處には乏しき耕作地と山間の牧場があるに過ぎないのである。

人口稠密地方の中にも特に其の濃度大なる二つの地帶(Gürtel)がある。一つは略々子午線に沿ふて中部スコットランドからイングランド、及びライン地方を通り、アルプス山脈に中斷されて、更に伊太利に走つて居るものである。其の中心は、スコットランドのローランド、中部イングランド及び南ウェールスの炭鑛地、ロンドンを含むテームズ盆地、更に北フランス、ベルギー、和蘭、統一ある基礎を有する大經濟地域たる獨逸ライン河下流、ザール炭鑛地を含むライン上流、ネッカー河畔の工業地帶、瑞西、及びロンバルヂア平原にあるのである。第二の稠密地帶はウェストファリア於いて第一のものと分れ、それより西北西から東南東に走り中部獨逸山地の北端をよぎり、ズーデーテン地方を通つて、ガリシヤ、ボリニア、ポドリアに到り此處に其の濃度を一段と深めて居る。之は土地其のものの豐穰なるにも依るが、フランダースから南波蘭に到る古代交易通路にあつて、近世大工業の中心として勃興せる無數の大都會の存在するに依るのである。斯くて更に延びてザクセン、北ボヘミア、上シンジアの最高濃度に到達してゐるのである。

此の兩地帶に依つて三つの中庸的人口稠密地域が分たれてゐる。一はアルデーネン、及びアイフェル以外に土地及び氣候の良好なるにかゝはらず人口少き佛蘭西の大部分を含むものである。他はデンマーク、北波蘭を含む北獨逸低地帶であつて、少數の農民が所々に大工業地域から分離して生存して居るに過ぎない。第三のものは獨逸アルプス臺地を含む西南獨逸高原、比較的人口稠密なるアルプス及びオーストリア、ハンガリーのドナウ河流域地方に依つて形成されて居る。

一九一〇年ワグネル氏(H. Wagner)の調査に依れば、人口最も稠密なる四地方の濃度は左表の如く計算されて居る。

歐洲に於ける人口稠密なる地方

地方名	面積 方粁	人口（單位百萬）	人口濃度（一方粁に於ける）
一、英國に於ける四地方	七八、〇〇〇	三三・〇（人口二萬以上を有する都市を含めて）	一〇・五（人口二萬以上を有する都市を除きて）
二、ライン地方	一三六、〇〇〇	三四・六	二〇・九	二五四
三、中部歐羅巴地方	一五八、〇〇〇	二六・七	一〇・四	一七〇	一三九
四、伊太利地方	一三〇、〇〇〇	二三・三	一七・四	一九〇	一四五
總計	四五二、〇〇〇	一一七・六	六九・二	二四〇	一四一

左表に示すが如く、是等大陸全面積の五パーセントにも充たざる地方に歐羅巴全人口の二十六パーセントが住して居る事となり、且其の四十一パーセントは大都會に居る事となる。

三　聚落の分布

既に左記の表に示されたる如く、工業及び交通の便に依つて人口稠密せる地方に於ける都會人口は非常に大である。而して其數は大ブリテン、ザクセン、ベルギー等の諸地方にあつては益々增大しつゝあるのであつて、其の地方總人口の七十乃至八十パーセントを占めて居る。獨逸に於ても同樣既に六十三パーセント（一九一九年）に達して居るが此の場合勿論都會なる概念は普通よりも擴大されて、人口二千人以上を有するあらゆる聚落として考へられて居るのである。併し乍ら一方農業國に於ては農民の數は遙かに多く占めてゐる。例へば今日歐羅巴露西亞に於ては八十四・五パーセント、瑞典に於ては七十パーセント、フランスに於ても五十三パーセント以上を占めて居るのである、此等の諸國に於ては都會住民の半ば以上は小都市に住して居る。

極めて人口稀薄なる地方に於ては農民は主として大なる距離を置いて散在して居る小聚落に分たれて居る。人口密度のみならず、聚落の密度卽ち單位面積に於ける聚落の數も極めて少いのである。併し、其の他の土地に於ては、特殊な地方的關係、卽ち水利の有無、定められたる土地の高低、更に又住民の性質習慣、大地主と自由農民との對立等の如き歷史的社會的理由等が聚落の生成狀態を、卽ち孤立聚落（Einzelsiedlung）か、小村落（Weiler）か、小農村か、封鎖的な大聚落か、を決定するのである。第三紀の山地及び氷河時代の堆石地に屬するウエストファー

ヨーロッパ主要國都市田舍人口對比

國名	一八〇〇年 田舍	一八〇〇年 都市	一八五〇年 田舍	一八五〇年 都市	一八九〇年 田舍	一八九〇年 都市	一九二〇年 田舍	一九二〇年 都市
ロシア	九六・三%	三・七%	九四・七%	五・三%	八七・七%	一二・三%	八四・三%	一五・七%
ドイツ	—	—	—	—	五三・〇	四七・〇	三七・一	一二・九
イングランド、ウエールス	七八・七	二一・三	六〇・五	三九・五	二七・九	七二・一	二二・〇	七八・〇
スコットランド	八三・〇	一七・〇	六七・八	三二・二	三四・六	六五・四	二四・六	七五・四
アイルランド	九二・二	七・八	八九・九	一〇・一	七三・六	二六・四	六六・五	三三・五
フランス	九〇・五	九・五	八五・六	一四・四	六二・六	三七・四	五三・三	四六・七
オーストリア	九五・六	四・四	九四・二	五・八	六七・五	三二・五	三九・八	六〇・二
スウエーデン	九六・一	三・九	九五・三	四・七	八二・〇	一八・〇	六九・五	三〇・五
デンマーク	八九・一	一〇・九	九〇・四	九・六	六七・六	三三・四	五九・四	四〇・六
ノルウエー	九六・七	三・三	九四・七	五・三	七七・八	二二・二	七〇・四	二九・六

註　都市人口中一八〇〇年、一八五〇年八人口一萬人以上　一八九〇年、一九二〇年八人口二千以上

リア、或はアルプス前地の濃密に散在せる孤立莊宅或は碎石よりなる不毛地に大なる距離をおいて散在せる村落、灌漑の便無きアルプスの磽确不毛の岩山に於ける部落が先づ第一に考へられる。黑海岸又はパノンの草原に於ては恐らく遊牧民の天幕から發達せるものと思はれるのであるが、人々は好んで廣大な僻假の地に集り住んで居るのである。ハンガリーのアルフェルド(Alföld)に於ては聚落は、村落都市(Dorfstadt)の如き觀を呈して居る。故に人口濃度比較的大なるにも拘はらず聚落の密度は極めて小である。其の非常に古い都會的文化と聚落とを持つてゐる地中海沿岸地方の聚落の分布は、全くこれと反對の現象を呈して人口の割合に聚落が多い。主として農を生業とする是等小部落も亦同樣都市的外觀を呈して居る。住民は封鎖的な、密に群がれる、高い石造家屋から成立つてゐる聚落に住んで居る。伊太利、スペインの諸地方に於ても亦まばらに散在せる小聚落が多い。併し乍ら斯かる小聚落の多數が廣大なる自治國體を組織して居るのである。聚落が分布せる土地の高さを決定するものも亦、山地の形態以外に人種的、經濟的理由が重要な要素なのである。此の事は高い山の中腹に存在する獨逸人の小村落及び孤立莊宅と谷底に群集せるローマ族のアルプス住者の石造家屋とを對照して見れば自ら判明することなのである。兎も角、廣く考へれば、人口密度と聚落の密度との間には何等の關係もないのである。

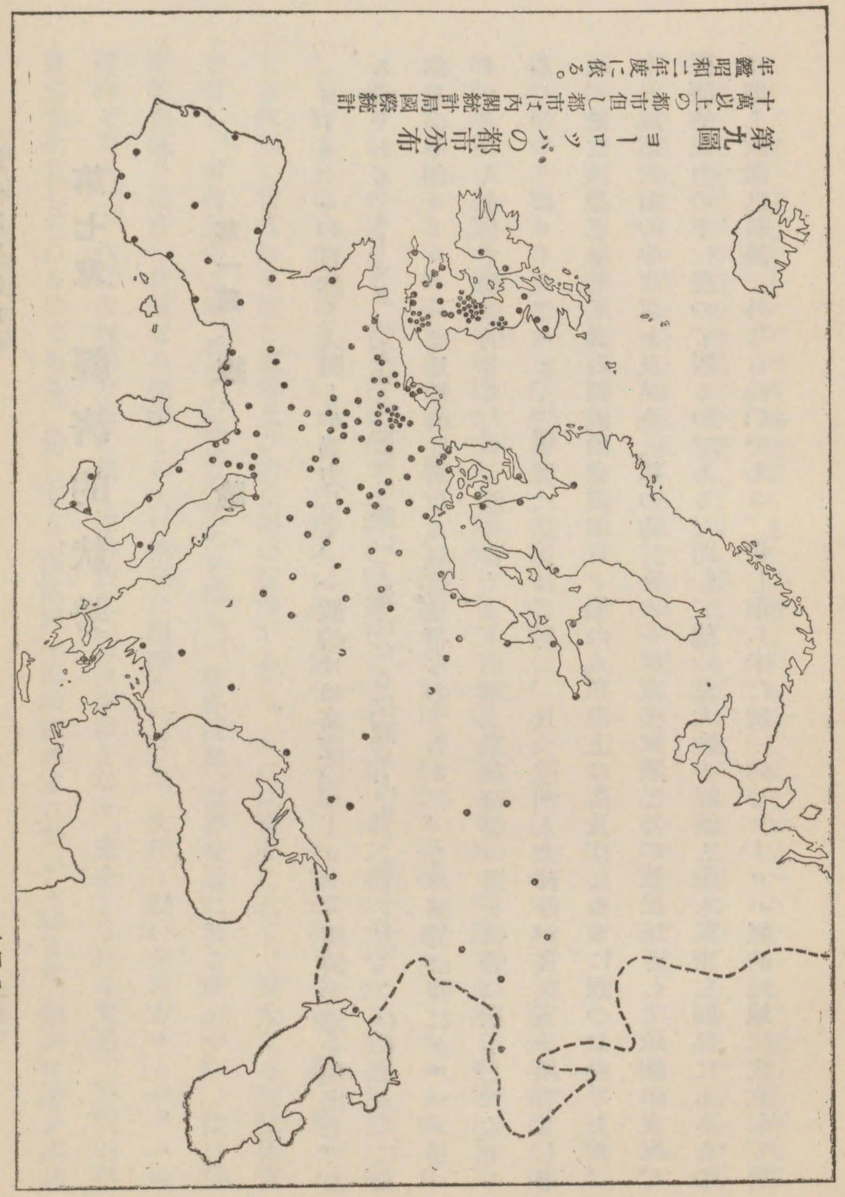
西部及び中部歐羅巴に於ける經濟的發達が生じた他の結果として、大都市の數が急速に增加した事を擧げる事が出來る。一八一〇年には僅かに十八個の大都市があつたのである。然も多

くは大國の首府たるもののみであつた。そして百萬人の人口を有するものはわゞ一個（ロンドン）にすぎなかつた。然るに一九二〇年には既に二百七の大都市を數へ、百萬人を有するもの八、五十萬人を有するもの二十三、合計七千萬人の人のを有し歐羅巴人口の十五・五パーセントを占めたのである。此の中百五十の都市は上述の四つの人口稠密なる地方に屬し此處に大なる群をなして集中して居るのである。人口稠密ならざる地方に於ては大都會は全く散在して存在するのであつて、從つて夫は人口密度の倆に根本的な影響を及ぼすのではない。

ヨーロッパ諸國ノ大都市數

國名	人口百萬以上	人口五十萬以上	人口十萬以上	合計
イギリス	二	三	四六	五一
アイルランド	—	—	—	—
丁抹	—	一	一	二
ノルウエー	—	—	一	一
スウエーデン	—	—	六	六
フインランド	—	—	四	四
ロシア	—	—	一〇	一〇
ポーランド	二	一	五	三
ダンチツヒ	—	—	一	一
オーストリア	—	—	二	二
ハンガリー	—	—	二	二
チエツコスロヴアキア	—	一	三	三

國名	人口百萬以上	人口五十萬以上	人口十萬以上	合計
スウイス	—	—	四	四
ドイツ	二	五	三八	四五
ザール地方	—	—	一	一
オランダ	—	二	二	四
ベルギー	—	二	五	五
フランス	一	二	一三	一五
ポルトガル	—	—	二	二
スペイン	—	二	七	九
イタリー	—	一	一七	一二
ブルガリア	—	四	—	一
ギリシア	—	一	—	一



第九圖　ヨーロッパの都市分布

十萬以上の都市但し都市は內閣統計局國際統計

年鑑昭和二年度に依る。

第七章　經濟的狀勢

第一節　總論

ヨーロッパの自然と人間とが協力して、一般的には高度のヨーロッパ經濟形態を現出してゐるのである。ヨーロッパ大陸は世界に於いて優れたる位置を占めてゐる上に、これに加ふるに北部及び中部ヨーロッパは比較的嚴厲なる氣候地帶なのであるが、この事情は特にゲルマン系ヨーロッパ人をして獨創的ならしめ、既に古くより商業工業航海等の路を彼等に指示したのである。かやうにヨーロッパ人は環境に惠まれて居り、且つ歐洲人大部分が良素質を所有せし事は、遂に歐羅巴をして其の經濟的發達遂行を他の人類の上に迄及ばしめるに到つたのである。今日地球表面の半ば以上及び全人類の約三分の一が直接歐羅巴外の植民地として歐洲の支配、經濟的威力の下に從つて居るのである。而して他の諸大陸の經濟と最も緊密な關係にあるものは卽ち歐羅巴經濟に外ならぬのである。併し乍ら未だ統一的なヨーロパ經濟地域は成立して居らず、又一樣なヨーロッパ經濟地域もまた問題にすることはできないのである。歐洲經濟地域の統一は歐洲が多數の國家に分裂して居る事にても既に妨げられて居るのであつて、是等の國家は各自夫自身にて一個の自足完了的經濟地域を現はして居るのである。種々の性情異なれる國家を結合して超國家的經濟王國を現出する事は全く望しいことであるが、之とは全く反對に現狀勢力は寧ろ自由交易及び生產統一の相互的阻止に走つて居るのである。歐洲各地の自然的環境及び民族の素質の相違が大なる障碍となつて各國に與へられたら能力を全く平等に利用することができないのであつて、かやうな障碍がなけば、斯かる平等も亦望ましきものと云ひ得られるのである。我々は此處では特に歐羅巴に於ける第一の二個の相背せる經濟形態に關して論述しなければならない。一つは尙未だ强く鄕土（Schalle）に結び付けられ、屢〻餘りにも古代風に行はれて居る東部及び南東部の經濟である。それは重要にして、莫大なる天然物資を有し、未發達の工業、低度の都市的文化を持ち、世界貿易、世界交通に與る所が少い。他は科學的根據と高度に發達せる技術との上に精巧に組織されたる、大洋に開いた西方ヨーロッパの經濟である。それは合理的方法に依る原料加工、益々復雜となり、完全となれる交通、壓倒的都會文化を有してゐるのである。併し乍ら、西部地中海沿岸地方に於いてはまた、經濟は屢〻非進

歩的な、原始的特徴を示してゐる。イベリヤ半島の兩國並びに南部イタリーも亦高度の經濟的發達には與る所少いのであつて、大規模に行はれる農業が重きをなし工業は微々たるものがある。

此の事實のみを以てしても既に全歐羅巴經濟體が相對立してゐる理由が種々な性質を有つてゐるものである事が肯定されるのである。是等の理由は先づ差當つて一般交通狀態と水平的肢節(horizoutale)の差異に依存してゐるのである。大陸的な半亞細亞的な東部歐羅巴は活潑な大海に依り肥え太らされる事がなかつたのであつて、其の海を遠く離れた閉鎖された位置故に、西部から流出する文化の流れは最も遲く此處に到達したのである。あまつさへ此の流れを受入れる事は正教固守と不充分な國民教育とに依り頗る困難なものとされたのである。のみならず文化を阻害し破壞する暴虐卽ち亞細亞の草原より東部及び東南部歐羅巴の地勢上引續いた地方を襲つた數度の蒙古人の來寇あり、一方東方よりは何等新しき刺戟を受けなかつたのである。特にバルカン半島の諸民族にとつては土耳古支配の數世紀は明らかにあらゆる經濟的發達の可能性の强力な制止を意味して居たのである。歐洲文化史の舞臺及び世界貿易、世界交通の主要路が新大陸發見以來地中海沿岸地方より大陸の大西洋岸に移動せる事も亦、重要な役割を演じたのである。斯くして地中海沿岸諸國の住民に於ける經濟的未發達の狀態は大部分之を歴史的に、卽ち嘗ては程度高かりし文化と文明の萎縮から釋明する事が出來る。種々相異なれる無數の文化遺跡が之に對する生きた證據を與へて居るのである。特にイベリヤ半島の諸民族は、大西洋岸の位置を占むるにも拘はらず、其の政治的勢力を失ひ、植民力衰ふると同時に又嘗て占めた世界貿易に於ける指導的地位並びに經濟的活動力をも失つて、西部歐羅巴の經濟的勃興から取殘されてしまつたのである。

前述の相違を說明するに就いては又人種的要素をも考慮に入れねばならないのである。東スラヴ及びバルカンスラヴをしてあらゆる改新及び西方文化の影響に對し拒否的な態度を取らしめ、移動的努力的で滿足する所少き大西洋岸の歐羅巴人に比して遲れしめたものは、疑もなく其靜觀的、保守的な——たとへ深化されたとは云へ——人生觀、世界觀なのである。今日ローマ民族も亦同樣歐洲文明と極めて發達せる經濟形態とには僅かに一部分のみしかならないかの樣である。西北及び中部歐羅巴の經濟地域が其の全經濟的生命を極度に激化して、大部分ゲルマン又はゲルマン化された民族の位地と合致して居る事は明らかな事實である。

斯かる經濟的相違が如何なる風に人口移動及び分布の相違の因をなしたかは既に論じた所である。此の現象を批判するに就いての有力な根據は職業統計の結果である。尤も個々の國家の

調査方法が區々なる爲、其の比較は困難ではあることは認めなければならない。が、全歐洲に於いて、其の生計を農業林業に求むる人々の數は、過去數世紀間に工業商業乃至交通等の重要職業階級の爲に減少し、同時に總人口に對する職業に從事せる人々の歩合は增大したのである。ワグネル氏 (H.Wagner) の計算に從へば十九世紀初期に於ては歐洲人口の三分の二が尙農業林業に從事して居たのであるが、一九一〇年には此の歩合は恰度五十二パーセントに低下したのである。二十四パーセントが工業に依り、十パーセント以上が商業交通に依つて生活し、殘餘は自由な公職又は家事に從事し他は無職者であつたのである。

併し乍ら此の點に關しても亦歐洲各國間には大なる相違がある。此の相違は十九世紀後半に到り益々大となつたのである。東部、東南部、南西部の人口稀薄なる諸國は純農業國であつて、農業に從事する者は六十五乃至八十パーセントを越え、遙かに他の職業階級を凌駕して居るのである。農耕と牧畜とは國民經濟の基礎をなし、住民は尙全く土着的で、內部移住は極めて僅かであり、獨立自營が保證され資本は生產品の少額の取引に構成さるゝに止つて居る。而して外國の金融的、技術的補助を以て多くの地方に工業が其の發展の曙光を見出したとは云へ、上述の狀態は前世紀間には殆んど變化しなかつたのである。

東歐中歐の境界地域乃至東部中歐に存在する諸國家（波蘭チェッコスロバキヤ、オーストリア、ハンガリー）及びイタリー、スカンヂナヴィアの諸國並びにフランス等は農、工業國である。人口及び國民經濟の重心は尙農業にあるも、都市的經濟形態に生計を得る者の數は既に三十パーセント以上に達し、引續き多數の人口層を農業より商工業に變ぜしめる結果、絕えず增加しつゝあるのである。

歐洲西部の純工業國に於ては此の過程は極度にまで達したのである。イギリス、ベルギーに於て最も早く、次いで瑞西及び和蘭、五十年前以來獨逸に現はれたのである。獨逸に於ては西部は尙農を主とせる東部に比し極度に工業化され、東部地方を失つた事は農民のパーセンテーヂを益々低下したのである。フランスに於ては、土地の豐穰なる事、石炭產額の少なる事、出產超過の僅少なる事、地中海岸の南部の影響等、の種々の理由に依り、尙未だ農民が重きをなして居る。併し乍ら都市的職業も亦質的には他の西部歐羅巴と同樣に成熟し發達して居るのである。

益々增大する工業化の諸原因及び其の人種的、地理的、國民經濟的、社會的の供伴現象卽ち平原に於ける人口減少、大都市及び工業地域への人口集中、食糧生產の不足、純消費財の消費增大、其の結果としての外國への依存、輸入超過、等、等の原因は個々の工業國に就いて之を

觀れば一般的には同一條件にありながら、若干異つて居る。

イギリスに於ては此の過程は先づ工業用原料及び補助材料に比し石炭鐵が甚だしく豐富なりし事に依り、次いで技術方面に於ける幾多の輝やかしき發明、極めて惠まれたる地理的位置、優秀なる港灣の富裕、等、に依り、就中其の工業に第二の問題たる販路を保證せる植民地の急激なる增加に依り極めて惠まれたるものであつたのである。外的紛擾に妨げらるゝ所なく、全力を經濟的發達に捧げ得たのも、非常に有効に作用し、十九世紀中葉既に英國は經濟的方面に於ては大陸諸國に先立つて、力强く前進して居たのである。

瑞西は原料の僅少なると內國たるにも係はらず、耕地面積の狹隘と當時の高き人口增加率とに依り、たちまちに工業商業國に押進んだのである。和蘭に就いても同樣な事を云ふことができる。然も和蘭に於ては其の海外貿易に適せる位置と可成の植民地を有せる事とが工業化を促進したのである。

獨逸に於ても亦一八七〇年以來の急激なる人口が工業的發達への動機を與へたのであつて、此の發達は更に國民福祉の一般的向上、內地に於ける商工業生產高の需要、鑛山の發掘交通網の完成及び住民の勤勉、組織能力、節儉、幾多の優れたる技術的功績に依つて、大いに促進されたものである。斯くて獨逸工業は自ら外國に於ける販路を獲得し、イギリスと其の植民地に於て競爭して成果を收める事が出來たのである。

大戰の甚大な打擊の後此の經濟競爭は今日新たに行はれて居るのである。現在財政的困難と不安定な貨幣本位制の狀態から生じた自給自足を得んとする努力は、若干の小國をして寧ろ農業國の形式を取らしむるに到つた。卽ち保護關稅引上並びに他の商業政策的閉鎖方法に依り國內的工業を創造し、又は旣成工業を出來るだけ完成せんとするが爲である。併し乍ら之は不自然なことであつて、自由貿易の復活に依つて恐らくは再び消滅するであらう。

次にヨーロッパ各國の人口の職業構成一覽表をかゝげる。尤も、多くの國家に於て何等新しき職業調査行はれざるが故に、この表は比較研究し得べき價値を有せざるものであらう。種々の職業分類も亦同樣悉く同一な區分に依るものではない。

三主要職業階級に依る生業從事人口構成比率（%）

國名及び調査年度	農業林業	商業工業鑛業	貿易交通	形態
ブルガリア　一九一〇	八一・〇	七・九	四・二	
バルト海沿岸諸國　一九二〇	八一・〇	八・〇	三・〇	

舊ルーマニア	七五・五	一〇	五	純農業國
歐羅巴ロシア	七五・〇	一三	五	
全ロシヤ(U.S.S.K.)一九二六	八〇・八	九・〇	三・六	
フインランド　一九一〇	七一・九	一三・〇	六・三	
ユーゴースラヴイア	七一・	八・	六	
波　蘭	六五・	一四・	六	
舊ハンガリア　一九一〇	六四・一	一六・三	七・〇	主として農業に依れる國
ポルトガル　一九一〇	六〇・〇	二三・一	七・九	
スペイン　一九一〇	五六・二	一一・一	三・一	
イタリー　一九一一	五五・五	一七・六	八・一	
瑞　典　一九一〇	四六・二	二三・八	九・三	
アイルランド　一九一一	四三・〇	二一・九	一〇・八	主として工業に依る國
フランス　一九一一	四〇・七	三五・八	九・九	
オーストリア　一九一〇	三八・	三六	一八	
ノルウエー　一九一〇	三五・六	二八・〇	一九・〇	
チエツコスロヴアキア　一九二一	三五・三	二六・八	一〇・一	
ギリシヤ　一九一〇	三二・三	二〇・〇	一五	
獨　逸　一九一〇	三一・六	三八・一	一一・七	
デンマーク　一九一一	三一・二	二四・一	一四・九	
瑞　西　一九一一	二六・二	三三・二	一六・六	
和　蘭　一九一〇	二三・六	二四・七	一八・二	
ベルギー　一九一〇	一六・六	四八・五	一六・八	純工業國
イギリス　一九二一	七・八	五一・五	三・一	

第二節　農　業

重要なる栽培植物及び家畜の分布に關しては、我々は既に其の地帶配列及び氣候地勢等へのその依存關係に於て學び知つたのである。然し乍ら全歐羅巴に行はるゝ種々の農業經營形式の意義及び區分、並びに其の各部分に就き簡單に述べ、二三の統計報告に依り之を補足する事は未だ爲されて居ないから、以下これを述べるであらう。

一　栽培農業

耕作地面積の全面積及び生産的土地面積に對する比は一般に歐羅巴南部西部より中部に到るに從ひ增加して居る。例へばイベリア半島に於ては僅かに生産地の三分の一餘、大ブリテン、アイルランドに於ては三十二パーセントなるに比し、イタリー、フランスに於ては四十五パーセント、獨逸にあつては五十パーセントを越えて居る。北部及び東部に到れば耕作地面積は再び急激に減少し、北方スカンヂナヴイア、ロシアに到れば漸く三パーセントに達するに過ぎない。農耕地（果樹園、葡萄山、植林地を含む）草原（自然的牧場、沼澤地、荒原）に對する比率を仔細に

ヨーロッパ主要國ノ生産地と不生産地（Waytiusky）

國名	Z調査年或はL現在統計	總面積	生産地面積	生産地面積割合	不生産地面積	不生産地面積割合
		千ヘクタール	千ヘクタール	%	千ヘクタール	%
ヨーロッパロシア	L・一九一一	五一七、二六一	二八二、八四二	五四・七	二三四、四四〇	四五・三
ドイツ	Z・一九一三	四七、四一六	四四、六八七	九四・二	二、七二九	五・八
イギリス	L・一九一〇	三三、七四六	二九、二六七	八四・七	三、四七九	一五・三
アイルランド	L・一九一八	八、二四四	七、〇九九	八六・一	一、一四五	一三・九
フランス	L・一九一九	五二、九五三	四九、八七五	九四・二	三、〇七八	五・八
イタリア	L・一九一九	二八、六六一	二六、三九八	九二・一	二、二六三	七・九
ポーランド	L・一九二一	三五、〇八九	三二、二三五	九一・八	二、八六五	八・二
スペイン	L・一九〇八—一一	五〇、四五二	四五、五九五	九〇・四	四、八五七	九・六
ルーマニア	L・一九二一	二九、四七〇	二四、八八〇	八四・四	四、五八九	一五・六
チエツコスロヴアキア	L・一九二〇	一四、〇四八	一三、四一七	九五・五	六三一	四・五
ユーゴースラヴイア	L・一八九七	四、八三〇	二、五二八	五二・三	二、三〇二	四七・七
ハンガリー	L・一九一〇	三三、四八六	三一、二五三	九六・二	一、二三三	三・八
ベルギー	L・一九一〇	二、九四五	二、五八五	八七・八	三六〇	二二・二
オランダ	L・一九二〇	三、二六五	二、九三二	八九・八	三三三	一〇・二
ポルトガル	L・一九〇二	八、九一一	六、九九四	七八・五	一、九一七	二一・五
オーストリア	L・一九一八	七、九六一	七、一五四	八九・九	八〇二	一〇・一
スウエーデン	Z・一九一八	四一、〇四九	二八、七四三	七〇・〇	一二、三〇六	三〇・〇
ギリシヤ	Z・一九一一	六、三三一	二、八三七	四四・九	三、四八五	五五・一
ブルガリア	Z・一九〇	九、六三五	七、六七三	七九・六	一、九六二	二〇・四
スウイス	L・一九一九	四、一三〇	三、一〇三	七七・六	九二七	二二・四
フインランド	Z・一九一九	三三、三一四	—	—	—	—
デンマーク	Z・一九一九	四、三〇二	四、〇五五	九四・三	二四七	五・七
ノルウエー	Z・一九一七	三二、三六六	九、五〇一	二九・四	二三、八六五	七〇・六
レトヴイア	L・一九二一	六、五七〇	六、四三八	九八・〇	一三二	二・〇
ルクセンブルグ	L・一九二〇	二五九	二四七	九五・六	一二	四・四

觀察すれば、此の自然の影響及び種々の文化高度に依る差異は益々明らかに現はれて來るのである。

耕作別面積比較

國名	年度	生産地面積に對する農耕地の歩合	生産地面積に對する草原の歩合	農耕地の歩合	草原の歩合
デンマーク	一九一九	七一・一 %	一九・八 %	六六	三三
ベルギー	一九一〇	五五・七	二四・三	七〇	三〇
波蘭	一九二一	五五・五	一八・三	七五	二五
イタリー	一九一九	五四・二	二六・一	七五	二五

ルーマニア	一九二二	五二・七	一九・八	七二	二八				
獨　逸	一九一三	五一・四	二〇・七	七一	二九				
舊セルビア	一八九七	四九・六	三一・四	六一	二九				
フランス	一九一九	四八・九	三一・三	六一	二九				
舊ハンガリー	一九一〇	四八・一	二三・一	六七	二三				
舊ブルガリア	一九一〇	四六・五	一六・六	七四	二六				
チエツコスロバキヤ	一九二〇	四五・八	一九・五	七〇	二〇				
ポルトガル	一九〇三	四四・五	二七・五	六三	二七				
スペイン	一九一一	四三・六	四五・六	四九	二一				
ギリシヤ	一九一一	四三・〇	五五・四	四四	二六				
ロシア(六十三洲)	一九一一	三五・二	九・七	八〇	二〇				
和　蘭	一九二〇	三四・六	四一・五	四六	四四				
瑞　西	一九一九	三三・一	三六・六	四八	二一				
大ブリテン	一九二〇	三二・三	六二・〇	三四	六六				
オーストリア	一九二〇	二五・一	三二・二	四四	二六				
アイルランド	一九一八	二四・〇	七四・三	二四	七六				
瑞　典	一九一八	一三・五	三・九	七八	三三				
ノルウエー	一九一七	七・四	一七・八	二九	七一				

別表より見れば、ロシア、ルーマニア、ブルガリア等の穀類耕作の普及せる諸國に於ては特に耕作地に重きをなし、之に對して、濕潤なる西方諸國、特に前世紀中葉以來高度に發達せる牧畜の爲、穀物耕作を收益なきものとして放棄せる大ブリテン、同じく「綠の」アイルランド、ノルウエー、オーストリア、瑞西等の山國等に於ては草原が重きをなして居るのである。瑞西に於ては統計上牧場をも農耕地に數へて居るが、之も亦實際には著しく減少して居るのである。スペイン、ギリシヤ等の地中海沿岸諸國に就いても同樣の事が云ひ得られるのである。是等の國に於ては牧羊にのみ使用する綠草少き牧場が草原の大部分を占めて居るのである。

歐洲諸國の農耕地を、栽培植物の種類に依つて分類するときは、別表の如くになる。これに依つて見れば一般穀物が最大の面積を占めてゐることが知られる。殊にロシア、ユーゴースラヴィアの穀物栽培面積は農耕地全體の九〇%以上に達してゐる。他の穀物の栽培面積だけの農耕地の五〇%以上に達してゐる國も中々に多い。穀物栽培面積の割合の最低なるはスイウスであつて、一〇%にみたない狀態にある。

ヨーロッパ各國栽培植物別農耕地　(實數單位千ヘクタール)

國	名穀物	飼料植物	食料植物	工業用植物	種子	休閑地	其他
ヨーロッパロシア	八九、八八一	五、九一四	三、六八一	—	—	—	—

ドイツ	一〇、四四七	三、三一一	三、五一一	五四六	一	一、三一六	五六七
イギリス	二、九一五	一、八四八	一、〇六〇	一八	一	一三三	七〇
アイルランド	七六一	三九一	四六五	五八	一	一	一
フランス	九、五三三	四、四八六	一、九一一	一六三	一	一	五、九一一
イタリー	六、五九一	二、八六四	一、一六三	一五一	一	一、三一八	一〇
ポーランド	七、七一六	一、一一〇	三、〇七六	一一四	一四一	一	四、四七三
スペイン	七、一一七一	一一〇九	一、一四一	三〇一	一	七、七七七	一
ルーマニア	九、一四四	三九五	三五六	一六九	一	二、六八四	一五
チエッコスロヴァキア	三、一一九	一、一三三	八三一	一六六	三	三六四	一七
ユーゴースラヴィア	九五一	五	一六	一〇	一	三三	一
ハンガリー	一〇、三五四	一、五三一	七三九	一六三	一	一、一六〇	一六九
ベルギー	六三七	一一九	一一五	九六	一	九	六
オランダ	四五一	九五	一六七	一〇七	五	五	六
ポルトガル	一	一	一	一	一	一	一
オーストリア	八三九	一一九	一四一	一四	一	三四一	一
スウェーデン	一、七一〇	一、五七一	一〇一	三〇	一	一六一	六〇
ギリシヤ	五七四	三〇	六〇	三四	一	一四五	一
ブルガリア	二、一一六	八七	一〇四	六一	一	九六	一
スウイツル	一〇三	八七三	六三	一一	一	一	一
フィンランド	七六〇	七四四	一三〇	七	一	一三一	一
デンマーク	一、一三三	一、一一七	一四五	四三	三六	一四六	五

ノルウエー	一七六	四五一	四六	一	一	六	七
レトヴィア	六一一	二六六	八六	一四	一	二五六	四九
ルクセンブルグ	五七	一七	一六	一	〇・四	一〇	一

ヨーロッパ諸國栽培植物特別農耕（百分率）

國名	穀物	飼料植物	食料植物	工業用植物	種子	休閑地	其他
ヨーロッパロシア	九〇・四	一	五・九	三・七	一	一	一
ドイツ	五三・六	二六・六	一七・五	二・八	一	六六	二・九
イギリス	四七・八	二九・七	一七・四	〇・三	一	三・七	一・一
アイルランド	四六・二	二三・一	二五・三	三・四	一	一	一
フランス	四三・三	二〇・四	八・七	〇・七	一	一	二六・九
イタリー	五一・二	二二・三	九・〇	一・三	一	二六・二	一
ポーランド	四五・三	七・五	一八・一	一・四	一・四	一	二六・三
スペイン	四三・五	一・三	六・八	一・八	一	四六・六	一
ルーマニア	七一・九	二・八	二・八	一・三	一	二一・一	〇・一
チエッコスロヴァキア	五三・八	二〇・九	一三・九	四・八	〇・一	六・一	〇・四
ユーゴースラヴィア	九二・七	〇・五	二・六	一・〇	一	三・二	一
ハンガリー	七二・七	一〇・七	五・二	二・〇	一	八・二	一・三
ベルギー	五二・七	一九・〇	一七・七	九・八	一	〇・七	〇・一
オランダ	四八・二	一〇・二	二六・五	一一・四	〇・六	〇・五	〇・六

ポルトガル	五四・〇	一四・一	—	〇・九	—	—	—	—	—
オーストリア	四四・四	四〇・五	九・一	五・二	〇・八	—	二一・九	七・五	一・六
スウエーデン	六〇・八	三・二	六・四	三・六	三・六	—	二六・〇	—	—
ギリシヤ	六四・四	二・六	三・二	一・八	一・八	—	二八・〇	〇・〇一	—
ブルガリア	九・九	八三・九	六・一	〇・一	〇・一	—	—	—	—
スウイス	四〇・五	三九・七	七・〇	〇・四	—	—	二一・四	—	—
フインランド	四三・五	三九・七	八・七	一・五	—	一・三	五・二	〇・一	—
デンマーク	二五・八	六五・一	七・〇	—	—	—	〇・八	一・三	—
ノルウエー	三七・三	一四・三	四・七	一・八	—	—	一五・〇	二六・九	—
ラトヴイア	五一・二	二四・八	一四・二	〇・一	〇・四一	—	九・三	—	—
ルクセンブルグ									

穀物中最も重要な麥類の産額を見るに、別表に依つて、ヨーロッパの麥類産額は、他の何れの大陸よりもはるかに多いことが知られるのである。麥の中、小麥は需要パン製造穀物として氣候地勢に係はらず最も廣く耕作され、裸麥は特に西歐中歐に限らるゝに到つた。然も歐洲に於ては今日尙小麥の産額は僅かに需要の半ばを充たすに過ぎず、小麥耕作地面積は一九一四年に比し、ロシヤ革命の結果著しく減少して居るのである。生産過剩地及び小麥輸出國としては僅かにパノン黑海沿岸地方の諸國、ハンガリア、ブルガリア、ルーマニア及びウクライナが考へられるのみである。併し、ウクライナは革命後ロシアに於ける穀類耕作の衰微の爲に、今日餘り輸出してゐない。他の諸國に於ても過剩出額は著しく減少して居るのである。故に他の歐洲諸國は今日に於ては海外の穀倉よりの輸入により多く依存して居るのであつて、取引は海外穀類相場に依存して居るのである。上述の歐洲諸國に於ては一ヘクタールの收獲最も少額であるが、之は幼稚なる經營方法のみならず又同地の大陸的氣候に於て栽培し得られる小麥の品種にも歸し得るのである。デンマルク、ベルギー、オランダ、イギリス等の西方諸國に於ては其の收獲は最高平均額に到達して居る。之は是等の諸國に於ける經營方法が最高度に發達し居る故のみ

各大陸麥類産額（一九二六年　單位百萬キンタル）

	大陸	小麥	ライ麥	大麥	燕麥	麥
ヨーロッパ	五五〇、一二四	九九、四九八	四一七、四三八	二〇七、一一	四〇八、七六七	二、二九九
アジア	二八、五一	—	—	五四、二二二	一六、九三四	三、〇九一
アフリカ	三四二、四九八	一三、二四九	五四、二二二	一六、九三四	三、〇九一	
北アメリカ	七一、七三三	—	七、七二八	二四一、一二一	二四一、一二一	
南アメリカ	四六、〇五九	—	一、五〇〇	一〇、四九四	一〇、四九四	
大洋州	一、一三八、五三六	四三一、九八六	三五一、九八五	三、〇二五	三、〇二五	
世界				六六九、七八七	六六九、七八七	

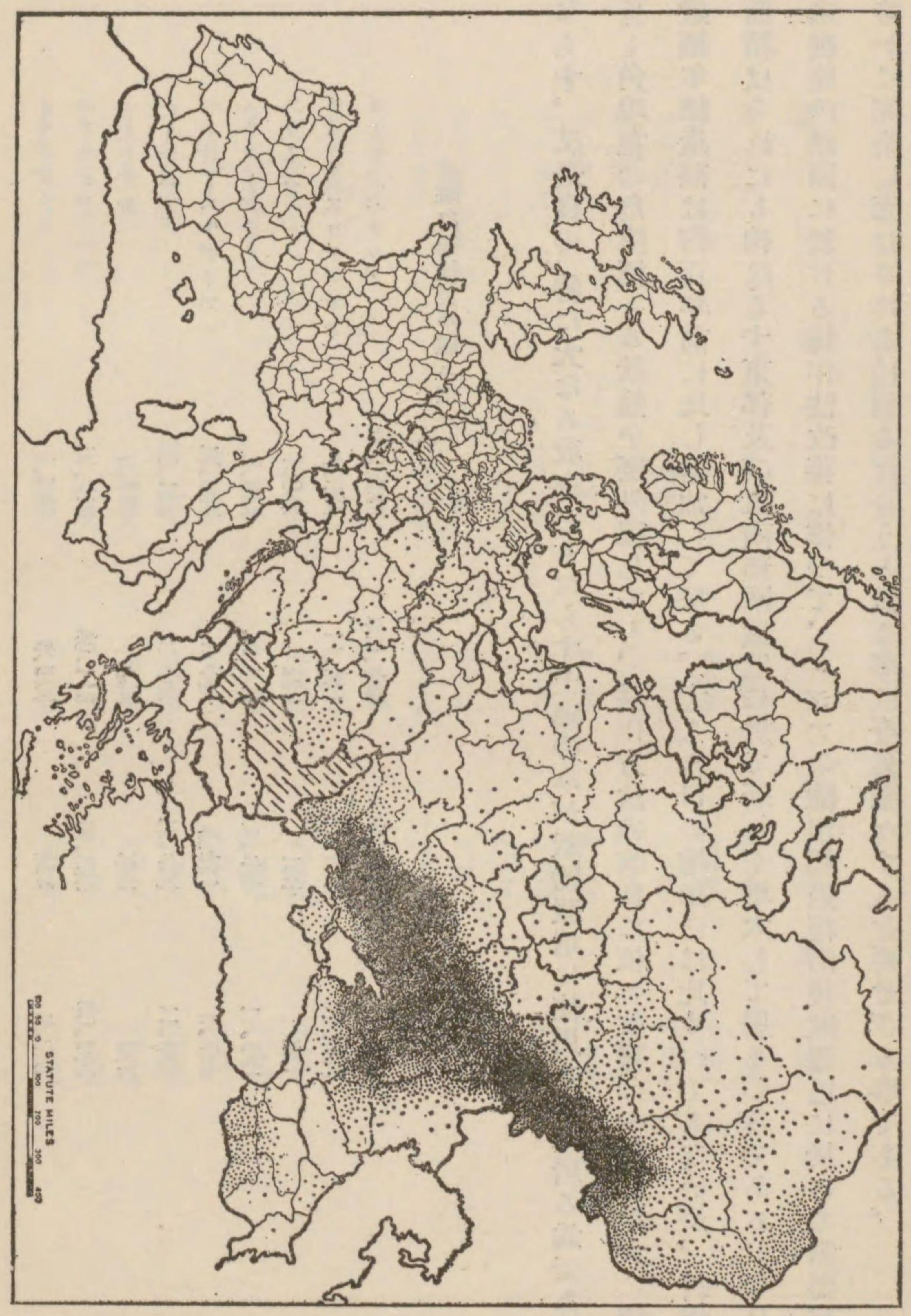
國際農業統計年鑑ニ依ル但シロシアノ産額ハ全部ヨーロッパニ算入ス

ヨーロッパ各國麥類產額（一九二六年單位百萬キンタル）

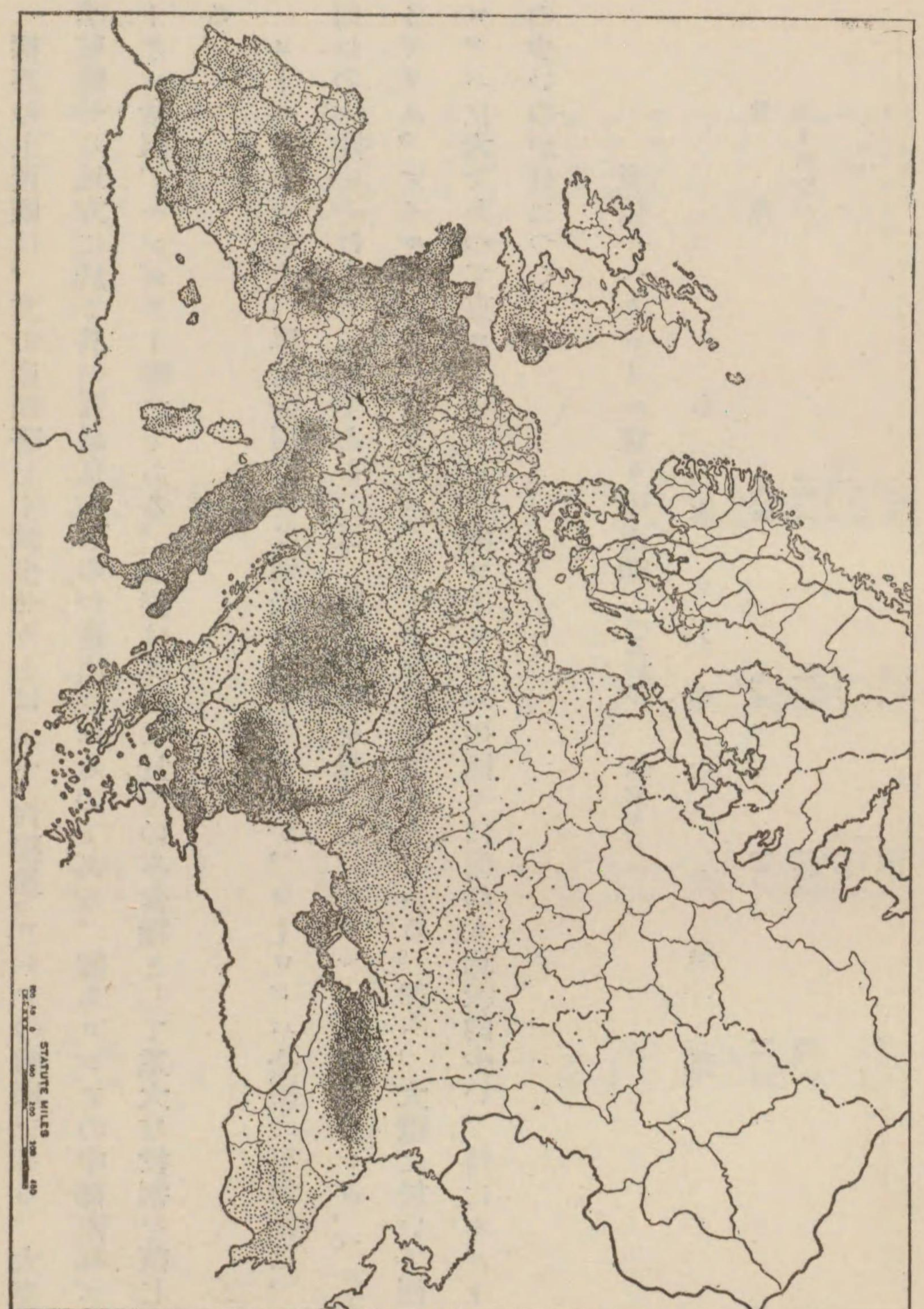
國名	小麥	ライ麥	大麥	燕麥
ドイツ	二五、九七二	六四、〇五九	二四、六二四	六三、二四六
オーストリア	二、五六九	四、七五三	一、九七六	四、三四八
ベルギー	三、四八三	五、一〇八	九一五	七、三六三
ブルガリア	一、一七六	二、〇三四	二、八〇六	一、〇七六
デンマーク	二、三八六	三、一七〇	七、二七五	八、七五七
スペイン	三九、八九八	五、九七〇	二〇、九六四	五、四七〇
エストニア	二三九	一、一四〇	一、三二五	一、三三一
フインランド	二五一	三、〇二四	一、五六一	五、九二七
フランス	六三、〇七七	七、六三	九、九八四	五三、八五三
イギリス	一三、八八〇	二四四	一〇、四三〇	二五、七三四
ギリシア	三、〇四〇	三九九	一、七七一	八〇六
ハンガリー	二〇、三八七	七、九八〇	五、五五四	三、六〇〇
アイルランド	三一四	五三	一、四五七	六、四九〇
イタリー	六〇、〇五〇	一、六五〇	二、四〇〇	五、九〇〇
ラトヴイア	五〇六	一、五五四	八、一八六	二、七五九
リアトニア	一、三八	三、〇八	二、四八九	三、一九五
ルクセンブルグ	一六九	九〇	四〇	四七二
ノルウエー	一六〇	一六四	一、一一六	一、九三五
オランダ	一、四九三	三、四六五	七四五	三、二七〇
ポーランド	一三、八一三	五〇、一一四	一五、五四六	三〇、四九八
ポルトガル	三、三二〇	九〇五	三三三	六八六
ルーマニア	三〇、一七七	二、八五六	一六、八四九	一一、五九〇
ユーゴースラヴイア	一九、四三九	一、八九三	三、七六一	三、五七七
スウエーデン	三、三六五	五、九二五	三、二七	一二、四九一
スウイス	一、〇九六	四〇二	一三三	四五一
チエツコスロヴアキア	九、二六九	一一、六六一	一一、六六一	一三、七九九
ヨーロツパロシア	二二〇、三五〇	二三七、九三四	二三七、九三四	一三一、一四二

國際農業統計年鑑ニ依ル

ならず、又最良の、特に大なる收獲をもたらす土地のみが穀物栽培に使用されて居る爲である。兎も角現在の危險極まる狀態を度外視しても、耕作方法の改良に依る收獲の一般的增大に依り穀類年總產額は約百年前に比し增加して居る。尤も人口の增加には比すべくもないが、耕作地面積はそれにも拘はらず東部及び東南部歐羅巴に於て著しく增大して居るのみである。今日尙未發達の諸國に於ける耕作法改善に依つて、ロシアの輸出超過復活後歐羅巴に於ける需要が何時かは完全に充たされるに到るだらうと云ふ事は今更喋々するを要せざる事である。



第十圖　ヨーロッパに於ける春小麥の產地



第十一圖　ヨーロッパに於ける冬小麥の產地

裸麥の主産國は、其の産額著しく減少せりとは云へ、尙獨逸、ロシアの兩國である。大麥は夏季乾燥せる地方に於て其の質最良のものが産出されるのである。卽ちロシアの中部南部ズーデーテン諸國、ハンガリー等之である。燕麥は英國に於てのみ食糧として重大な役割を演じて居る。

ヨーロッパの麥産の單位面積當りは別表の如くであるが、ヨーロッパ全體の平均額は、他の何れの大陸のそれよりも大である。又、國別平均を見ると、デンマーク、オランダ、ベルギー、イギリス、アイルランド、スウイス、ドイツ等が極めて大である。卽ち、大體に於いて西ヨーロッパに大であつて東ヨーロッパ、南ヨーロッパの國々は何れも比較的少い。特にポルトガルの少いのが目につく。

麥類一ヘクタール當りの産額（一九二六年　單位キンタル）

	小麥	ライ麥	大麥	燕麥
世界	九、五	九、四	一〇、七	一一、四
ヨーロッパ	一一、八	一一、七	一三、七	一四、八
ドイツ	一〇、七 一六、一	一三、五	一〇、七 一六、一	一八、三
オーストリア	一三、五	一三、一	一三、五	一三、八
ベルギー	二六、〇	二三、六	二六、〇	二七、二
ブルガリア	一一、八	一〇、九	一一、八	八、三
デンマーク	一三、三	一五、一	一三、三	一〇、七
スペイン	一一、六	七、九	一一、六	七、三
エストニア	一〇、八	一三、二	一〇、八	九、一
フインランド	一四、二	八、四	一四、二	一三、四
フランス	一四、五	九、七	一四、五	一五、一
イギリス	二〇、三	一六、四	二〇、三	二〇、四
ギリシア	七、九	八、一	七、九	七、四
ハンガリー	一三、一	一一、四	一三、一	一三、一
アイルランド	二五、五	一九、六	二五、五	二四、八
イタリー	一〇、一	一三、七	一〇、一	一一、八
セラトヴイア	九、九	六、二	九、九	八、六
リトアニア	一一、六	七、八	一一、六	八、四
ルクセンブルグ	一三、七	一三、二	一三、七	一六、四
ノルウエー	一九、三	一七、四	一九、三	一九、八
オランダ	二八、四	一七、六	二八、四	二一、二
ポーランド	一二、六	一〇、四	一二、六	一一、七
ポルトガル	四、三	三、八	四、三	三、四
ルーマニア	一〇、九	九、七	一〇、九	一〇、七
ユーゴースラヴイア	一〇、七	九、四	一〇、七	一〇、二
スウエーデン	一八、一	一七、五	一八、一	一一、九

スウイス	一六、九	二〇、二	一八、九	二三、〇	
チエツコスロヴアキア	一六、一	一四、〇	一六、一	一六、四	
ヨーロツパロシア	七、七	八、三	七、七	九、一	

國際農業統計年鑑ニヨル――ヨーロツパノ平均數ニハロシアヲ含マズ――ドイツノ欄ニ二數アルハ上段ハ冬作下段夏作ノ分ヲ示ス

小麥裸麥の一ヘクタール平均産額

國名	小麥	裸麥	國名	小麥	裸麥
	單位二百斤				
デンマーク	二七、六		フランス	一四、一	二、四
和蘭	二六、五	一五、二	オーストリア	二、一	二三、五
ベルギー	二五、六	一八、二	イタリー	一、四	七、二
アイルランド	二三、四	二四、八	南スラヴ	一〇、九	六、八
イングランド及びウエールズ	三、〇	—	ブルガリヤ	一〇、五	一〇、〇
瑞西	二、四	一三、二	スペイン	九、一	九、一
獨逸	一七、八	一〇、二	ルーマニア	七、七	七、六
		一四、七	ロシア	六、八	六、九

牧畜に極めて必要な玉蜀黍の産は、何と云つても北アメリカに劣るが、六大洲中では北アメリカに次いで産額を持つてゐるヨーロッパでは玉蜀黍は東南の地方、バルカンの諸國に於いて主として栽培されてゐる。中にも、ルーマニヤの産は、合衆國に次いで世界第二に位し、同國の主要な輸出品となつてゐる。

其他の耕作物中、氣候土地に就いても全く手輕な馬鈴薯は益々重要な位置を占めて居る。其の栽培區域は中歐を帶狀に走つて、アイルランドより北フランス、北ドイツ波蘭を通つてバルト海沿岸諸國に到つてゐる。其の耕作面積は全歐羅巴に於て一八八〇年以來殆んど三倍となつて居る。

前世紀初期卽ち英國に對する大陸封鎖中始めて甜菜より砂糖を得るに成功して以來、其の栽培は中歐一帶の地に盛んに行はるゝに到つた。勿論之には特に良好なる土地と夏季大なる暑熱とを要するのである。生産國にして同時に輸出地方としては、獨逸(中部黃土地方)ベルギー、和蘭、チエコスロバキヤ、波蘭、ロシア、フランス等がある。大戰に依り栽培面積及び砂糖産額は著しく減少し特に中歐に於て甚だしいが、現在は再び增大しつゝあるのである。歐羅巴粗糖産額は一九一三―一四年には八億二千四百萬噸、一九二六―二七年には再び六億九千六百萬噸を數へて居る。此の中獨逸は二十四パーセント、チェツコスロバキア及びロシアは十五パー

ヨーロッパ各國農產額（一九二六年　單位百萬キンタル）

國名	玉黍蜀	馬鈴薯	甜菜	煙草
世界	一、一九〇、一六六	一、七一七、一一五	五三七、〇一四	一四、七〇五
ヨーロッパ	二〇六、一五六	一、五三二、〇一六	四六三、八五〇	三、八七三
ドイツ	—	三〇〇、三〇七	一〇四、九五三	—
オーストリア	九七二	一二、九七八	四、八〇七	—
ベルギー	—	三〇、〇二二	一六、八二八	六〇
ブルガリア	七、三七一	四九三	三、〇〇〇	二四〇
デンマーク	—	八、一一八	九、八四三	—
スペイン	四、三六六	三〇、二〇八	一八、七五一	—
エストニア	—	九、二五九	—	—
フインランド	—	八、五一〇	三三一	—
フランス	三、一五六	一二一、三六五	四八、六〇三	一二四
イギリス	—	四八、〇六七	一〇、七九五	—
ギリシア	—	五一〇	—	五二五
ハンガリー	一九、四四三	一九、一七一	一四、四四六	二六〇
アイルランド	—	一九、六二八	八七〇	—
イタリー	二九、九九六	三三、一一〇	三三、九六九	四四四
ラトヴイア	—	一〇、一三五	—	—
リトアニア	—	一、六、六四八	—	—
ルクセンブルク	—	一、一六五	—	—
ノルウエー	—	八、九四六	—	—
オランダ	—	二九、七三五	二一、一〇八	—
ポーランド	一、〇五八	二四八、七八六	三七、二四八	—
ポルトガル	三、一一八	二、五九五	—	二三
ルーマニア	六〇、八三四	一九、四一四	一二、八四八	—
ユーゴースラヴイア	三四、一〇一	九、四〇〇	五、九一九	一八三
スウエーデン	—	一八、七九七	一、四二〇	一四八
スウイチ	三三	六、一〇〇	五〇五	八
チエツコスロヴアキア	二、六五五	五〇、四六七	六五、八七二	二
ヨーロツパロシア	三七、〇五三	五〇七、七〇四	六二、八七二	七〇
				一、六七一

國際農業統計年鑑ニヨル

蜀玉黍世界產數ハ一九二五年分　馬鈴薯ギリシアは一九二三年分

セント宛――ロシアはも早自國の需要すら充たし得ず――波蘭は八パーセントを占めて居る。

煙草栽培はイタリー、ブルガリア、南スラヴ、ギリシャ及びハンガリーに於て行はれ、其の栽培面積は急激に增大しつゝあるが、アメリカ合衆國に壓倒されて、世界市場に於ける意義は少い。

纖維工業の爲の纖維植物栽培は、綿布が亞麻布を驅逐して以來價値を失ひつゝある。亞麻の重要產地は北海及びバルト海沿岸の濕潤なる海洋氣象的地方である。バルト海沿岸地方は尙世界產額の八十二パーセントを產し、之に次いでベルギーが高價なる亞麻纖維の輸出國として重

ヨーロッパ各國麻類產額

（一九二六年單位千キンタル）

國名	亞麻	大麻
世界	五、三三一、〇〇〇	七、一八九、〇〇〇
ヨーロッパ	五、二四六、〇〇〇	六、八五三、〇〇〇
ドイツ	三三、六八〇	一、一四八
オーストリア	三四八、七九四	九四
ベルギー	六〇〇	一七、五〇〇
ブルガニア	七、一三三	一六、九七三
スペイン	九二、六四七	
エストニア	一五、三四四	
フインランド	一九九、九七六	一〇、三四三
フランス	六一七	
イギリス	一四、四八七	
ハンガリー	一二、六四四	
アイルランド	二五、〇〇〇	五二、〇九七
イタリー	二五三、一七九	
ラトヴハア	三八三、七二〇	三一、七二五
リトアニア	一〇四、五四六	三〇〇、六六七
オランダ	五九五、六三三	
ポーランド	二一、七四六	一四四、七〇〇
ルーマニア	七五、二四二	
ユーゴスラヴイア		
スウーデン	一一〇、四〇〇	五六、六〇八
チエツコスロヴアキア	二、九二九、〇〇〇	四、八五九、〇〇〇
ロシア		

大な役割を演じて居る。麻の栽培はイタリー並びにバルカン諸國に於て盛んに行はれて居る。スペイン、南部イタリーの木綿栽培は殆んど衰滅して居る。

葡萄の栽培は周知の如くフランス、及び南歐を重要地として居る。八千五百ヘクタール以上を算する歐洲全葡萄園面積中、五十八パーセントをイタリー、十八パーセントをフランス、十九パーセントをイベリア半島諸國、三パーセントをハンガリー、一パーセント弱を獨逸が占めて居るが、多くの國に於て其の面積減少しつゝあるのである。葡萄園の手入極めて良好なる爲其の產額に於てはフランスが第一位である。（一九二四年に於ては總產額イタリーの二十八パーセントに對し四十四パーセントを占めて居る。）其の他の地中海沿岸地方に特有なる栽培植物に就いて云へば、撒欖がイタリー及び南フランスに無花果がギリシヤに、アグルーメ（Agrumen）がイタリー、特にシシリー、並びにスペインに栽培されて居る。

二　牧畜業

牧畜の各部分に就いても亦、穀類栽培から牧場經營に全力を移し、價値多き家畜飼料を生產して出來るだけ大規模に合理的に牧畜を經營し始めたる西方諸國と、自然の牧場の廣大なる面積に、大規模な半ば遊牧的な牧畜を經營して、國民數に比例して出來るだけ多くの家畜數を得

んと努力しつゝある東部及び南東部歐羅巴諸國との間には又自らなる對立があるのである。此の國民經濟的な理由に依る相違の外に、氣象的な家畜分布地帶の差異が存在してゐるのである。卽ち北部歐羅巴に於ては、單位面積に於ける牛羊の數は莫大なものであるが、豚山羊の數は著しく少いのである。中部一帶の地には牛及び豚が重要な家畜であり、此の外大平原には又牧馬が重要な設割を演じて居る。南部歐羅巴に於ては山羊、羊、驢馬が主なる家畜で、ポー河の流域の平原に於ては牧牛も近來盛大となつて來て居る。牧牛の最も盛んなる地方は西部又び中部歐羅巴である。濕潤な、人口さして稠密ならざる地方、特に生產豐かなる北海岸沼澤地、デンマーク、和蘭、愛蘭等は國民數及び單位面積とに關し最大比例數に到達し、酪農業の生產品輸出に於ても秀れて居る。山國に於ては瑞西があり、人口稠密なるイギリスにあつては、其の經營狀態良好なるに係はらず、牛の數は比較的僅少である。牧馬に於ては森林諸國の比較的鈍重な種類と東南歐羅巴草原の小型のものとを分つ事が出來る。豚は馬鈴薯玉蜀黍の栽培盛んな地方、槲の森林ある地方に最も多く分布して居る。故にデンマークの外獨逸ハンガリー並びに北部バルカン諸國は人口數に比例して最も多數を有して居るのである。牧羊は海外特に高價な纖細な羊毛を廉價に提供し得るオーストラリアに壓倒されて數世紀以來退步の狀態にある。(歐洲に於け

ヨーロパッ各國家畜飼養頭數（主トシテ一九二七年）

國名	牛	馬	羊	豚
ドイツ	○一七、九八二、八六四	○三、八〇五、五九二	三、八一三、三七四	○三二、八八〇、三一八
オーストリア	二、一六二、三四六	二八二、六五一	五九七、四一三	一、四七三、一一二
ベルギー	一、七三八、八一四	二五六、四六五	一八五、三七三	一、一二四、二四三
ブルガリア	一、八七七、一〇八	三九八、二三七	八、九二三、六〇四	一、〇八九、六九九
デンマーク	二、九二三、六三六	五四六、四〇五	二三二、六五九	三、七三〇、七三〇
スペイン	三、七九四、〇二九	六九七、六七八	○一〇、〇六七、一〇〇	五、二六七、三三八
エストニア	五九九、一三〇	二二六、三六〇	六六五、九七一	三三三、一四四
フインランド	一、八七一、八六五	三九五、九六八	一、三六八、一七三	四一七、七二三
フランス	○一四、九四〇、九六〇	○二、九二七、一二〇	○一〇、六九三、一一一	六、〇一九、四五〇
イギリス	八、一八三、〇二九	○一、三四三、一三一	○二五、一〇八、一〇一	三、一二四、四一二
ギリシア	九二四、七五二	二八〇、五二一	六、九五〇、五四一	五〇九、六三六
ハンガリー	一、七九八、五五二	九〇三、三二六	一、六一〇、七一六	二、三六六、六六四
アイルランド	四、〇四七、〇一三	四二八、五〇二	三、一三〇、三〇八	一、一七七、七三七
イタリー	六、一三九、三四一	九八九、七八六	○二、七五三、九一〇	二、三三八、九二六
ラトヴイア	九六六、六〇〇	三六九、三〇〇	一、一二七、五〇〇	五二四、〇〇〇
リトアニア	一、一二八、〇〇〇	六一六、〇〇〇	一、四一〇、〇〇〇	一、〇一〇、〇〇〇
ルクセンブルグ	一〇〇、九二五	一八、三一八	一〇、五六三	一二〇、九一八
ノルウエー	一、二〇九、四五〇	三八三、三六五	一、六〇八、一二二	二九九、六六九